



Title	工業衰退地とその近傍における文化芸術活動を起点とした地域再生に関する研究
Author(s)	李, ロウン
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67158
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

博士学位論文

工業衰退地とその近傍における文化芸術活動を起点
とした地域再生に関する研究

李 ローウン

LOWOON LEE

2017 年 7 月

大阪大学大学院工学研究科

工業衰退地とその近傍における文化芸術活動を起点とした地域再生に関する研究

梗概

これまで日本の経済成長を牽引してきた湾岸部の重工業地帯は産業構造の変化に伴う大規模工場の撤退、移転などによって、工場跡地が増加し、ブラウンフィールドなどの問題が発生した。また、その工場の労働力を供給してきた工業地近傍の住宅地は、そこで働いていた労働者が転出して、多くの空き地、空き家を抱えるようになり、地域の衰退が一層進むことになった。本研究は日本有数の工業地帯である大阪市湾岸部において、地主である地元企業が積極的に関与し、文化芸術を用いたまちづくり活動を行っている北加賀屋と梅香・四貫島の2地区を取り上げ、そこでの活動の取り組みと事業形態、関係者の意識などを分析することで、民間主導による自立的な地域再生に資する基礎的要件を得ることを目的としており、全4章で構成した。

第1章は序論であり、研究の目的と背景、関連する既往研究について概要を示すとともに、我が国の工業衰退地の現状と文化芸術活動による地域再生の取り組みを概観し、本研究の位置づけを示した。

第2章は産業遺産の利活用を契機とした文化芸術活動による自立的まちづくり事業として北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ(KCV)構想を取り上げ、事業主体と活動拠点へのインタビューを行うとともに、地域イベントでのアンケートを実施し、KCV構想の取り組みとその意識、事業形態を分析した。当該活動では旧名村造船所跡を中心に18か所以上の活動拠点が形成され、文化芸術を用いた地域交流を促進する仕組みづくりが行われている。それが実現できた背景として産業遺産登録を契機に「地域活性化委員会」を組織できたこと、地主である地元企業が文化芸術活動に助成し、自らが事業主体となって所有する空き家や空き工場を利活用して活動拠点の形成を進めたこと、不動産事業として、空き家・空き工場対策の一面を持つことで、公的財源に大きく依存せず自立的・持続的なビジネスとしての展開が可能であったことなどを明らかにした。

また拠点入居者(アーティスト)は安い賃料、自由な雰囲気について満足しており、住民もアーティストが居住することで街の活性化や若返りにつながると肯定的に捉えていること、産業遺産である旧名村造船所跡を別用途に利活用することで新しい価値を生み出していると評価されていることなどを示した。一方、制度上の課題として産業遺産を有するこのような地域では工業用途に係る規制が多く、様々な障害が存在すること、またそれに関連して施設の大規模な改修は見られず、地域住民へ与える影響は少ない反面、新たなまちづくり活動が外部から分かりにくくなっていることなど、工業衰退地における産業遺産を契機とした自立的な地域再生のための留意点を示した。

第 3 章は産業遺産のような地域資源を持たない工業衰退地近傍の住宅地における創造的活動を起点とした地域再生の事例として梅香・四貫島地区におけるまちづくり活動を取り上げ、事業主体と活動拠点へのインタビューを行うとともに、地域イベントでのアンケートを実施し、その活動の経緯と取り組み、事業形態を分析した。当該活動は地主である地元企業の関与によって開始され、その後地域に根付いた入居者らによって運営が継承され、現在 28 か所以上の活動拠点が形成されている。それが実現できた背景として地主である地元企業の支援があったことに加えて、活動拠点の入居者である建築家はその運営を引き継ぎ、地元不動産会社と連携して老朽化して住み手がつかない空き家を原状回復義務免除として、廉価な家賃設定で仲介・交渉できたこと、「アートイベント」から「物件ツアー」「お試し暮らし」「空き家の斡旋」「空き家の改修」に至る一連の入居促進のための枠組みが用意できたことなど、入居者自らによる文化芸術活動を起点としたまちづくりを進める上での重要な知見を明らかにした。

また拠点入居者は北加賀屋と同様に安い賃料、自由な雰囲気について満足しており、来訪者や住民の当該活動に対する評価も高く、一連の入居促進策が用意されていることでアーティストだけでなく、街に興味を持った一般の会社員や若者の入居にも繋がっていることなどを示した。一方、まちづくりにおける課題として新規入居者が増えるとともに、自由な活動を重んじるアーティストをまとめることが難しくなりつつあること、またこの地域は新規入居者に対して排他的な雰囲気が少ないが、家主にとってはアーティストの生活や活動の特殊性に不安を感じていることなど文化芸術活動を用いた地域再生ための留意点を示した。

第 4 章では、本論文で得られた事項を整理し、北加賀屋と梅香・四貫島の 2 つの地区におけるまちづくり活動の取り組みを通して、工業衰退地とその近傍の住宅地における文化芸術活動を用いた民間主導による自立的な地域再生に資する基礎的要件として取り纏めた。

目次

第1章 序論	1
1.1 研究の背景と目的	3
1.2 既往の研究と研究の位置付け	4
1.3 論文の構成	11
第2章 産業遺産の利活用を契機とした文化芸術活動によるまちづくり活動の取り組み	15
2.1 序	17
2.1.1 北加賀屋地区の概要	17
2.2 研究の方法	19
2.3 結果と考察	22
2.3.1 北加賀屋地区のまちづくり活動及び活動拠点の形成経緯	22
2.3.2 北加賀屋地区のまちづくりの取り組みと運営主体の意識	25
2.3.3 北加賀屋地区における活動拠点入居者の意識	31
2.3.4 北加賀屋地区における活動拠点の施設整備状況	35
2.3.5 北加賀屋地区における地域イベント来訪者の意識	38
2.4 結論	43
脚注	46
第3章 工業衰退地近傍における文化芸術活動によるまちづくり活動の取り組み	49
3.1 序	51
3.1.1 梅香・四貫島地区の概要	51
3.2 研究の方法	53
3.3 結果と考察	55
3.3.1 梅香・四貫島地区のまちづくり活動及び活動拠点の形成経緯	55
3.3.2 梅香・四貫島地区のまちづくりの取り組みと運営主体の意識	61
3.3.3 梅香・四貫島地区における活動拠点入居者の意識	67
3.3.4 梅香・四貫島地区における活動拠点の施設整備状況	71
3.3.5 梅香・四貫島地区における地域イベント来訪者の意識	73
3.4 結論	77
脚注	80

第 4 章 結論	83
4. 結論	85
謝辞	91
参考文献	93
図表リスト	97
資料	99
研究業績	125

第 1 章 序論

1.1. 研究の背景と目的

1.2. 既往研究と研究の位置付け

1.3. 論文の構成

第1章 序論

1.1. 研究の背景と目的

これまで日本の経済成長を牽引してきた湾岸部の重工業地帯は産業構造の変化に伴う大規模工場の撤退、移転などによって、工場跡地が増加し、ブラウンフィールドなどの問題が発生した。経済産業省[1]も「近年、産業構造の変化、産業の空洞化、環境の変化に伴う操業環境の悪化により、工場の移転・統廃合・廃業による工場跡地が全国各地で発生している」として、「これら工業衰退地の発生は雇用の喪失、地方税収の減少など、地域経済に大きな影響を及ぼしている」と述べている。またその工場の労働力を供給してきた工業地近傍の住宅地も、そこで働いていた労働者が転出して、多くの空き地、空き家を抱えるようになり、地域の衰退が一層進むことになった。またこのような土地の所有者にとっても、その不動産の活用と地域再生が喫緊の課題となっている[2]。内閣府によれば、と述べており、地域再生の目標として「個々の地域において、地域の特性、資源を顕在化させ、これらを有効に活用した地域産業の振興、生活環境の改善、観光・交流の促進等の地域の創意工夫を凝らした具体的な取組を推進することにより、自主的・自立的で持続可能な地域の形成を図ること」としている[3]。

また、工業衰退地では、そこに残された工場施設が日本の近代化と高度経済成長を牽引した貴重な遺産であるとして見直されてきており、その保存と利活用を契機としたまちづくり活動も各地で見られるようになった。経済産業省は2007年から「近代化産業遺産群 33・続 33」を公表して、その保存活用を支援している。しかしながら同省は「近代化産業遺産の保存に向けては、地域が近代化産業遺産を活用し、その対価を得、これにより、自主的・持続的な保存がなされるようなビジネスモデルについて検討していく必要がある」[4]として、その運営を公的財源に頼らず自立した事業として継続していくための検討を求めている。またその遺産施設についても「直ちに、文化財としての評価を受けることが出来ないものも多く存在する」としており「厳密に保存すべきものと必要な手を加え別用途に利活用すべきもの等の仕分け」が重要であると述べている[4]。

一方、製造業の比重の低下に対して知識集約型産業、中でも文化芸術の活用による既存産業の再生や新産業の創出等を行うことで持続的な発展を目指す取り組みがみられる[5]。特に製造業の流出や人口減少などによって衰退した地域を文化芸術活動によって活性化させようとする取り組みが全国で行われている。アーティスト・イン・レジデンス等の活動もその一つで、芸術家のある期間、地域に招聘して作家活動をしてもらうことで新たな産業を育む契機に利用する取組や大規模な文化芸術イベントによって多くの集客を集めて地域の活性化につなげる活動も実施されている。ただこのような文化芸術を用いた取り組みも開始当初の効果はみられるものの、その活動が一過性の現象にとどまることなく、継続し、創造的人材が定住・交流することで、自

主的・自立的で持続可能な地域が形成されていくまでには多くの課題が残されている[6]。総務省によればこのような活動も「行政の予算に大きく依存しすぎると、予算縮小後に取組を継続することが難しくなる場合もある」として民間主導に移行することが望ましい[6]と述べており、その活動が民間のビジネスとしても成立することで継続が可能となり地域再生にもつながると考えられる。

以上のことから、本論は産業構造の変化に伴って衰退が進む工業地とその近傍において、産業遺産の利活用や文化芸術活動を起点としたまちづくり事業のプロセスを通して、民間企業による地域再生のための手がかりを探ることを目的とする。

1.2. 既往研究及び研究の位置付け

1) 工業衰退地

まず、工場跡地に関する研究として、平野ら[7]は、貝塚市における繊維系工場を対象として1976年時点に立地していた工場及びその関連工場跡地の用途変遷を調査した結果、30年間の間に約8割が他の用途へ変更されたこと、工場の規模が小さいほど再開発がなされず放置される傾向にあることなどを明らかにしている。

また工場跡地等の再開発において障害にもなる土壤汚染やブラウンフィールドに関する研究として、宮川ら[8][9]は工場跡地等の土壤汚染対策と再開発について、日本・オランダ・ドイツ・イギリスの土壤汚染対策に関する法制度を比較し、さらに各国の跡地利用・再開発と連携した土壤汚染対策の計画の事例の検討により、対策計画を決定する要因は、現在の土地利用状況、汚染状況、跡地利用であること、現在の土地利用状況は現在の土地利用の有無、対策区域内や周辺に居住する住民の存在を表わし、処理対策や跡地利用の対応に差が見られること、汚染状況は過去の土地利用形態や汚染物質の特徴のことで、それぞれ処理方法の選択に関連していること、跡地利用も処理方法に関連し、跡地利用計画とともに処理方法が決定されていることなどを明らかにした。高橋ら[10]は中小工場が密集している大阪市東部地区をマージナルエリアとして製造業の跡地の現地調査を行い、特定施設の廃業による土壤汚染調査件数は猶予件数に比べて少ないこと、非汚染地区に比べて汚染有または未確定の地区には施設を残し廃業した割合が高いこと、汚染がないことが判明されたら住宅用途への転用がある程度見込め更新されやすいことなどを明らかにした。

多くの工業地域が衰退し、住宅地等へ開発されることによって、住工混在地域が増え、モノづくりの街としての住工共生と職住近接に関する研究が行われている。中出[11][12][13]は1980年代に東京都大田区等を対象とした一連の研究において、工場用地が減少しその跡地に住宅建設が多く見られることを指摘しており、工場用地の規模に関わらず住宅用途に変化する傾向があること、住工混在地区に近年建設されたマンションは職住近接をはかれる比較的安価な持ち家

の供給との性格を持ちうることを指摘し、街路を生産系と生活系に分ける等の整備により住工共存を目標とした地域整備を行うことが必要であるとしている。また、和田ら[14][15]は大田区を事例として昭和 42 年～53 年には高密の街区において工場・住宅ともに増加し、昭和 53 年～62 年には低密の街区において工場用地の敷地分割を伴う小規模敷地の工場やミニ開発の増加が生じていることを指摘している。さらに、大規模な工場の立地する街区では敷地は分割されずにマンションや公園等へ転用され、一定以下の規模の敷地の場合には、工業系や住宅系のミニ開発などにより敷地が細分化されるという傾向を指摘している。

次に、神吉ら[16]は大阪市西淀川区姫島地区を事例として、都市型公害地域における住工混在空間の変化と環境改善課題について明らかにしており、公害激甚期と 1997 年の①市街地の空間的状況、②居住者層、③居住者からの地区内の環境評価の 3 つに着目し、工場跡地の多くがマンションや集合住宅、駐車場に変化していること、利便性がよいわりに安価な住宅を取得して来住する世帯が多く見られ、公害激甚期と比べて住み続け意向が高いこと、工場そのものから起因する公害は緩和されており、工場に係わる車両に起因する公害に住工混在地域の公害原因が変化していることなどを明らかにしている。また、これらに基づいて④居住環境の改善課題として、車の侵入制限の対策、大型車両を制限するゾーンの設置、公共空間における緑化などの緩衝作用の必要性等を指摘している。次いで、安藤ら[17][18]は東大阪市における住工混在地域を取り上げ、3 地区の工場騒音を調査分析し、工場と住宅の共存条件の可能性を検討するとともにその共存的整備のために必要とされる課題を考察した。工場騒音は標準値を超えているところが 48.1%であり、比較的容易な対策で標準値に収まるケースが約 8 割であるが、工場の規模、経済的理由などにより騒音対策が難しいことから、共存が難しい場合が多いとしている。また居住者の環境評価により、工場問題よりも交通公害、路上駐車等の車両の問題が多いこと、生活利便性により居住継続意識も高いこと、現在の土地利用を基礎にしながら生産、生活道路の使い分け等を考慮した対策が必要であることを明らかにしている。また、清水ら[19]は住工混在地の事業者と工場跡地に建てられた住宅に転居してきた住民の意識を調査し、その相違点を明らかにしている。事業者と転居住民は「交通の便」を立地条件としていることから、今後も工場跡地は住宅用地として転用する可能性があること、工場の業種や地域全体の街路の構成などが工場に対する意識、地域への満足度に関係していること、事業者も住宅の存在を気にしており、工場跡地の住宅進出は生産環境を悪化させる要因として捉えていることなどを明らかにしている。

なお、岡村ら[20]は一定期間地域内の複数工場を一斉公開するイベント「オープンファクトリー」に着目し、台東、大田、墨田、燕三条等の 8 事例を抽出してその到達点や可能性を論じた。「オープンファクトリー」導入の背景には、①クリエイティブな環境の創出、②モノづくりと住まいの関係の再構築、③モノづくりを基盤とした地域ブランディングという地域課題があり、イベントの発意には、デザインやまちづくり等の地域外の専門家の関与があることを明らかにした。次

に、イベントとしての地域展開性や時限性を活かし、(1)地域内の回遊促進、(2)モノづくりと他要素の連携、(3)モノづくり資源の集約・ネットワーク化、(4)製品開発や空間利用の実証実験、(5)製品の販売促進を目指した企画が提供されていることを示し、「工業振興」、「住工共生」、「地域振興」の3つの目的を見出しており、「オープンファクトリー」が各地で定着し、イベントを契機に新たな動きが生まれている状況を踏まえ、モノづくりのまちの活性化手法としての可能性を指摘した。

2) 歴史的建造物・産業遺産に関する研究

市原ら[21]は近代化産業遺産総合調査報告書をはじめとした各種データより近代産業遺産の保存及び解体要因について考察しており、九州における近代産業遺産の特徴として1890年代を境に全産業的な広がりを持ち、質量共に増加したこと、さらに運輸倉庫物件をはじめとする交通分野に多くの遺産が現存することを明らかにした。また解体の要因としては路線価が比較的高くまた構造的改装が難しい物件、保存転用が行われやすい遺産の条件として構造的希少性、歴史的価値が認められていること、敷地面積が狭く周囲の人口密度や地価が低いこと、煉瓦材・交流施設など近代を感じさせる用途・素材であることなどを挙げている。また福井ら[22]は大阪、兵庫の繊維系産業遺産施設を取り上げ、その保存活用から運営に至るプロセスにおける事業主体の役割を分析することで、公共が介在する場合は企画から実現までに長い調整準備期間が必要であること、一方、民間単独の事業主体の場合は企画から比較的早期に実現されているが、その背景には企業トップのリーダーシップと経営判断に負うところが大きかったこと、また商業開発の場合はそれを残すことによって集客が見込め事業採算性が確保される必要があることなどを示した。更科ら[23]は横浜港と函館港を対象として歴史的港湾施設の保存に係わる法制度に着目し、「歴史的な港湾施設」の現状と法制度の関係を踏まえることで、現行法制度の指定状況においては、建造物に比べて土木構造物はその価値が認識されにくく、指定割合も少ないこと、歴史的港湾施設の保存にはその立地場所に応じて「群指定」と「単体指定」を使いわけることが重要であること、法制度の有用性・限界性として、現状を改変させない維持管理の原則が継続利用されている場合難しいこと、歴史的価値のある部位を限定して保存する柔軟な改変が可能な基準が望まれること、保存費用の金銭的補助が必要なことなどを指摘した。いずれも歴史的建造物のハードウェアの保存と活用に着目しており、その周辺地域やまちづくりの視点から論じているわけではない。

一方、歴史的建造物の転用を扱った研究として、白木ら[24]は住民による市民セクターの設立から対象物件を取得した北海道小樽無尽ビルと油津赤レンガ館の2事例を取り上げ、それぞれの転用に関わった主体の働きから転用のプロセスを分析した。転用とまちづくりへの展開が可能であった背景として、両地区において長年培った個人主体のネットワークが存在したこと、地

縁性の強い住民が発端にいたこと、建造物の取得には自治体の保存活動から始めたが、複数の個人主体が参加したことで個人負担を軽減できたこと、取得後の転用やまちづくりにおいては公的な助成金を効果的に活用することが重要であること、まちづくりの展開においては参加主体の多様化が重要であることなどを明らかにした。また同氏ら[25]は歴史的建造物の転用を起点として周辺の様々な活動が波及している実態に着目し、北海道における10事例を対象に、その波及構造とそれを支えた条件を考察している。ただ、これらは歴史的建造物の転用プロセスとその波及のための条件について着目しており、転用後の評価や持続可能性について考察しているものではない。

3) 空き家・空き工場等に関する研究

原田ら[26]は大阪市空堀地区における新規流入者の既存の空間活用プロセスに着目し、セルフビルド[注1]や創造的な機能との関係から創造的な暮らし方の可能性を考察した結果、独立店舗や兼用住居では約6割がセルフビルドを行っており、新規流入者の多くは風情あるまちなみや建物と共に、オリジナルな空間づくりができることを気に入って空堀地区での建物利用を行っていること、独立店舗や兼用住居においてセルフビルドを行った人は、行わない人に比べて創造的機能を持つ暮らしを行っている人が多いことからセルフビルドと創造的機能には関係性があるとしている。また、脇田ら[27]は大阪市中崎町を対象にした現地調査をもとに、非木造建築物よりも長屋や戸建て住宅等の木造建築物の方がコンバージョンの割合が高いことを示した上で、5つの空間手法によって内部空間を新しい機能に対応させるとともに、ファサードについては小規模な改修・設えの工夫を行っていること、路地に対しても拡張を行うことなく元の形状のまま多様な物品の配置が許容されることで、新しい建物用途によるあふれ出し・表出の場として路地が機能し得ていることなどを明らかにしている。しかし、いずれも空き家のハードウェア的整備に着目しており、まちづくりの観点から運営方法や取り組みについて考察しているものではない。

空き家活用の取り組みについては、高橋ら[28]はドイツ・ライプツィヒにおける HausHalten e.V.がおこなっている Wächterhaus(Wh)という取り組みに着目し、暫定利用の段階で用途を選定し、建物を活用したことで、Wh 期間後にも直接契約につながっていること、Wh 期間中に建物の修繕・改装を行うことで期間終了後に同用途の新規希望者の活用にもつながるきっかけとなっていることなどを明らかにした。また住民の意識については、門内ら[29][30][31]は京都市下京区の修徳学区まちづくりにおけるワークショップを通して、住民の空き家問題に対する意識が深まり、多様な主体が関わり合うことで新しい空き家利活用の方法を示し、また全ての空き家を体系的に捉えパターン化することで空き家の利活用によるエリアデザインの可能性を示した。またまちづくり観点から、矢吹ら[32]は善光寺門前町地区を対象として空き家再生活動の手

法と事業を取り巻く各主体の役割及び支援策の内容、新規居住者の入居動機及び市街地との関係性を調査した結果、空き家再生においては不便さを魅力と捉える居住者層の発掘や新たな活動の場としての歴史的市街地の再評価が重要であること、また歴史的市街地環境や地区の伝統的な祭礼行事等を活用することで、空き家の再生効果の地区への波及を行う事が可能であること、行政等による資金的支援の下で専門家との連携による職能補完の運営体制の構築ができたことなどを明らかにしている。しかしながら、これらいずれも公的資金によるものであり、民間による自立的まちづくりについて取り上げているわけではない。

4) 文化芸術活動に関する研究

上段ら[33]は大阪市中央区空堀地区で行われる「からほりまちアート」を事例として取り上げ、まちなかを展示の場とする祭の展示場所の空間特性と利用状況、来訪者の行為について分析した結果、内部展示は細街路や路地でアクセスする立地にある長屋や町屋の歴史的な建物で行われることが多いこと、外部展示は街区内の街路や路地・細街路で行われており、また公園だけでなく路地奥にある空地などを展示空間として活用していること、歴史的建物の格子や庇といった要素が作品展示の背景として位置づけられ、来訪者が地域資源に目を向けるきっかけを作り出していること、来訪者は作品が展示されることで日常には見られない多様な行為が誘発されていることなどを明らかにしている。また春日ら[34]は「あいちトリエンナーレ 2010」の長者町会場を調査対象とし、鑑賞者と作品、設置環境の3つの相互の関係について分析し、鑑賞者は人が多く集まり、賑わいのある街路を鑑賞経路の主動線として選択している一方、地区把握者は歴史的な場所の影響を受けた鑑賞経路を選択していること、「非日常的な」、「単純な」、「なじんでいる」印象をもった作品が評価されていること、また都市部の地区全体を会場とすることで、作品が設置された公共空間や建物、街並を含めアート作品として捉えて鑑賞する行為を誘発していることなどを明らかにしている。しかし、これらはまちをアートイベントの展示場所として捉えており、自立的・持続的なまちづくりとの関係を扱っていない。

まちづくりの観点からは、荒川ら[35]は向島地域での一連のアートプロジェクトを対象として枠組みを超えた新たな文化活動の派生要因と地域多主体型アートプロジェクトが市民や地域に与える影響について明らかにした。向島地域での一連のアートプロジェクトが行われた結果、地域社会に参加したいがきっかけのなかった人々にとって地域での文化活動は地域との接点となり、市民の社会的包摂において評価できること、地域多主体型アートプロジェクトから派生した文化活動の内容には市民の興味や地域における問題意識が強く反映されており、地域の潜在的ニーズを顕在化することが肯定的影響について評価した。次いで、田中ら[36]は、大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレの「空き家プロジェクト」を対象として、空き家を芸術作品として再生するための手法や技術を明らかにした上で、2006年度大地の芸術祭では地域住民や他地

域にその存在を認知させることができ、越後妻有地域の財産となっていたことから、「芸術の要素」による空き家再生の有効性を明らかにした。また、地域、芸術の要素、空き家、人との相互関係を密接にするような芸術を発信していくこと、そして作品制作にあたり地場産業と結びつけ、越後妻有地域を活性化させる必要性を今後のあり方として挙げている。さらに、小林ら[37]はアートを活用した過疎地域活性化の事例として「越後妻有アートネックレス整備事業」を取り上げ、事業経緯や整備構成から事業者側、住民側の意識を調査・分析しており、事業者側は地域の特性を財産として地域の魅力の再確認と地域文化の創造性を秘めた事業として、「大地芸術祭」により観光客による経済活性化を期待しているが、住民側の理解をまだ十分に受けておらず、アートによる過疎対策は3年毎に一時的な交流人口増大に頼っており、交流人口による集客がどのように人口増加をもたらすかは不明であるとの問題点を指摘した。

国内外からアーティストを一定期間招聘して、滞在中の活動を支援する事業であるアーティスト・イン・レジデンス(AIR)を始めとする文化施設に関する研究としては以下のような研究がなされている。まず、鈴木ら[38]は日本のAIR関連施設を調査対象に文献調査と実地調査などにより、事業数は1990年代以降段階的に増加し、特に1997年に文化庁が実施した「AIR事業」助成とともにそれ以降の5年間に急増していること、2001年以降は文化庁の助成が停止されて減少傾向にあること、運営母体は1997年以降特に市区運営による割合が増加する傾向にあることなどを明らかにした。また、中嶋ら[39]は「事業の継続性」の観点から27事例を取り上げ、AIR事業に関わる資金の確保、サポートする人材に着目して分析しており、公的資金の提供があるところは何らかの事情で資金の確保が難しくなった場合に事業の継続も難しくなり、事業が打ち切られる恐れがあることを指摘している。さらに同氏ら[40]は「AIRをまちづくりの手法として用いている事業があり、事業継続の為にまちづくりの観点から事業評価が必要となる」としており、AIR事業の運営の課題は運営を担う人材・運営資金・場所の確保という3つに大別されること、これらのいずれかが欠けると安定した運営が困難になること、様々なAIR事業の型別の事業目的・事業特性・運営の課題を把握し、それぞれに適した事業評価を実施すれば、継続的なAIR事業の運営が可能となることを指摘している。次いで、佐脇ら[41]は日本における創造活動を行う施設の「目的」、「運営」、「利用」の相互関係を分析し、日本の創造活動拠点は、運営主体の多様化により、アーティストが自由な表現を発表する場から、クリエイティブな活動を行う様々な分野の人が集まって多方面との融合や一般市民が日常的に文化芸術に触れる機会をつくりだす場へと発展していったこと、また質の高い文化を創造し発信していくためには事業運営者が文化芸術に関する知識を有し、中立的な立場でアートと社会を繋げていくための中間支援組織のような人材であることが必要であることなどを指摘している。一方、多くの創造活動拠点は助成金や補助金を得て活動を行っていることから、継続的な活動のためには、経済的に自立をしていく必要性があることを指摘している。

梶恵ら[42]は芸術家の地域への転入、現居住地の評価、今後の定住意向に関してアンケート調査を実施し、それらの枠組みを把握した結果、芸術家らは自然環境の良さを重視し、居住環境、近隣関係、創作環境に満足しており、定住可能性が高いことを明らかにしている。

渡辺ら[43]は地域資源を活かしたアートプロジェクトの事例として大阪「からほりまちアート」を取り上げ、その効果として、運営スタッフの中では「まち」と「アート」それぞれの興味で多様な人材が集まって、イベントを作り上げる仲間同士のコミュニティが新たに構築されていること、地域住民が地域資源を失うことに無関心であることに対してまちなかでアートプロジェクトを行うことで、地域住民が地域資源に気づく機会になることなど、参加者や地域に様々な影響を与えているとしている。小谷ら[44]は、地元住民が主体になり、大学生と連携を図りつつ、営業している店舗を対象としたシャッターアートプロジェクトを行っている熊本市新町を事例として取り上げ、そのプロジェクトによる効果として、①小さなネットワークの形成、②大学生との交流の場、③強い信頼関係の構築、④町の歴史の再認識と愛着化、⑤他の町への関心の広がりなどを挙げている。

以上ここでは、本論で取り上げる工場衰退地とその近傍における文化芸術活動を起点とした地域再生に関連する既往研究として、1) 工業衰退地に関する研究、2) 歴史的建造物・産業遺産に関する研究、3) 空き家・空き工場等に関する研究、4) 文化芸術活動に関する研究などに関して概観し考察してきた。しかしながら、これらはいずれも本研究を取り巻く学術的背景を示すものであるが、産業構造の変化によって空洞化した工業地やその近傍の住宅地を扱っているものは希少である。また工業衰退地におけるまちづくりに関する研究として大田区のクリエイティブタウン構想を扱った研究 [20]、東大阪における住工共生に関する研究 [16]などがあるが、地域の特色である「町工場のものづくり」をテーマとした活動を扱っており、重工業を主とする湾岸部の工業衰退地とは状況が異なる。

日本有数の工業地帯である大阪市湾岸部の臨海工業地帯とその近傍の住宅地は、かつて新田開発によって造成されてきた地域で、広大な土地を所有する大地主が存在しており、「北加賀屋」と「梅香・四貫島」の2つの地区ではそれぞれの地域の大地主である民間企業が空き家や空き工場を用いて文化芸術を起点とするまちづくりに積極的にかかわっている事例が見られる。

これまでに「北加賀屋」と「梅香・四貫島」を扱ったものとして、コルナトウスキら[45]の研究は2つの地区の事例を比較し紹介しているが、その活動の継続性や事業の枠組みを議論しているわけではない。また高林らの著作[46]では「梅香・四貫島」のまちづくりを2010年までの初期段階の活動を主に記述しているが、本論文で着目するそれ以降については言及されていない。

1.3. 論文の構成

本研究は産業構造の変化に伴う大規模工場の撤退、移転などによって、地域の衰退が進む大阪湾岸部の重工業地帯とその近傍において地主である地元企業が積極的に関与し、文化芸術を用いたまちづくり活動を行っている北加賀屋と梅香・四貫島の 2 地区を取り上げ、そこでの取り組みと事業形態、関係者の意識などを分析することで、民間主導による自立的・持続的な地域再生のための手がかりを探ることを目的としており、全 4 章で構成している。

第 1 章は序論であり、研究の目的と背景、関連する既往研究について概要を考察することで本研究の位置付けを示した。

第 2 章は産業遺産の利活用を契機とした文化芸術活動による自立的まちづくり事業として北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ (KCV) 構想を取り上げ、事業主体と活動拠点へのインタビューを行うとともに、地域イベントでのアンケートを実施し、KCV 構想の経緯と取り組み、事業形態を分析した。当該活動では旧名村造船所跡を中心に 18 か所以上の活動拠点が形成され、文化芸術を用いた地域交流を促進する仕組みづくりが行われている。それが実現できた背景として産業遺産登録を契機に「地域活性化委員会」を組織できたこと、地主である地元企業が文化芸術活動に助成し、自らが事業主体となって所有する空き家や空き工場を利活用して活動拠点の形成を進めたこと、不動産事業として、空き家・空き工場対策の一面を持つことで、公的財源に大きく依存せず自立的・持続的なビジネスとしての展開が可能であったことなどを明らかにした。

また拠点入居者（アーティスト）は安い賃料、自由な雰囲気について満足しており、住民もアーティストが居住することで街の活性化や若返りにつながると肯定的に捉えていること、産業遺産である旧名村造船所跡を別用途に利活用することで新しい価値を生み出していると評価されていることなどを示した。一方、制度上の課題として産業遺産を有するこのような地域では工業用途に係る規制が多く、様々な障害が存在すること、またそれに関連して施設の大規模な改修は見られず、地域住民へ与える影響は少ない反面、新たなまちづくり活動が外部から分かりにくくなっていることなど、工業衰退地における産業遺産を契機とした自立的な地域再生のための留意点を示した。

第 3 章は 産業遺産のような地域資源を持たない工業衰退地近傍の住宅地における創造的活動を起点とした地域再生の事例として梅香・四貫島地区におけるまちづくり活動を取り上げ、事業主体と活動拠点へのインタビューを行うとともに、地域イベントでのアンケートを実施し、その活動の経緯と取り組み、事業形態を分析した。当該活動は地主である地元企業の関与によって開始され、その後地域に根付いた入居者らによって運営が継承され、現在 28 か所以上の活動拠点が形成されている。それが実現できた背景として地主である地元企業の支援があったことに加

えて、活動拠点の入居者である建築家はその運営を引き継ぎ、地元不動産会社と連携して老朽化して住み手がつかない空き家を原状回復義務免除として、廉価な家賃設定で仲介・交渉できたこと、「アートイベント」から「物件ツアー」「お試し暮らし」「空き家改修」に至る一連の入居促進のための枠組みが用意できたことなど、入居者自らによる文化芸術活動を起点としたまちづくりを進める上での重要な知見を明らかにした。

また拠点入居者は北加賀屋と同様に安い賃料、自由な雰囲気について満足しており、来訪者や住民の当該活動に対する評価も高く、一連の入居促進策が用意されていることでアーティストだけでなく、街に興味を持った一般の会社員や若者の入居にも繋がっていることなどを示した。一方、まちづくりにおける課題として新規入居者が増えるとともに、自由な活動を重んじるアーティストをまとめることが難しくなりつつあること、またこの地域は新規入居者に対して排他的な雰囲気が少ないが、家主にとってはアーティストの生活や活動の特殊性に不安を感じていることなど文化芸術活動を用いた地域再生ための留意点を示した。

第4章では、本論文で得られた事項を整理し、「北加賀屋」と「梅香・四貫島」の2つの地区におけるまちづくり活動の取り組みとそれに関わる関係者、来訪者の意識を分析し、工業衰退地とその近傍の住宅地における民間主導による文化芸術活動を用いた地域再生に資する基礎的要件として取りまとめた。

工業衰退地とその近傍における文化芸術活動を起点とした地域再生に関する研究

第 1 章	序 論 研究の背景及び目的、既往研究	序論
第 2 章	産業遺産の利活用を契機とした文化芸術活動によるまちづくり 1. 北加賀屋地区のまちづくり活動及び活動拠点の形成経緯 2. 北加賀屋地区のまちづくりの取り組みと運営主体の意識 3. 北加賀屋地区における活動拠点入居者の意識 4. 北加賀屋地区における活動拠点の施設整備状況 5. 北加賀屋地区における地域イベント来訪者の意識	事例 研究 I
第 3 章	工業衰退地近傍における文化芸術活動によるまちづくり 1. 梅香・四貫島地区のまちづくり活動及び活動拠点の形成経緯 2. 梅香・四貫島地区のまちづくりの取り組みと運営主体の意識 3. 梅香・四貫島地区における活動拠点入居者の意識 4. 梅香・四貫島地区における活動拠点の施設整備状況 5. 梅香・四貫島地区における地域イベント来訪者の意識	事例 研究 II
第 4 章	結 論 まとめと今後の展望	結論

図 1 論文の構成

脚注

- [注 1] 利用者自らが材料集めから施工まで自前で行い、利用物件あ室外空間に手を加えて空間づくりを行うことを指す。また職人などに相談して自分で作業するものは含めるが、職人を雇って指図するだけのものは含めない。具体的な内容としては、家具づくり、壁や天井の塗装、床の張り替え、設備の更新・新設、間取りの変更、耐震補強、屋根の張り替えなどを指す[26]。

第2章 産業遺産の利活用を契機とした文化芸術活動によるまちづくり活動の取り組み

2.1. 序

2.1.1. 北加賀屋地区の概要

2.2. 研究の方法

2.3. 結果と考察

2.3.1. 北加賀屋地区のまちづくり活動及び活動拠点の形成経緯

2.3.2. 北加賀屋地区のまちづくりの取り組みと運営主体の意識

2.3.3. 北加賀屋地区における活動拠点入居者の意識

2.3.4. 北加賀屋地区における活動拠点の施設整備状況

2.3.5. 北加賀屋地区における地域イベント来訪者の意識

2.4. 結論

脚注

第2章 産業遺産の利活用を契機とした文化芸術活動によるまちづくり活動の取り組み

2.1. 序

大阪市南西部の住之江区北加賀屋では旧名村造船所大阪工場跡(以下旧造船所跡と呼ぶ)が、大正末期に木津川沿いで盛んであった造船業の面影を留める遺構として近代化産業遺産に登録され、それを取り巻く「北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想(以下 KCV 構想と呼ぶ)」は工場移転等による地域産業の衰退と住民の高齢化や人口減少などから増加した空き家や空き工場を文化芸術活動の拠点として活用し、産業遺産を含む地域全体の自立的まちづくりを民間企業が実践している。

本章ではこの KCV 構想における取り組みを通して、民間企業による文化芸術活動を用いた空き家や空き工場の利活用のための事業形態と資金の流れ、運営主体等の意識を分析し、産業遺産活用を契機とした自立的・持続的なまちづくり事業の可能性を考察することを目的とする。

2.1.1 北加賀屋地区の概要

北加賀屋地区は図 2-1 で示すように大阪市の南西部の住之江区に位置している。北加賀屋は住之江区の北東部に位置し、北は木津川、西は大阪湾に接している。地下鉄「北加賀屋駅」が南に隣接し、高速道路の出入口も近くにあり、交通に便利な地域である。地区全体の面積は 0.73 km²で住之江区の面積の約 3.5%を占めており、人口は 3,024 世帯・6,278 人で、住之江区の 4.64%を占めている(表 2-1)。北加賀屋地区は主に工業専用地区と準工業地域であることから、製造業の事業所数の割合が 22%、製造業の従業員数が 23%と大阪市、住之江区と比べて非常に高い割合を占めており、製造業の比重が大きい地域である。

北加賀屋地区の人口変動推移(図 2-2)をみると、全体人口は 1995 年 7,144 人であったが、減りつつあり、2010 年では 6,278 人と約 23%減少した。また年齢別割合をみると、「0～14 歳」の年少人口と「15～64 歳」の生産人口は約それぞれ 4%、9%ずつ減少した一方、「65 歳以上」の老年人口は 1995 年 11% (754 人) から 2010 年 23%(1,421 人)と 2 倍以上増加しており、高齢化が進んでいる。

北加賀屋は千島土地株式会社設立 100 周年記念誌[49]によれば、大正の初め頃まで農業で盛んな地域だったが、その後第一次世界大戦の影響もあり、造船業が盛んになり、木津川沿いにたくさんの造船所が建設された。その後、北加賀屋地区の造船業の需要は高まり、木津川筋の川筋三社と呼ばれた、佐野安・名村・藤永田造船所では、多い時で 2 万人もの従業員が働いていた。また、その付近には造船に関連するさまざまな事業所が建ち並び、近隣の住民のほとんどはこれらの工場で働いていたとされている。

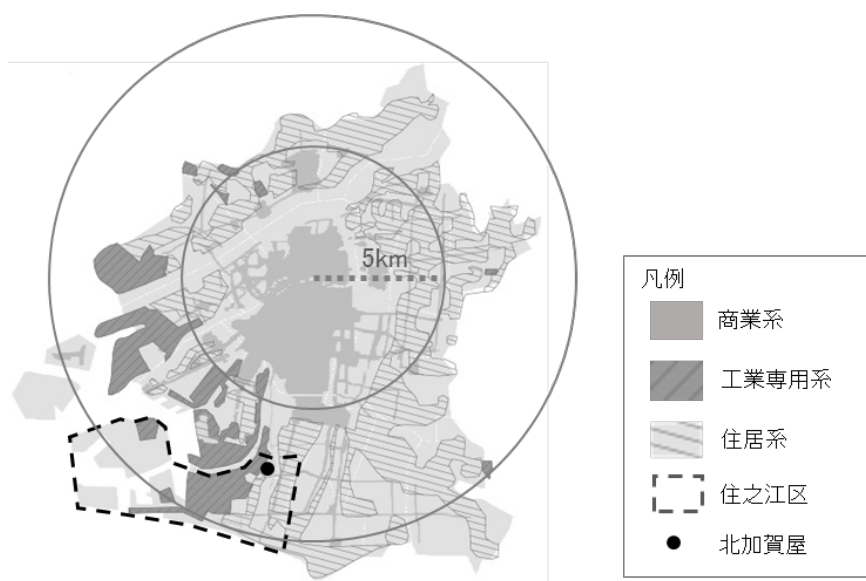


図 2-1 大阪市内の住之江区・北加賀屋地区の位置

表 2-1 北加賀屋地区における地域基礎情報[47]

	面積(km ²)	人口(人)	世帯数(世帯)	事業所数(件)	製造業事業所数(件)	比率(%)	従業者数(人)	製造業従業者数(人)	比率(%)
大阪市	210.36	2,598,800	1,317,990	201,462	23,163	11	2,216,895	277,571	13
住之江区	20.77	135,400	56,593	5,569	504	9	63,395	10,117	16
KCV構想	0.73	6,278	3,024	524	115	22	4,908	1,147	23

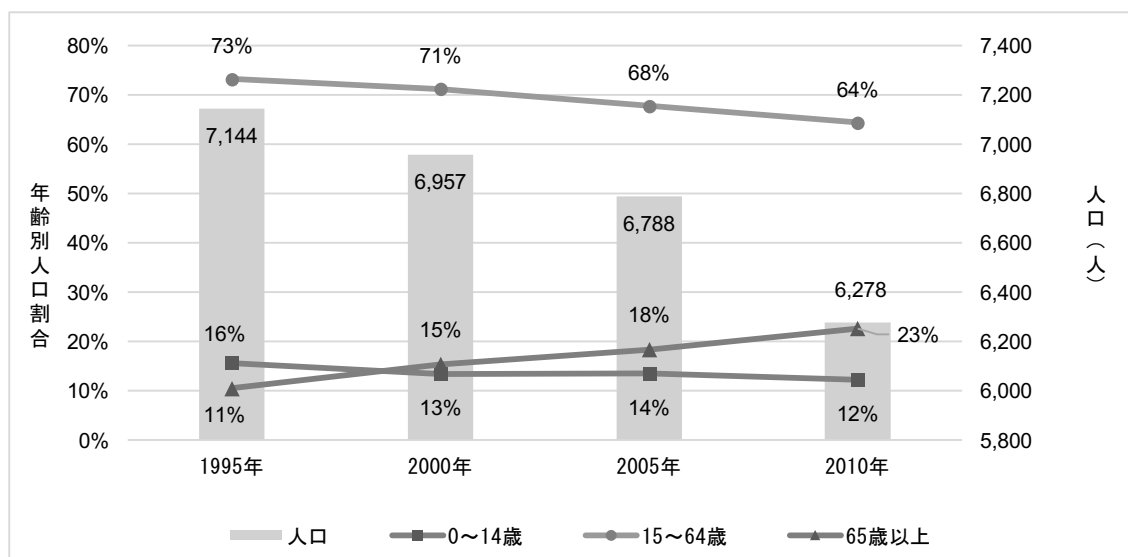


図 2-2 北加賀屋地区の人口変動推移[48]

また同記念誌によれば、終戦後、木津川という川幅の狭い場所では、川幅に収まる船を造ることしかできないため、木津川筋の造船所では4万t級の船を作るのが限界であった。より大きな船に需要が集っていたため、名村造船所の工場も昭和47年(1972年)に伊万里に生産拠点が移され、ドック(船渠)や工場、クレーンなどの建造物を残したまま、土地を所有する千島土地(株)に1988年返還された。その後、木津川筋の造船業は衰退したとされている[50]。

2.2. 研究の方法

本章では公開されている文献資料に加えて以下の調査を実施した。

1) KCV 構想における運営主体へのインタビュー調査

KCV 構想の運営主体として、KCV 構想における土地及び物件を所有する地元不動産(以下 C 社)とまちづくり活動を所管する「非営利型の財団法人(以下 C 財団という)」の担当者を対象に、当該活動の経緯と変遷、運営主体が果たしている役割やその取り組みなどについてインタビュー調査を実施した。調査期間は2014年6月から2015年11月にかけて2回のインタビューと当該地域のツアープログラムへの参加(観察調査)を行った。表2-2に運営主体へのインタビュー調査の概要を示す。

表 2-2 運営主体へのインタビュー調査の概要

日時	対象	方法	所要時間	調査内容	
2014年6月18日	C社担当者	対面	約2時間	I. 「KCV構想」について	II. 「すみのえアート・ビート」イベントについて
				1. 開始時期及びきっかけ	1. 始まったきっかけ
				2. 仕組み・取組み	2. 主体・参加アーティスト
				3. アトリエを増やすための努力(取組み)	3. 此花区役所・行政との関わり
				4. アーティスト間の関係	4. 資金について
				5. 終わったきっかけ・理由など(問題点)	5. イベントについての考え・意見
				6. 挙げられる課題	6. イベント会場CCOについて
2014年6月18日	—	ツアー参加	約1時間	各活動拠点を巡りながら、KCV構想と活動拠点の内容説明	
2015年11月17日	C社担当者	対面	約1時間	I. C財団について	II. C社について
				1. 沿革、歴史について教えてください。	1. つくる不動産の仕組みについて
				2. 事業内容、決算報告などについて	2. 家賃の設定について
				3. 主な寄付金について教えてください。	3. 当該活動の事業性
				4. 波及効果について	

2) KCV 構想における活動拠点入居者へのインタビュー調査

KCV 構想の拠点施設 14 カ所(18 活動拠点)の入居者に対してインタビュー調査を実施した。ここで「活動拠点」とはこの構想の事業主体が WEB[51]上で公開している「KCV 拠点」のことで、本論では KCV 構想において空き家や空き地、空き工場を活用してアトリエやオフィス、店舗等を開設・運営している施設のことを言い、この活動に参加し創造的活動に関わっている入居者等を含めて「アーティスト[注1]」と呼ぶ。ここでは一つの活動拠点に複数の活動拠点が入居している場合(コーポ北加賀屋)と、同一の運営者が複数の活動拠点を運営している場合(CCO・AIR 大阪とクビレ邸・鞆鞆館・カナリヤ条約及び Co.to.hana・みんなのうえん)もあり、本調査では全 14 カ所の拠点施設(18 活動拠点)に入居している運営者 14 人にヒアリングを行った。当該調査は 2014 年 10 月から 11 月に各拠点に直接訪問して、共通の質問表を提示し約 1 時間ずつヒアリングを行った。表 2-3 に活動拠点入居者へのインタビュー調査の質問内容を示す。

表 2-3 インタビュー調査の質問内容

「北加賀屋クリエイティブビレッジ(KCV)構想」での活動について
北加賀屋クリエイティブの空間をどのような目的で使っていますか？
入居前、「北加賀屋クリエイティブビレッジ(KCV)構想」についてご存知でしたか？
どの経路でこの企画を知りましたか？
入居された動機は何ですか？
北加賀屋クリエイティブビレッジで他のアーティストとの交流活動を良くされますか？
現在「北加賀屋クリエイティブビレッジ構想」での活動の満足度
「北加賀屋クリエイティブビレッジ(KCV)構想」での活動について活動を続けていくために何が必要ですか？
今後、「北加賀屋クリエイティブビレッジ(KCV)構想」が発展するには何が必要だと思いますか？
将来移転する可能性はありますか？移転したい理由は何ですか？
入居されている物件について
建物の所有状況－権利関係、物件の所有者及び管理者
建物の利用状況－階数・部屋の数、キッチン・トイレ・浴室などの専用・共用の状況
賃貸契約上の改造制限がありますか？
改修工事の有無
改修工事の内容
改修工事内容の決定者とその費用の負担者
文化芸術を用いた地域活性化について
「文化芸術を用いた地域活性化」についてどう思いますか？
そのように思う理由は何ですか？

3) 地域アートイベント来訪者の意識調査

住之江区が主催し、活動拠点の一つである旧名村造船所大阪工場跡で毎年行われる地域イベント「すみのえアート・ビート 2014」[注 2]の来訪者を対象に、当該施設及び KCV 構想への意識に関するアンケート調査を実施した。表 2-4 にアンケート調査の質問内容を示す。アンケート調査はイベント当日の 2014 年 10 月 19 日、調査員 7 人が現場にて来訪者に直接配布・回収した。またこのイベントの主催者である住之江区でも同様のアンケートを実施しており、その結果と比較しながら分析を進める。

表 2-4 アンケート調査の質問内容

「すみのえアート・ビート」について
本日、「すみのえアート・ビート2014」に来訪したきっかけは何ですか？
本日、「すみのえアート・ビート2014」で興味を持っているイベントはどれですか？
今後の北加賀屋のアートイベントに参加する意向はありますか？
今後どのようなプログラムがあれば、参加したいと思いますか？
クリエイティブセンター大阪(旧名村造船所)について
今までクリエイティブセンター大阪を訪れたことがありますか？
過去、クリエイティブセンター大阪を訪問した目的は何でしたか？
クリエイティブセンター大阪についての認知度
クリエイティブセンター大阪についての評価(建物のイメージ・活用面)
その他、この施設への印象や意見をご自由にご記入してください。
今後クリエイティブセンター大阪がどのようなになってほしいですか？
北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ(KCV)構想について
「北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想」についてご存知ですか？
「北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想」を知ったきっかけは何ですか？
北加賀屋内のアトリエやギャラリーなどを訪問したことがありますか？
北加賀屋にアーティストが居住・作品活動をしていることについてどう思いますか？
今後「北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想」が持続されることを期待しますか？
「北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想」が発展するために何が必要だと思いますか？
文化芸術を用いた地域活性化について
「文化芸術を用いた地域活性化」についてどう思いますか？
そのように思う理由は何ですか？
文化・芸術に興味がある場合、特にどのようなジャンルに興味がありますか？

2.3. 結果と考察

2.3.1. 北加賀屋のまちづくり活動及び活動拠点の形成経緯

図 2-3 に KCV 構想における拠点施設 14 箇所の前用途をもとに工場・倉庫、住宅、テナントビル、空き地で 4 つに分け、その位置を北加賀屋地区の地図上に示す。

KCV 構想は 2004 年に京都にある民間イベント企画会社（以下 R 社という）の K 氏が旧名村造船所大阪工場跡（以下、旧造船所跡という）を所有する地元不動産会社（以下 C 社という）の協力を得てアートイベント「NAMURAART MEETING」[注 3] を開催したことが端緒である[注 4]。その後 R 社は C 社より同敷地とそこに残存する施設（表 2-5・F1）の一部を賃借して主に展示等の機能を備えた創造スペースに転用し 2005 年に「クリエイティブセンター大阪（以下 CCO）」として運営を開始した。その後、2007 年に R 社はさらに廃業したビジネス旅館（表 2-5・H2）を C 社から賃借し、アーティスト専用の宿泊施設アーティスト・イン・レジデンス(AIR 大阪)の運営を始めた。また同年に旧造船所跡が経済産業省の「近代化産業遺産 33」に登録され、2009 年には住之江区と地元企業、住民の代表らによる「近代化産業遺産を未来に活かす地域活性化実行委員会（以下、地域活性化委員会という）」が発足することで、地域を巻き込んだまちづくり活動へ発展する契機となった。またその中で R 社と C 社が協力し、この KCV 構想が開始された。これ以降文化芸術にかかわる活動拠点が次々に形成されていくことになる。

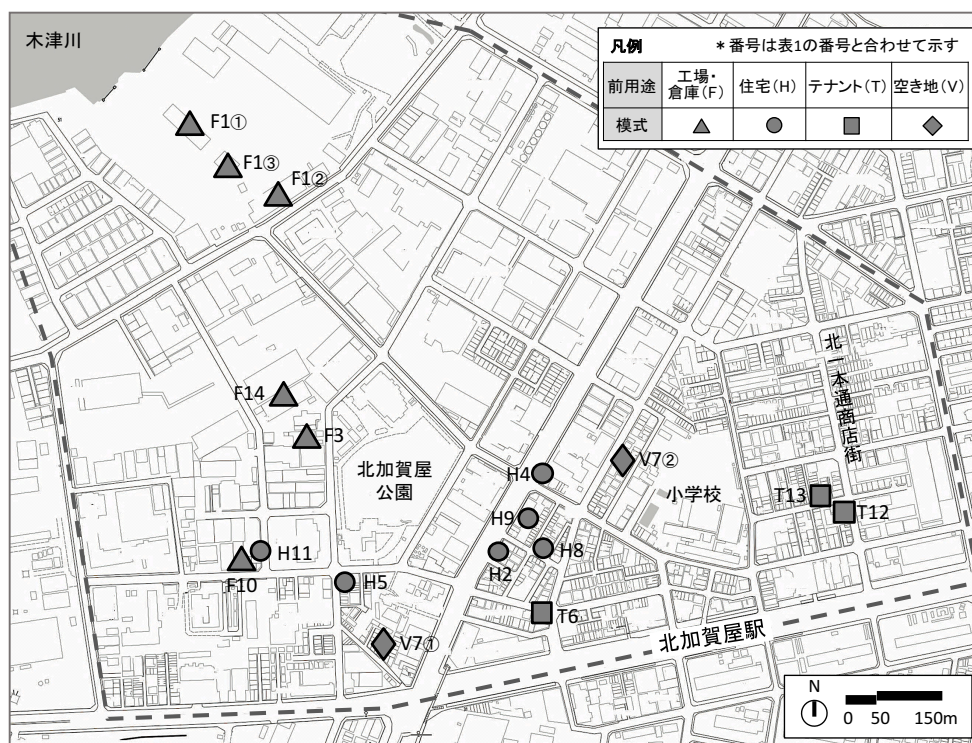


図 2-3 KCV 構想における各活動拠点の配置

表 2-5 KCV 構想における活動拠点の形成プロセス

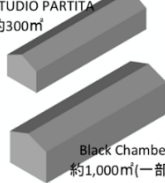
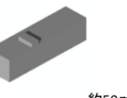
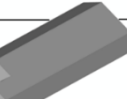
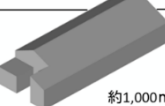
No	住所	拠点のイメージ・使用面積	前期途	現在の様子	形成のプロセス										活動拠点名	現用途（活動人数）	創造的活動の内容	入居の経路		
					2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014						
F1	北加賀屋 4丁目	 STUDIO PARTITA 約300㎡ Black Chamber 約1,000㎡(一部)	工場				リノベーション		Black Chamber			クリエイティブ センター 大阪 (CCO)		クリエイティブセ ンター大阪	展示等施設 (*)	近代化産業遺産「名村造船所大阪工場跡地」に残る 建物を改装し、展示等のための機能を備えた創造ス ペース。敷地面積約4万㎡というスケールを生かした活 動が行われている。	← R C			
H2	北加賀屋 2丁目	 約200㎡	旅館			AIR大阪	07' 7月							AIR大阪	宿泊・居住施設 (* 9部屋)	旧ビジネス旅館をアーティスト専用の宿泊施設に改装 し、10室の部屋のほか共同リビングやキッチン、ギャラ リーも備える。	← R			
F3	北加賀屋 5丁目	 約1,000㎡	工場				09' 2月	コーポ 北加賀屋	dot architects		Remo		MAD 荘		dot architects Remo MAD 荘 102木工所 Fablab	シェア オフィス	元家具工場に、アート、オルタナティブ・メディア、アー カイブ、建築など、分野にとらわれない人々や組織が 集まる。ライブラリー、ギャラリーなど、300㎡の共有ス ペースも活用。	← C		
H4	北加賀屋 2丁目	 約70㎡	店舗				鞆縫館	09' 4月		11' 6月		HOPE	13' 9月	b ギャラリー	カフェ・ギャラリー (1)	カフェ併設のゆるいコマ(ゆるいコマ・商業ギャラ リー)。ハウススタジオとしてCM・カタログ等のスチール 撮影にも対応。	← その他			
H5	北加賀屋 5丁目	 約25㎡	住宅				おしま絵画教室			10' 6月				おしま絵画教室	共同アトリエ (1/会員)	古い一軒家を改装したアトリエ兼絵画教室。2人のアー ティストが地域の子供たちや若者、お年寄りと一緒に 絵を描くコミュニティスペース。	← ギャラリー 創造			
T6	北加賀屋 2丁目	 約35㎡	テナントビ ル				Co.to.hana			10' 9月				Co.to.hana	オフィス (7)	デザインのカで社会問題や地域の課題解決を目指す NPO。「シンサイミライノハナPROJECT」ほかの活動を 国内外で展開。	← C			
T7	北加賀屋 2丁目、5 丁目	 ①約150㎡ ②約500㎡ 建物 約65.1㎡	空地 空地 住宅				みんなのうえん			10' 9月	C社の地域活性化事業 委託運営			みんなのうえん	コミュニティファーム (7/会員)	農のプロセスを共有しながら、みんなで一緒に農園づ くりを行うコミュニティファーム。アートやデザインなどの 創造性を取り入れて展開。	← C			
H8	北加賀屋 2丁目	 約65㎡	住宅				ク・ビレ邸			10' 10月				ク・ビレ邸	カフェ・ギャラリー (4)	KCV構想に関する情報発信基地。ギャラリースペース に加え1階にはバーと、2階には和室を備えた、アー ティストやクリエイターと地域住民の交流の場。	← C			
H9	北加賀屋 2丁目	 約35㎡	住宅				隠れ家1632秘密基地			11' 7月				隠れ家1632秘密 基地	店舗(1)	オリジナル手づくりメガネのアンテナショップ。メガネを モチーフにした展示が点在する異空間。	← その他			
F10	北加賀屋 5丁目	 約150㎡	倉庫				藝術中心・カナリヤ条約			11' 10月				カナリヤ条約	展示等施設(2)	燃料倉庫をリノベーションしたスペースで、現代美術な どクリエイティブな作品を発表するアート空間。	← R			
H11	北加賀屋 5丁目	 約140㎡	住宅				鞆縫館(移転)			11' 10月				鞆縫館	宿泊・居住施設 (* 7部屋)	アーティストやクリエイターが創造するためのブライ ベート空間と、情報交換やコラボ企画を実践するた めのコミュニティ空間を備えたシェアハウス。	← R			
T12	北加賀屋 1丁目	 約30㎡	テナントビ ル				cornucopia			11' 7月		13' 9月		CAFÉ DJANGO	店舗 (1)	東京・高円寺に98年に誕生した自家焙煎コーヒー豆専 門店。本業にとどまらず、音楽イベントも開催予定(DJ 機材なども用意あり)。	←			
T13	北加賀屋 1丁目	 約50㎡	テナントビ ル				騒ギニ乗ジテ			12' 6月				騒ギニ乗ジテ	バー・ギャラリー (1)	「いろいろな出会い、コミュニケーション」をコンセプ トに、地域の活性と共にカルチャーを発信していく、新感 覚のギャラリーバー。	←			
F14	北加賀屋 5丁目	 約1,000㎡	鉄工所									14' 10月		MASK(Mega Art Storage Kitakagaya)	作品保管所 (* 無人)	工場跡に巨大スケール作品群を保管・公開するプロ ジェクト(通常は非公開)。美術展示等のためのホワイ トキューブを併設。	← C			
出来事				04' 9月 「NAMURA ART MEETING」初開催	07' 「近代化産業遺産 群33」に認定	09' 委員会発足 09' KCV構想開始	11' 11月 C財団設立	<凡例> ● 活動開始 → 活動期間 --- 移転 □ 拠点名 ◆ 紹介・誘致 ▼ 出来事 *(活動人数)は 利用者により異 なる												

図 2-4 活動拠点の様子



同年 2 月、北加賀屋 5 丁目にあった空き工場（表 2-5・F3）を活用したシェアオフィス「コーポ北加賀屋」が設立され、現在 5 団体が入居している。また同時期に K 氏(R 社)の勧誘で舞台監督の D 氏が空き店舗(表 2-5・H4)を活用して「鞆鞆館」をオープンした。次に、現在は活動していない「ギャラリー創造」の紹介で、2010 年 6 月空き家になっていた木造住宅（表 2-5・H5）にアトリエ兼絵画教室「おしま絵画教室」が入居し、9 月には C 社の社長の勧誘で NPO 法人「Co.to.hana」が 2 階建てのテナントビル(表 2-2・T6)に入居し、同法人が北加賀屋 2 丁目と 5 丁目にあった空き地 2 カ所(表 2-5・V7)をコミュニティ・ファーム「みんなのうえん」として運営を始めた。当該農園は地主である C 社の地域活性化事業でもあって、当初委託運営であったが、4 年目からは自立的に運営されている。また 10 月には 2 丁目の空き家(表 2-5・H8)を活用し KCV 構想のインフォメーションセンターとして C 社により「ク・ビレ邸」が設立され、D 氏によって運営が始まった。

その後 2011 年 7 月には 3 階建てテナントビル(表 2-5・T12)の 1 階の一室を地元アーティストらが画廊として活用し「cornucopia」をオープンした。次いで 2011 年 7 月には北加賀屋 2 丁目にあった木造長屋(表 2-5・H9)を改修し、アトリエ兼用の店舗「隠れ家 1632 秘密基地」がオープンした。まだ、同年 10 月に D 氏が北加賀屋 5 丁目にあった空き倉庫(表 2-5・F10)を展示等施設「藝術中心・カナリヤ条約」として活用し、それに隣接する 2 階建ての木造住宅(表 2-5・H11)をシェアハウスに改修し、以前北加賀屋 2 丁目にあった「鞆鞆館」(表 2-5・H4)をここに移した。元の「鞆鞆館」の跡は 6 人の若いアーティストが暮らす住宅「HOPE」に一時的に転用された。また 2011 年 11 月に C 社は関西の芸術文化の発展を支援することを目的に非営利型の財団法人(以下 C 財団という)を設立し、KCV 構想に関わるまちづくりの取組は本業の不動産業とは別にこの財団で進められることになった。

その後、2012 年 6 月から「おしま絵画教室」の F 氏とその知人がテナントビル 1 階の空きスペース(表 2-5・T13)を利用してギャラリー・バー「騒ギ二乗ジテ」の運営を始めた。2013 年 9 月には「HOPE」(表 2-5・H4)の建物に北加賀屋 1 丁目にあったギャラリー「cornucopia」(表 2-5・T12)が移転してカフェ併設のギャラリー「b ギャラリー」(表 2-5・H4)として開業した。また、2013 年 9 月には眼鏡店の E 氏の紹介でコーヒー豆販売店の「CAFÉ DJANGO」が元「cornucopia」が使用していたスペース(表 2-5・T12)に入居した。最後に 2014 年 11 月には C 財団が廃業した鉄工所跡(表 2-5・F14)を大型のアート作品を保管展示する「MASK」を設置し、現在に至っている。

2.3.2. 北加賀屋地区の取り組みと運営主体の意識

1) 事業形態と資金の流れ

KCV 構想の事業形態と資金の流れを図 2-5 に示す。KCV 構想は北加賀屋に点在する各活動拠点によって構成され、全ての拠点の入居者は C 社との賃貸契約が基本となっている。地主でもある C 社にとっては本業の不動産事業の一環という事になる。またまちづくり活動に関しては C 財団が所管し、資金は主に C 社を含むグループから年間の運営費として約 2,000 万円が寄付されており、その内約 6 割が KCV 構想のため使われている [注 5]。また地域活性化委員会は行政及び地域住民と活動拠点との連携組織であり、活動予算として約 300 万円(2012 年度)が計上され、まちづくり活動として様々なイベントを実施することで、地域の活性化を促し、KCV 構想の拡大に寄与していた。表 2-6 に地域活性化委員会の概要を示す。

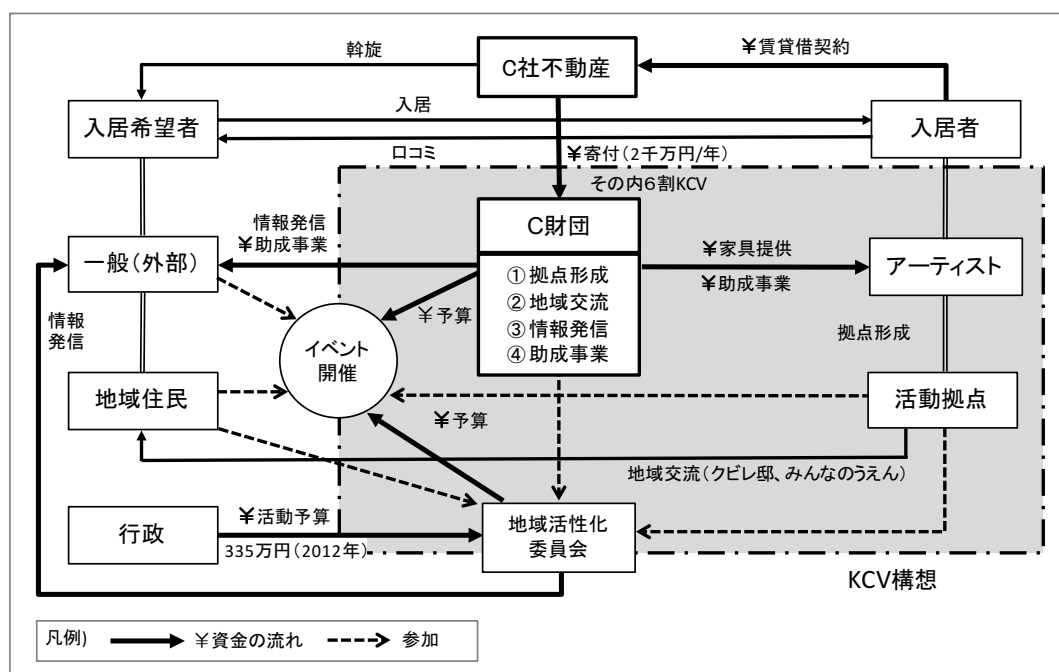


図 2-5 KCV 構想における事業形態・資金の流れ

2) C 財団の取り組み

C 財団が実施している取り組みは①活動拠点の形成、②地域交流、③情報発信、④助成事業の 4 つに大別される。

① 活動拠点の形成

C 財団は KCV 構想においてアーティストやクリエイターが多く活動するまちとして活動拠点を作るために、拠点入居者との契約では通常より低廉な家賃に加えて物件の改修が自由で原状回復が不要であることや家具などの無償提供などの条件により活動拠点が形成されやすい環境を提供している。表 2-7 に北加賀屋周辺物件と KCV 構想対象物件の平均家賃の比較を示す。

表 2-6 「近代化産業遺産を未来に活かす地域活性化委員会」の概要[52]

団体名	近代化産業遺産(名村造船所大阪工場跡地)を未来に活かす地域活性化委員会
発足のきっかけ	2007 年旧名村造船所大阪工場の経済産業省による「近代化産業遺産」の認定、区長の指示
主な活動	「アート」によるまちの魅力創出を進め、アーティストや地域住民が主体的に取り組むイベントなどを開催している。
活動予算	3,350 千円(2012 年)
会議の実施	2009 年度 7 回、2010 年度 11 回、2011 年度 10 回、2012 年度 7 回は定例開催し、その後は必要に応じてその都度開催
会議内容	出来事(イベントなど)実施報告・今後のスケジュール、実行委員会実施報告、運営方針など
会議の出席者	区長、加賀屋連合町会長、CCO 2 名、C 社 3 名、K 大学 1 名、大阪産業経済リサーチセンター 1 名、NPO 法人 Co.to.hana1 名、区役所 3 名など（毎回変動あり）
イベント 開催の内訳	2009 年 12 月 第 1 回すみのえミュージックフェスタ(SMF)開催 2010 年 03 月 北加賀屋レポート(北加賀屋のいまむかし)作成 2010 年 10 月 第 2 回すみのえミュージックフェスタ(SMF)開催 2010 年 12 月 北加賀屋シンポジウム「かがやくかがや」開催 (ウォールペイント「b. friend on the wall」も同時制作) 2011 年 03 月 「ぶかぶか便り」作成 2011 年 08 月 DAYLILY ART CIRCUS 2011 開催 2011 年 10 月 第 3 回すみのえミュージックフェスタ(SMF)開催 2012 年 03 月 ウォールペイント「NAMURA152P」完成 北加賀屋まちの文化祭開催 2012 年 10 月 すみのえアートフェスタ (SAF) 開催 2012 年 11 月 「WALL PAINTING PROJECT 03」実施 2012 年 12 月 ウォールペイント「Pattern Formation」完成 2013 年 03 月 ウォールペイント三部作パンフレット「THREE MURALS」作成 2013 年 10 月 すみのえアートビート 2013 開催 2014 年 10 月 すみのえアートビート 2014 開催 2015 年 10 月 すみのえアートビート 2015 開催

表 2-7 北加賀屋駅周辺物件と KCV 構想対象物件の平均家賃の比較

	物件数	家賃	敷金（件数）	礼金（件数）
北加賀屋駅*	88 件	約¥60,000 /40 m ²	¥112,400（10）	¥104,759(58)
KCV 構想**	13 件	約¥32,000 /40 m ²	なし(13)	なし（13）

*KCV 構想エリアを目安に北加賀屋駅から徒歩 10 分未満の物件を対象にした。[53]

**「つくる不動産」サイト[54]の物件情報に基づいて算定した。

次に、各活動拠点の役割ごとに、それぞれの拠点の運営形態を C 社、拠点の入居者、利用者、来訪者の関係として表 2-8 に示す。基本的に全拠点は C 社との賃貸借契約を結んでいる。

- A) 展示等スペースとしては「CCO」「カナリヤ条約」がある。これらは各種展示等スペースとして活用し、その使用料によって運営されている。
- B) 居住・宿泊施設としては「AIR 大阪」「鞆鞆館」があり、いずれも北加賀屋などでのアートイベントに参加するクリエイター等の滞在場所としてその滞在費によって運営されている。
- C) ギャラリー・カフェとしては「騒ギニ乗ジテ」「b ギャラリー」「ク・ビレ邸」があり、拠点の運営主体がカフェやバーを経営するとともにギャラリー部分は、地元アーティストらの展示や公演のスペースとして貸出している。

表 2-8 KCV 構想における活動拠点の運営形態

類型		地主	拠点の運営主体	利用者	来訪者(参加者)
A	展示等スペース				
	・クリエイティブセンター大阪 ・カナリア条約				
B	居住・宿泊施設				
	・AIR大阪 ・鞆韃館				
C	カフェ・バー併設 ギャラリー				
	・b ギャラリー ・騒ギニ乗ジテ ・ク・ビレ邸				
D	アトリエ・オフィス				
	・おしま絵画教室 ・CAFÉ DJANGO ・Co.to.hana ・隠れ家1632				
D	シェアオフィス				
	・コーポ北加賀屋(5団体) (dot architects, Remo, MAD荘, 102木工所, Fablab Kitakagaya)				
E	コミュニティファーム				
	・みんなのうえん				
F	作品保管所				
	・MASK				

D) アトリエ・オフィスとしては「おしま絵画教室」「Café Django」「隠れ屋 1632 秘密基地」

「Co.to.hana」「コーポ北加賀屋」があり、拠点の運営主体が入居者であり、個人のアトリエや居住スペース、店舗などとして使っている。ただシェアオフィス「コーポ北加賀屋」は、拠点の入居者の代表が空き工場全体を傾斜家賃方式で借りて、個別スペースを使う他の入居者を募集し、組合形式で運営している。

E) コミュニティ・ファームとして「北加賀屋みんなのうえん」は、当初は C 社から委託を受けた NPO 法人「Co.to.hana」が、KCV のアーティストや地域住民と一緒に農園づくりを行いながら互いに交流を図る目的で開始され、4 年目からは独立した事業として会員制の共同農園として運営されている。

F) 作品保管所として「MASK」は広大な空き工場を転用した拠点で C 財団が C 社との使用賃借契約によって直接運営している。

以上、各拠点の役割として、展示等イベントスペースと宿泊滞在施設、オフィス・アトリエとギャラリー・カフェの拠点間で互いに補完関係になる可能性がある。

② 地域交流

行政や地域住民との連携組織である「近代化産業遺産(名村造船所大阪工場跡地)を未来に活かす地域活性化実行委員会」(表 2-6)とは別に、KCV 構想における 18 カ所の拠点の中には地域住民と活動拠点の交流のために「ク・ビレ邸」と「みんなのうえん」(図 2-6)が運営されている。前者の活動は地域に住み生活しながら住民との交流を深める役割で、KCV 構想が何をしているかを住民に伝える役割を果たしている。現在は、夏祭りや町会活動、地元の運動会等に参加することで、地域住民とのパイプ作りを目的に活動を行っている。後者は KCV の入居者間の交流をもとに地域とのつながりを広げる役割で、都会で始める農業ということで、収穫だけを目的とすることではなく、ワークショップや勉強会など様々なクリエイティビティを発信することで、先進的なコミュニティ・ファームを通して、地域の活性化を進めている。

③ 情報発信

前述したように拠点の形成においては人的ネットワークの影響が大きく、口コミでの入居が多いが、C 財団は「北加賀屋つくる不動産」事業として WEB [56] に物件情報も掲載しており、見学や町歩きツアーなどを行っている。また財団ではニュースレター「paper C」の年 3 回の発行と、KCV 構想のパンフレットやイベントの情報を掲載するフリーペーパーを発行(図 2-7)することで、北加賀屋内外に KCV 構想の広報活動を行っている。尚 2014 年 MASK の直営を開始し発信力のある著名なアーティストの作品を預かり、(通常は非公開であるが)年に数回、限定的なイベント公開をすることで KCV 構想の PR に取り組んでいる。



図 2-6 地域交流の拠点 左図「クビレ・邸」(出典: <https://quvillezthe.wordpress.com/about/>)
右図「みんなのうえん」(出典: <http://minnanouen.jp/active>)



図 2-7 「KCV 構想」のマップ
(出典: <http://www.chishimatochi.info/found/920-2/>、2016 年 8 月更新版)

⑤ 助成事業

C 財団は 2012 年から KCV 構想の広報活動を所管するとともに、アーティストやクリエイターが活動しやすい状況を整備し、また創造性が触発されるような環境を生み出すことを目的として 3 種類の助成事業(創造活動助成、スペース助成、パートナーシップ助成)を行っており、2012 年で 18 件、2013 年 14 件、2014 年 17 件、2015 年 18 件の支援を行っている。これまで創造活動助成は 45 件が採択されており、その内 KCV 関連では 6 件で、主として広く関西における文化芸術活動を支援している。またスペース助成は CCO の使用供与に関するもので、これまでに 17 件が採択され CCO の利用促進に寄与している。パートナーシップ助成は北加賀屋で活動するアート関係者・団体等と連携し、活動資金の一部を助成するものでこれまでに 5 件が採択され主に NAMURAART MEETING の実行委員会と「みんなのうえん」の活動に関する事業に供与されている[56]。

3) 事業主体と運営者の意識

KCV 構想の事業形態は地主である同社にとっては本業の不動産事業としての側面がある。S 氏は「家を空き家で置いておくと、税負担の軽減を享受できるが、(管理費等支出も発生し)結果的に高く付く」と述べており「やはり、人に住んでもらわないと建物は悪くなってしまう」として、北加賀屋周辺で同社が所有する空き家に「芸術や文化に関わる人々を低廉な家賃で住ませよう」と考えた述べている。ただまちづくり活動に関しては C 社財団が所管しており、「本体の事業と文化事業については、バランス感覚をとりながら」実施しているとして、「本体の事業が順調にいったこそできること」とも述べている。また家賃設定について同氏は「建物の固定資産税や火災保険料の負担増をカバーするぐらいの賃料をいただかないと事業として採算が合わない」としている。ただ建物投資をしない分安く貸せるとして、「現在は北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想に入ってこられた方とはウィン・ウィンの関係」と述べている[55]。

それに対して CCO の入居者(運営者)である K 氏[57]は CCO の賃料と転用するための改修整備費用について「最初の賃料を格安に設定していただいた上で、必要な設備投資をお願いした場合、その投資金額を月割りにして家賃に上乗せするという形」で契約できたことについて「経営状態を考慮しながら段階的にインフラ整備を検討できる」とその仕組みを高く評価している。またコーポ北加賀屋では「かなり大きな建物なので(中略)傾斜家賃方式」にして入居者が増えるにしたがって家賃を設定しており、このことに関して入居者も満足を示している(2.3.3 参照)。すなわち、事業主体が提供できる家賃と入居者が負担出来る家賃が釣り合っていると考えられる[注 6]。このことは、この KCV 構想における C 社の事業が自立的・持続的なビジネスとして成立する可能性を示している。

以上 KCV 構想の取り組みは、まず活動拠点の形成を行い、その拠点と地域との交流を促進する仕組みをつくるとともに、北加賀屋での文化芸術活動を助成し、その活動の情報発信をすることで進められたことになる。またこのような事業が実現できた背景にはやはり C 社社長の文化芸術活動への理解と事業者としてのリーダーシップ、経営判断によるところが大きい。

2.3.3. 北加賀屋地区における活動拠点入居者の意識

KCV 構想の活動拠点の運営者 14 名へのインタビュー結果を表 2-9 に示す。その属性は、30 代 5 名、20 代 4 名、40 代 3 名、50 代 2 名であり、この地区での居住経歴(2014 年 11 月時点)は、「1～3 年」が 7 名で最も多く、「5 年以上」4 名、「1～3 年」が 3 名である。

1) 入居の経緯と理由

KCV 構想を知ったきっかけ(図 2-8)については「入居していた知人を通して(46%)」が最も多く、次いで「KCV 構想の活動(27%)」や「アートプロジェクト(20%)」をきっかけとしている。入居を決めた要因(図 2-9)については『安い家賃(32%)』が最も多く、次いで『自由な雰囲気(26%)』、『他アーティストとの交流(16%)』の順で回答が多かった。『自由な雰囲気』については改修が自由にできる事や活動に制限がない点がメリットと考えており「このプロジェクトの可能性を見出したから(表 2-9・①-c)」や「北加賀屋は(中略)結構いろいろやりたいことができそう(表 2-9・①-e)」などのプロジェクトへの興味も動機に挙げている。また環境面では、「広い」「日当たりがよい」「工場地区なので音やにおいなどに気にしなくて良い(表 2-9・①-m)」などをメリットとしている。

2) 北加賀屋での活動の満足度

北加賀屋での活動の満足度について 5 段階で評価させた結果の平均値をレーダーチャートで図 2-10 に示す。まず、「他アーティストとの交流」が 3.5 点と最も高く、次いで「生活環境」3.4 点と「交通環境」3.2 点、「地域との連携・交流」3.1 点の順で満足を示している。一方「行政の支援」は 2.1 点で最も低い評価を得ており、「作品活動」(2.9 点)、「まちの雰囲気」(2.8 点)についてもやや不満が見える。ヒアリングによると、「安い家賃で、好きな活動をしていて、自由(表 2-9・②-f)」、「他のアーティストとのコラボレーションができる(表 2-9・②-g)」、「自由な雰囲気が良い(表 2-9・②-k)」、「地域住民も興味を持ってくれる(表 2-9・②-g)」など KCV 構想での活動に満足している。一方で「外部から訪ねられる毎日活動している拠点が少ない(表 2-9・③-j)」、「ふらっと入れるスペースがない(表 2-9・③-f)」、「みんなアトリエとか事務所なので、外部の人が来て見られる場所がない(表 2-9・③-m)」など KCV の拠点活動がこのまちに興味をもって来た来訪者にとって外から見えにくいといった問題が存在する。

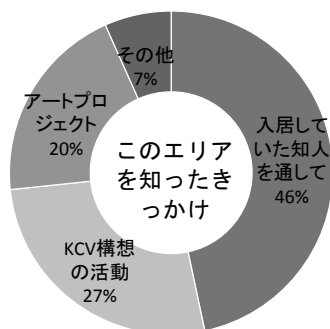


図 2-8 当該地区の活動を知ったきっかけ(N=14)

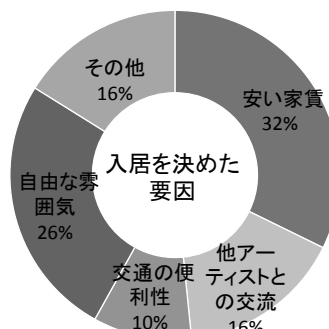


図 2-9 入居を決めた要因 (複数回答)

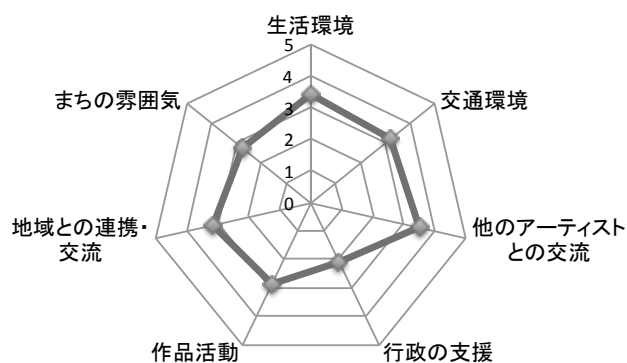


図 2-10 居住・活動の満足度

3) KCV 構想内で他アーティストとの交流

満足度の中で一番評価が高かった『他アーティストとの交流』について見ると、その頻度については(図 2-11)、「どちらかといえばよくしている」、「普通」が多いが、「あまりしてない」「どちらかといえばしてない」もある。ヒアリングのコメントを見ると、「アーティスト同士の情報共有ができる(表 2-9・②-f)」や「アーティスト間の交流で色々なチャンスが広がる(表 2-9・②-j)」などその環境に満足している意見がある一方、「仲いいところはよく行くけど、全然交流がないところもある(表 2-9・④-l)」など活動分野が異なる拠点間での交流はそれほど行われていないことも伺える。このことに関連して KCV 構想に対する要望において「気軽に団体同士が集れる機会(表 2-9・⑥-m)」や「定期的な交流の場・機会を増やしてほしい(表 2-9・⑥-i)」、「横のつながりをもう少しまとめてほしい(表 2-9・⑥-j)」など拠点間の交流の機会を求める意見は多い。ただ「自然に交流することは良いと思いますけど、むりやり集まることはあまり良くないと思います(表 2-9・④-n)」や「あんまり交流するのがいいかっていうとそうでもなくて、(現状が) いい距離感なのかなって思います(表 2-9・④-g)」などの意見があることから、分野が異なり自由な風土を重んじるアーティストをまとめることの難しさも伺える。

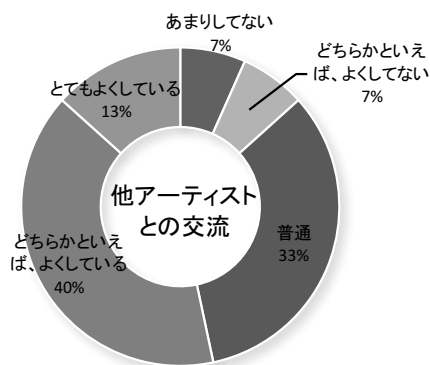


図 2-11 他アーティストとの交流

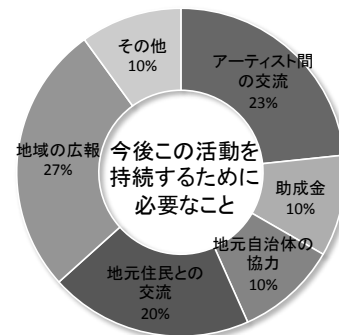


図 2-12 今後この地区が持続するために必要なこと（複数回答）

4) 今後この地区が持続するために必要なこと

『今後この地区が持続するために必要なこと』についてみると（図 2-12）、「地域の広報」が 27%で最も多く、「アーティスト間の交流（23%）」、「地元住民との交流（20%）」、「地元自治体の協力」、「助成金」、「その他」が 10%ずつである。コメントをみると、「地域の広報」については「地域外の人が集まってくる（表 2-9・⑧-j）」ように仕掛ける必要性を挙げている一方、「チラシとかがあつて訪ねる人がいても通常開いているところがない（表 2-9・⑧-m）」という問題指摘から、「発信力が高いアーティストが活動する（表 2-9・⑧-c）」等の情報発信の方法なども言及された。また、「地域住民との交流」や「地元自治体の協力」については住民との交流の役目を担っている拠点の主催者は「（まちづくりは）その土地に長くいる人の賛同をまず得ないと、（中略）失敗してしまう可能性が高い」として、「まちを活性化しようと思ったら、（中略）人が地域に馴染まないと失敗する（表 2-9・⑧-c）」と述べており地域住民の参加を求めるだけでなく、活動拠点側から地域に馴染むことで地域住民との交流の重要性を指摘している。またコミュニティ・ファームの運営者は「地域の人はアートとか言われてもあんまりぴんと来ないっていうか、敷居が高い（中略）、でも農業はアーティストだろうがおじいちゃんだろうが子どもだろうが、みんな関係のあることなのでつながりやすい」と述べており、運営においても「結構地域の住民の人に参加してもらうのと、そのためには自治会の協力は絶対必要（表 2-9・⑧-h）」であると述べている。

5) 行政に対する要望

行政に対するコメントでは、「行政の支援は全くない（表 2-9・③-c）」や「行政とクリエイターがやりたいことが違う（表 2-9・③-g）」など不満が見えており、「一時的なイベントだけではなく、計画的で中・長期予算があるともっと面白いことができる（表 2-9・⑦-g）」や「アートを振興しやすい環境づくりに協力してほしい（表 2-9・⑦-o）」などの支援要望や産業遺産を有す

表 2-9 KCV 構想における活動拠点へのインタビュー結果

質問内容 /対象・職業	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
	入居された動機	KCV構想で満足していること	KCV構想で満足していないこと	KCVで他のアーティストとの交流活動	自らの活動を続けていくために必要なこと	KCVIに対する要望事項	地元自治体・行政に対する要望	今後、KCV構想が発展するに必要なこと	アート活動や文化芸術を用いた地域活性化について
a 展示等スペースコーディネーター	・発起人として	—	—	・イベントがある時ミーティングなどをするが、普段プライベートな交流はあまりない。 ・ゆくゆく年に1-2回集りましようという話はしている。	・アーティスト間の交流 ・助成金 ・地域住民の参加 ・赤字にしないで持続できること	—	・法的規制などの緩和	・アーティスト間の交流 ・地域住民の参加 ・地域の広報	・良い ・地域活性は必要だと思うし、アートが手段の一つにはなると思う
b 宿泊施設マネジャー		・都心から以外と近い	—	・2年前までは「近代化産業遺産を未来に活かす実行委員会」が月1回集ったが、区長が変わってからはない	・地域住民の参加	—	・あまり期待してない	・地域住民の参加	・長くつづける、もうからないし、人の心に届くものというのは、少しずつの積み上げだと思う
c 舞台監督プロデューサー	・KCV構想プロジェクトの可能性を見出したから	・舞台を作る材料を買いえる店舗が多い ・梅田まで118分で交通が便利 ・年間のスケジュールが組んで、作品を創造できる	・行政の支援が全くない	・年1-2回 ・あまり定期的に集るよりも自由にした方がいいと思う ・各拠点の性格が違うので、ばらばら活動しながら、大きいイベント等がある時手伝い合う ・小さい町の中で交流して固まることは望ましくない	・地元自治体の協力 ・地域活性化のためには人が一番大事 ・まちを活性化しようと思ったら、(中略)人が地域に馴染まないし失敗する	・家賃を上げないこと	—	・地域の広報活動 ・発信力が高いアーティストが来ること ・その土地に長くいる人の賛同をまず得ないと、(中略)失敗してしまう	・良い ・芸術でなくても、何かで地域を改善することが望ましい
d 写真家	・安い家賃 ・自由な雰囲気	・自由度	・下町すぎる(高齢者がほとんど)	・普通	・助成金 ・地域住民の参加	—	・助成して欲しい	・助成金 ・地元自治体の協力 ・地域の広報	・良い
e 展示・企画コーディネーター	・安い家賃 ・自由な雰囲気 ・結構いろいろやりたいことができる	・近隣にアーティストが住んでいること	—	・普通 ・バーなのでアーティストがよく訪ねて来る	・アーティスト間の交流	・KCVIに対する広告宣伝活動 ・KCV構想が有名になるようにまとめてほしい	—	・アーティスト間の交流 ・広告宣伝活動	・良い
f 画家	・安い家賃 ・自由な雰囲気 ・公園が近くにいいこと	・安い家賃で、好きな活動をしていて、自由 ・アーティスト同士の情報共有ができます	・ふらっと立ち寄れるスペースがない	・月2回 ・ギャラリー学生時代の友達と二人で「懸ギニ集ジテ」を作った(現在は他人が運営)	・地域住民の参加	・いろんな人が遊びにフラット来てくれたら嬉しい	・イベントに呼んでください	・アーティスト間の交流	・芸術家のための芸術になるのではなく、市民が何か考えるキッカケになる事、盛り上がる事は悪い事ではないから
g アートプロデューサー	・安い家賃 ・アーティスト間の交流 ・自由な雰囲気 ・まちづくりの活動ができそうだったので	・地元企業〇社財団の存在；我々とやりたいことが結構合致している部分が多い ・色んなクリエイターがいるので、他のアーティストとのコラボレーションがやりやすい環境 ・地域住民も興味を持ってくれる	・北加賀屋の文化度が低い ・若い人が行くような場所が減っている ・行政とクリエイターがやりたいことが違う	・2ヶ月1回 ・gは色んなアーティストや団体とも関わって仲良く交流している ・イベントを企画してコラボレーションしたり、農園の活動でつながりを作り、コミュニティが生まれている ・アーティストとの交流は、あまりにも良くされるよりはいい距離感を持っていると思う	・地元自治会の協力 ・地域住民の参加 ・地域の人はアートとか言われてもあんまりびんと来ない	—	・一時できなイベントだけではなく、計画的(中・長期)予算があれば、面白いことができると思う	・地域の広報 ・行政の支援 ・団体がちょっと力をつけて、払えるようになったら払ったほうが次に入ってくる若い世代とかにはうれしいし、それはいいこと ・結構地域の住民の人に参加してもらおうと、そのためには自治会の協力は絶対必要	・良い ・アートには世代を超えたつながりをつくることのできる可能性がある ・地域の資源(不動産・公共的な場所)の活用ができる
h	・広い ・日当り								
i 音楽コーディネーター・店主	・他アーティストとの交流の機会 ・交通の便利性	—	・アーティスト間の交流があまりない	・あまりされていない ・自主性に任せている雰囲気なので、定期的な交流自体はあまりない	・アーティスト間の交流 ・サロンみたいないつも行って話し合える場所	・定期的な交流の場・機会を増やしてほしい ・地域の広告 ・イベント開催	—	アーティスト間の交流	・良い
j メガネデザイナー	・安い家賃 ・自由な雰囲気	・隠れていること ・アーティスト間の交流で色々なチャンスが広がる	・外部から訪ねられる毎日活動している拠点が少ない ・仲のいいグループで別れていて、全く交流がないところもある ・皆が集る機会がありません	・週2回 ・周りに住んでいるアーティスト(個人のアドリエを借りている)とか住民と仲良くしている	・アーティスト間の交流を増やしたり、アーティストらがもうちょっと色々活動して盛り上げる	・KCVIが有名になるように横のつながりをまとめて欲しい	—	・地域の広報；外部の人が集ってくることが大切 ・活動するひとを増やす ・交流の機会を増やして盛り上げる ・創造的な拠点だけではなく、普通のお店も増えた方が良い	・良い ・アート活動で人が集ってまちが賑わったらまちが活気づいて、お金が回るなど活性化されと思う
k 建築家	・広くて安い ・中央から近い ・自由な雰囲気 ・他アーティストとの交流の機会 ・広さ、大型スペース	・中央部から遠すぎない場所 で、自由な雰囲気があるところ	・飲食店が少ない	・月2-3回 ・継続的なプロジェクトを進めているため、打ち合わせしている ・建築的なことは関わることもある ・特にコーポ北加賀屋内では気兼ねなく話し合える	・アーティスト間の交流 ・助成金 ・地元自治会の協力 ・地域住民の参加	頑張っているので、これ以上要望はない	・あまり期待してない	・アーティスト間の交流 ・助成金 ・地元自治会の協力 ・地域住民の参加 ・地域の広報	・良い ・芸術は元々、社会の中から出てきたものだし、その芸術が社会に還元するのは普通のことだと思う
l 工芸家	・シェアなので家賃が安い ・他アーティストとの交流の機会面で面白いことができそうだったので ・自由な雰囲気	・普段で会うことがないアーティストが近くにいる視野が広がる ・展示や公演の時、仕事をもらえる ・工場地区なので、音とか気になくて良い	・もうちょっと広いスペースが欲しい	・どちらかといえば、拠点とはあまり関わりがないです ・コーポ北加賀屋以外の拠点とはあまり交流していない ・仲いいところはよく行くけど、全然交流がないところもある	・仕事	—	・余ったスペースをうまく活用する空間を増やしたら良いと思う	・アーティスト間の交流 ・助成金があればもっと色んなことができそう	・良い ・アートとかで特殊なことをすれば、人が気軽に立ち寄って、まちが元気になると思う
m ものづくりアドバイザー	・安い家賃 ・工場地区であって、音やにおいなどに気にしなくて良いこと	・工場地区であって、音やにおいが寛容されること ・協力し合えること	・人が訪ねにくい位置 ・冬寒い、蚊が多い ・みんなアドリエとか事務所なので、外部の人が来て見れる場所がない	・月2回 ・コーポ北加賀屋内では月1回の会議がある ・毎週末にはオンラインでも見学できる	・地域住民が会員になって参加したらい	・気軽に団体同志が集まれる機会	—	・アーティスト間の交流 ・地域住民の参加 ・地域の広報—チラシとかがあって訪ねる人がいても通常開いているところがない	・うまくいったら良い ・アーティストも活動には場所があるので
n イラストレーター	・安い家賃 ・自由な雰囲気 ・広い	・自由度があって良い ・ここではないとできないこともある(広さ、音とか気にしなくて良い、変わったことをやっても大丈夫) ・他の入居者との連携	・準工業地域なので、周りには住む人がいなくて孤独(それで良いところもあるが)	・月1回(コーポ内)会議 ・シェアなので、顔を会わせる機会は多い ・イベントに参加させてもらったリするが、個人的な交流はあまりない ・自然に交流することは良いけど、むりやり集ることはあまり良くないと思う。現在で満足	・カフェとか気楽に入れるスペースがあってほしい	・アートにこだわらないで、いろんな活動が呼び込まれるように、いろんな人が集まるようになったらいいと思う(料理、カフェなど)	・活動制限などさえなければ、干渉しない方がよい	・寛容な人たちが集まること ・アーティストではなくてもクリエイティブなど文化に興味がある人が周りにいることが良いと思う ・楽しいまちになること	・アーティストやクリエイターだけが地域を改善できることではないので、改善したい人はしたらい ・地域民が望めたらいい
o アートコーディネーター	・発起員として ・地域の情報発信のため	—	—	・普通	・地域住民の参加 ・アーティスト間の交流	—	・法的規制の緩和などで、アートを振興しやすい環境づくりに協力してほしい	・アーティスト間の交流 ・地元自治会の協力 ・地域住民の参加 ・北加賀屋エリアの広報	・芸術を手段としれ「用いる」のではなく、アート活動の活性化が自然に地域の活性化につながるのが理想

る地域は現状では工業が衰退している場合が多いが「当時のまま工業専用地域となっている」ために文化芸術活動を実施する上で多くの障害がある[注 7]として用途変更や法律的規制の緩和（表 2-9・⑦-o）を求める意見もある。また「事業所税は利益に対してではなく、使用している面積に対して均等に課税される[57]」として産業遺産など規模の大きい工場の利活用に適さないといった指摘もある。一方、「活動制限などがなく、干渉しない方がよい（表 2-9・⑦-n）」や「あまり期待してない（表 2-9・⑦-b, k）」など行政が関与してくると縛りが増えてくることも述べており、自由な雰囲気重視の文化芸術活動は民間主導で運営する方がやりやすいといったことが示唆される。

6) 文化芸術を用いた地域活性化

文化芸術を用いた地域活性化については大半が「芸術を用いて地域を改善することは良い」と考えており、その理由として「アートは世代を超えたつながりをつくることができる可能性がある（表 2-9・⑨-g）」や「アートが手段の一つにはなると思う（表 2-9・⑨-a）」などアートが社会的に貢献できる可能性があることを理由としている。また、その他の意見としては、「長くつづけることが重要。儲からないし、人の心に届くものというのは、少しずつの積み上げだと思う（表 2-9・⑨-b）」として今後継続的に取り組むことの必要性を指摘する意見や KCV 構想がさらに発展するためには「地域の認知度をさらに高める工夫が必要」であるという意見も多く見られた。

2.3.4. 北加賀屋地区における活動拠点の施設整備状況

KCV 構想では入居者に改修を許可し、原状回復の義務を課していないことから、自由なスペースを希望する入居者にとっては魅力の 1 つとなっている。このことについて S 氏(C 社)[55]は「我われが古い建物を改修しようとする、どうしてもコスト高になってしまう」と述べ、「経営的に考えて、そのコストを何年かで回収しようとする、家賃も高くせざるを得ない」という事情もある。ここでは各拠点の改修有無を調査した結果、入居者自ら改修を行ったと回答した 12 カ所について外部と内部に分けてその具体的な改修内容を部位ごとに「除去」、「増設」、「位置変更」、「部材の変更」、「デザイン・形状の変更」、「材質・色彩の変更」の 6 項目の有無で集計し図 2-10、図 2-13 に示す。また図 2-14 に自己改修による間取りの変化を示す。

これをみると、外部では「ドア」、「窓」、「玄関」の部位が多く、その内容は「部材変更」、「材質・色彩の変更」など比較的容易な部分の改修が多く、外壁や屋根といった外観の大幅な変更はあまり行われていない傾向がある。このことは KCV 構想として地域住民へ与える影響が少ない反面、その新しいまちづくり活動を実施しているという印象が外部から分かりにくくなっている可能性もある。

また、内部の改修においては、「内壁」「内装」の部位が多く、その内容は「除去」、「材質・色彩の変更」「部材変更」などが多く入居者側による大規模改修は少ない。一方、AIR 大阪に関して S 氏は「アーティストが泊まるたびにいろんな所を補修してくれる」と述べており、滞在者がアーティストであることもあって、内装については「ここは泊まれた方の手でどんどんリニューアルされ綺麗になっていった」と述べており[55]、同社の原状回復義務免除の方針は互いにメリットを生み出したとも言える。

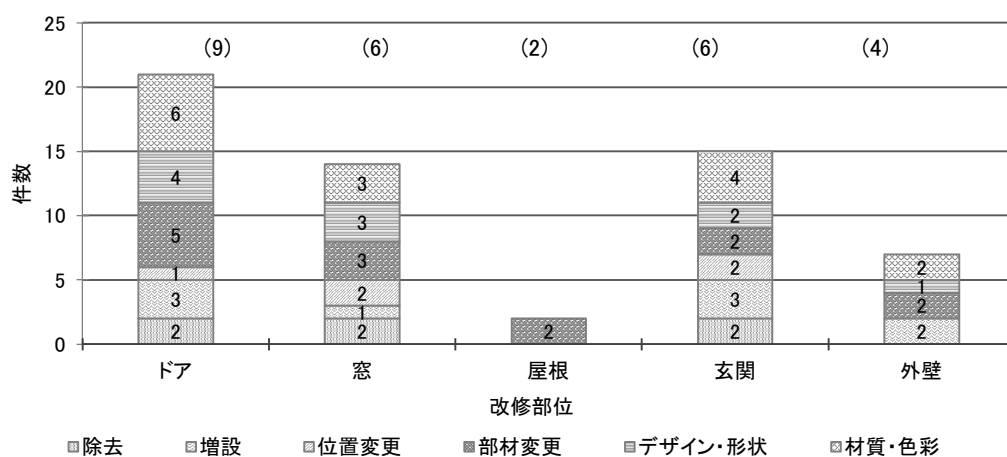


図 2-13 改修工事における内訳の集計(外部)(N=12,複数回答)

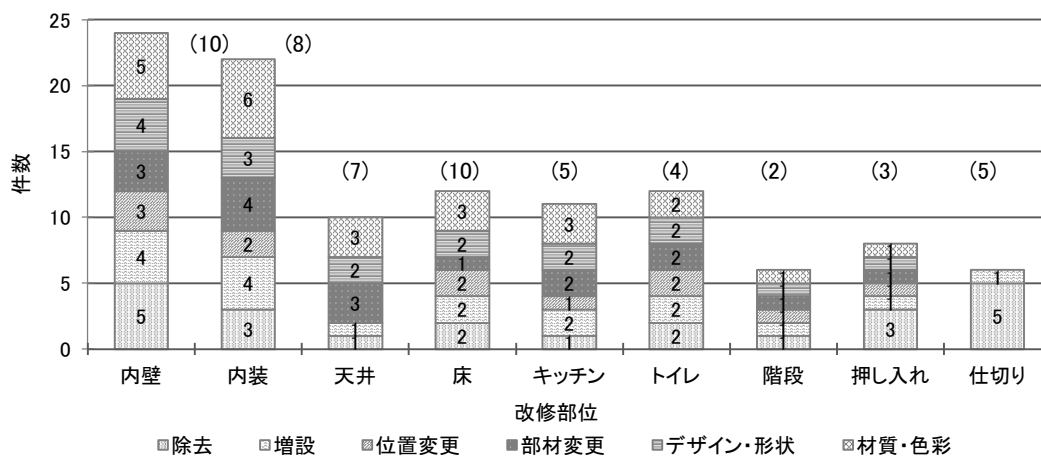


図 2-14 改修工事における内訳の集計(内部)(N=12,複数回答)

1 階	2 階	説明
		元のタバコ屋の店舗住宅の状態
当初タバコ屋の図面（～08 年）		1 階の住居部分を改造してイベントスペースに変更。2 階の一部の部屋を無くして吹き抜けを設置
1 次改造後(イベントスペース)の図面（09 年 04 月～11 年 10 月）		1 階のイベントスペースをカフェに改造。キッチンスペースを拡張してカフェの厨房を設置。 2 階部分の住居を一部だけ残して吹き抜け空間に変更
3 次改造後(現在カフェ・ギャラリー)の図面（13 年 8 月～）		元のタバコ屋[55] カフェ・ギャラリー「b ギャラリー」

図 2-15 自己改修による間取りの変化と写真（ヒアリングにより筆者作成）

2.3.5. 北加賀屋地区における地域イベント来訪者の意識

KCV 構想の活動拠点の一つである「CCO(旧名村造船所大阪工場)」を会場として、地域アートイベント「すみのえアート・ビート」が毎年1回定期的に行われている。ここでは2014年実施されたイベントの来訪者に対してアンケート調査を実施した。

1) 回答者の属性

2014年の地域イベントである「すみのえアート・ビート」の来訪者へのアンケートについて、回答者は全167名、有効回答者は155名で、その属性を図2-16に示す。そのうち男性が79名、女性が67名、未回答は9名となっており、年齢は20代以下が50名(32%)で最も多いが30代(26%)、40代(27%)も多い。職業は会社員が63%で非常に多く、主婦12%、学生10%などである。また回答者の居住地は、地元の住之江区22名(14%)、大阪市内46名(30%)、大阪市内外87名(56%)であり、遠方からの来訪者が多い。尚、このイベントの主催者側である住之江区も同様のアンケート調査を実施しており、その回答者数は105名で居住地構成分布は筆者らの結果とほぼ同様であった。

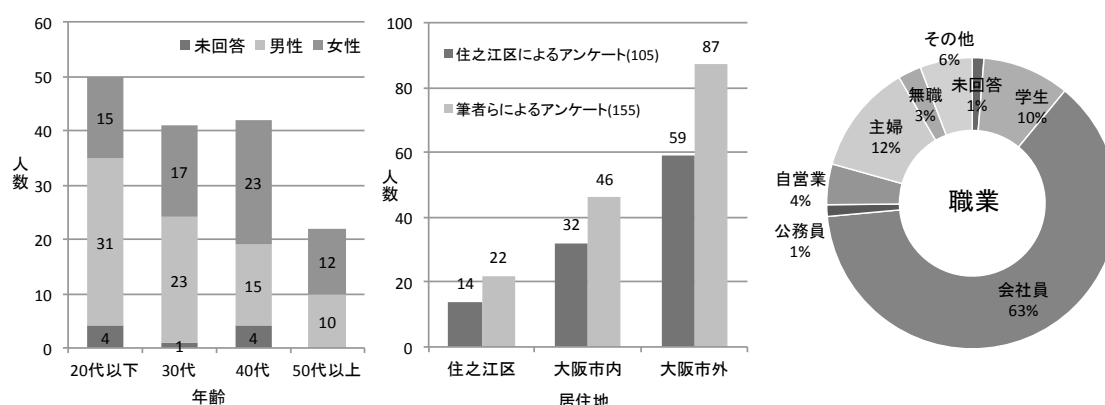


図2-16 回答者の属性-年齢・居住地・職業(N=155)

2) 今後の参加意向

「CCO(旧名村造船所跡)へのこれまでの来訪有無」に対して、居住地別の結果を図2-17に示す。これを見ると全体では119名(77%)が初めてと回答しており、主催者側の住之江区のアンケートでも約75%が初めてと答えた。一方、地元の住之江区の居住者では約半数が「来たことがある」と回答しており、大阪市内、大阪市内外になるにつれてその割合が減少している。

今後の参加意向をみると、全体では66名(43%)が参加意向有りを示しており、訪問経験の有無と今後の参加意向(図2-18)をみると、訪問経験がある人は今後も再訪問する意向(72%)が高いことがわかる。

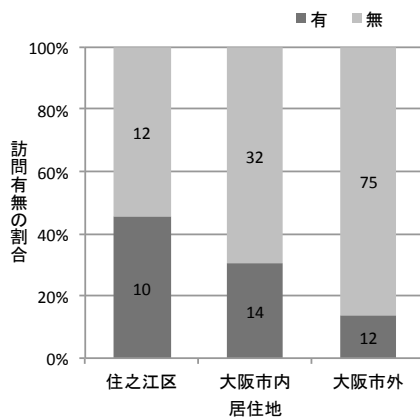


図 2-17 旧名村造船所跡の訪問有無 (N=155)

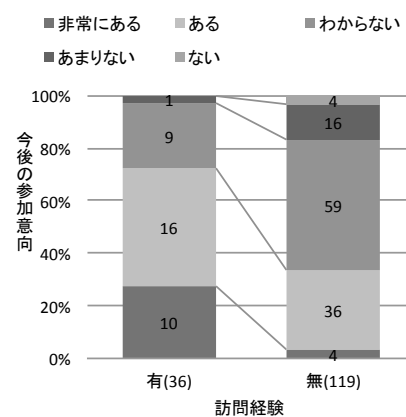


図 2-18 今後の参加意向 (N=155)

3) 施設評価

来訪者に旧名村造船所跡地の印象を、SD 法によって評価させた。11 項目の評価尺度対[注 8] に対して 5 段階で評価させた結果を各項目の左側（好印象側）の指標を 5 点として得点化し、当該施設の印象評価の特性を抽出するため、因子分析（varimax 回転）を行った。その結果、固有値 1 以上である因子が 4 つ抽出され、これらの因子がイメージ評価の特性を示していると考え、表 2-10 に各因子の項目とその因子負荷量を示す。ここで、値が 0.5 以上の因子負荷量を持つ項目を大きい順に並べてその内容を見ると、因子 1 は「洗練された感じ/野暮な感じ」「快適/不快」「美しい/醜い」「きれい/きたない」で、これは『審美性』を表していると考えられる。因子 2 は「明るい/暗い」「暖かい/冷たい」「広い/狭い」で、『空間性』を表すものと考えられ、因子 3 は「魅力ある/物足りない」「遊んで見たい/そうではない」で、『魅力度』を、因子 4 の「心地の良い/心地のわるい」「落ち着いた/慌ただしい」で『安定感』を表していると考えられる。

図 2-19 に被験者の年齢層ごとの評価値を 100 としてレーダーチャートで示す。これを見ると、印象評価は全年齢層において「審美性」に関しては最も低い評価を得ている一方、20 代以下と 40 代は「魅力度」を、30 代は「安定感」、50 代以上は「空間性」について最も高く評価している。また 40 代以上と 30 代以下で各評価値に明らかな差が見られ、特に 30 代以下の若い世代が高い評価をしていることがわかる。このように来訪者の年代によって評価が異なることは産業遺産施設の利活用における留意点でもありと考えられる。

次に旧名村造船所跡の活用評価を 6 項目の評価尺度対[注 9]に対して 5 段階で評価させた結果を各項目の左側の指標を 100 として得点して、年齢ごとの平均点と居住地ごとの平均点をそれぞれ表 2-13、表 2-14 に示す。まず、年齢ごとに見ると、全般に「地域性」「歴史感」「期待感」は高い評価を示している一方、「効果的」「楽しさ」の評価についてはばらつきが見られる。また居住地では、地元の住之江区は「期待感」84 点、大阪市内は「地域性」86.1 点、大阪市外は「歴史感」82.2 点と一番高く評価しており、全体的に「地域性」と「歴史感」を高く評価している。

表 2-10 4つの因子と各因子負荷量

	因子1	因子2	因子3	因子4
洗練された感じ/野暮な感じ	0.7383	0.1127	0.1848	0.1991
快適/不快	0.5563	0.2557	0.0747	0.3894
美しい/醜い	0.5494	0.0988	0.1881	0.1871
きれい/きたない	0.5385	0.3784	0.131	0.1166
明るい/暗い	0.3154	0.8528	0.0284	-0.0321
暖かい/冷たい	0.1292	0.6456	0.1455	0.2112
広い/狭い	0.049	0.5162	0.3948	0.0069
魅力ある/物足りない	0.2069	0.1861	0.8097	0.3177
遊んでみたい/そうではない	0.2182	0.121	0.5338	0.2109
心地の良い/心地のわるい	0.3098	0.2015	0.3276	0.683
落ち着いた/慌ただしい	0.2472	-0.0163	0.2218	0.6312
固有値	1.81	1.73	1.37	1.3
寄与率(%)	16.48	15.74	12.43	11.78
累積寄与率(%)	16.48	32.22	44.65	56.43
因子名称	審美性	空間性	魅力度	安定感

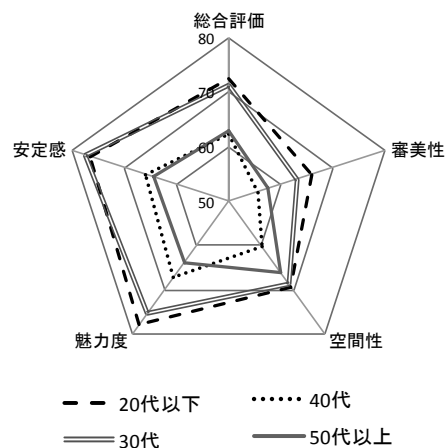
図 2-19 旧名村造船所の印象評価
(年齢層ごと平均値)

表 2-11 旧名村造船所の印象評価(年齢層ごと平均値)

属性		評価項目				
年齢層	人数	審美度	空間性	魅力度	安定感	総合評価
20 代以下	50	66.0	69.3	77.8	76.7	78.1
30 代	41	63.3	68.8	75.5	77.5	76.6
40 代	12	55.5	60.3	67.2	65.9	66.9
50 代以上	22	57.5	66.1	63.8	64.6	68.5
平均		60.6	66.1	71.1	71.2	72.5

表 2-12 旧名村造船所の印象評価(居住地ごと平均値)

属性		評価項目				
居住地	人数	審美度	空間性	魅力度	安定感	総合評価
住之江区	22	66.0	69.3	77.8	76.7	78.1
大阪市内	46	63.3	68.8	75.5	77.5	76.6
大阪市外	87	55.5	60.3	67.2	65.9	66.9
平均		60.6	66.1	71.1	71.2	72.5

表 2-13 旧名村造船所の活用評価(年齢層ごと平均値)

属性		評価項目						
年齢層	人数	歴史感	地域性	アートに適合	効果的	楽しい	期待感	総合評価
20 代以下	50	82.7	84.3	79.2	78.0	80.0	82.0	81.0
30 代	41	81.0	83.0	80.0	78.5	79.0	76.5	79.7
40 代	12	83.1	82.6	79.0	74.9	75.4	79.5	79.1
50 代以上	22	79.2	80.0	73.3	70.8	69.2	77.5	75.0
平均		81.5	82.5	77.9	75.6	75.9	78.9	78.7

表 2-14 旧名村造船所の活用評価(居住地ごと平均値)

属性		評価項目						
居住地	人数	歴史感	地域性	アートに適合	効果的	楽しい	期待感	総合評価
住之江区	22	73.0	83.0	74.0	80.0	80.0	84.0	79.0
大阪市内	46	84.3	86.1	78.3	77.8	77.4	80.0	80.7
大阪市外	87	82.2	81.2	79.0	73.7	76.1	78.0	78.4
平均		79.8	83.4	77.1	77.2	77.8	80.7	79.3

凡例 **abcd** 行の最低値 **abcd** 行の最高値 **abcd** 列の最高値

ここで来訪者のコメントをみると「施設の背景や歴史に沿った利用法を取り入れてみては」、「工具とか工業的な展示が見たい」、「船の展示があれば良いと思う」など旧造船業の歴史そのものを活かす要望がある一方、「古くて味わいがあってとても良い」、「外観を昔のイメージを残しながら何かデザインしたら面白いと思う」など古いイメージを好評する意見や「イベントには適していると感じた」、「入場料を取ってでも唯一無二のイベント企画がほしい」、「地域イベントやギャラリーになったらいいと思う」など芸術活動による該当施設の活用を期待する意見や、「普通の街にアートがあるという不思議」や「入口から見た感じと中に入ったイメージがかなり違う」などアート活動による斬新な風景を楽しむ意見もみられた。

以上のことは、CCO が現存する施設そのものの歴史的価値を残すというよりは、かつての歴史を背景としつつも、それに必要な手を加え、芸術活動の場に利活用することで KCV 構想の拠点として新しい価値を生み出しているとも考えられる。

4) KCV 構想についての認識

「KCV 構想の認知」に対する居住地ごとの回答を図 2-20 に示す。これを見ると住之江区では約 64%が「知っている」または「聞いたことがある」と回答している一方、大阪市内、大阪市外では約 20%程度にとどまっている。このことは KCV 構想が遠方からの参加者にはあまり認知されていないことを示している。また「知っている」、「聞いたことがある」と答えた回答者のそのきっかけ(図 2-21)は「広告やポスター」が最も多い一方、「知っている」の回答者の中では「知人を通して」が多い。「その他」ではテレビやネットなどメディアをそのきっかけとしている。

次に「北加賀屋でのアーティストの居住・活動に対する賛否」と「KCV 構想が今後持続されることへの期待度」について居住地ごとの結果を図 2-22、図 2-23 に示す。これを見るといずれも否定的な回答はなく、アーティストの居住に関して「とても肯定的」、「肯定的」と回答した人の割合は 70%以上で、中でも地元の住之江区の居住者が高く、市外に行くにしたがって低くなっている。一方、KCV 構想の持続への期待については大阪市内・市外の居住者の方が高い傾向にある。

ここでアーティストの居住に対して肯定的な回答の理由を見ると、「地域の活力アップにつながる」や「北加賀屋が発展してほしいから」など地域活性化を理由とするコメントが多く、「若い人が増えることが良い」や「若い人がきて賑やかになるから」、「町に若くクリエイティブな雰囲気が入ることは良いことだと思う」など、街の若返りを理由に挙げている。また「アーティストへの機会提供になる」や「空屋の有効な活用と若者アーティストの活動場所の提供としてどちらにもメリットがあると思う」など地域とアーティスト双方に有益である点を理由としている。

また「長期的な視点で活動すべき」「継続することがより大きな効果が期待できるから」など長期の継続の重要性を強調する意見や「もっとアートを目指す人が集ってほしい」、「アーティス

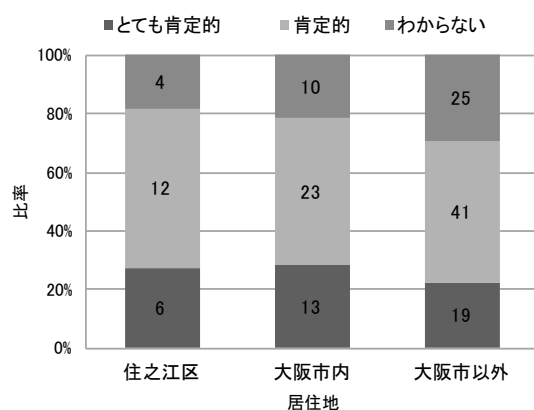


図 2-20 KCV 構想の認知

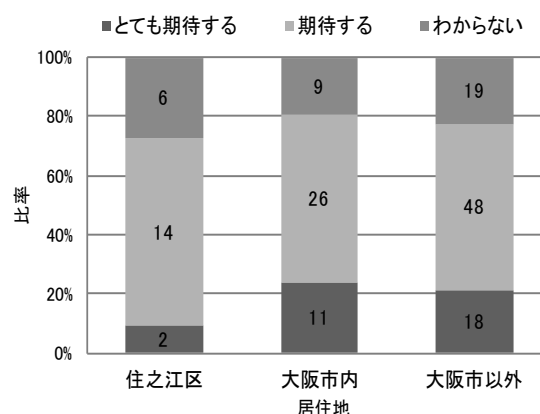


図 2-21 KCV 構想を知ったきっかけ

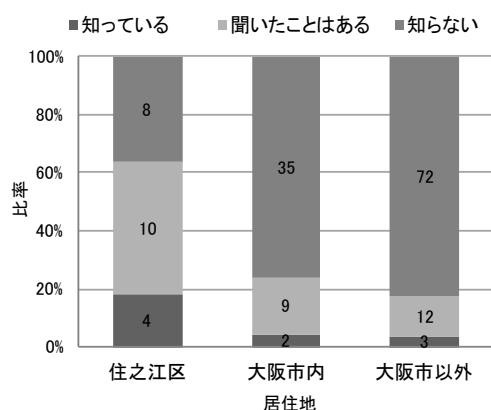


図 2-22 アーティストの居住に対する賛否

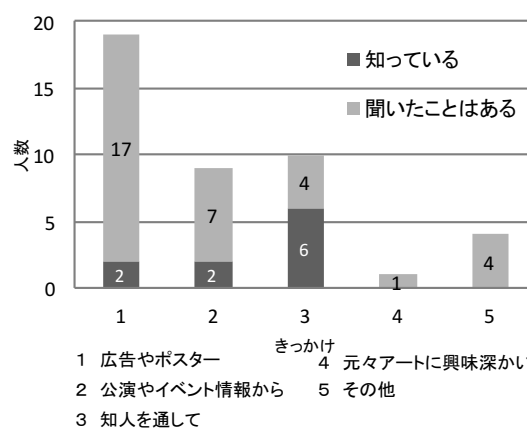


図 2-23 KCV 構想の継続への期待度

トの住む町という特色があれば個性化につながる」など文化芸術活動の集積を期待する意見など KCV 構想の活動を高く評価する意見がある一方、「期待するが、ずっと活動するには色々と障害があると思う」など将来を不安視する意見も見られた。

以上のことから、知名度の課題や将来性を不安視する意見はあるが、若い人が居住することで、北加賀屋の活性化や街の若返りにつながること、地域とアーティスト双方に有益であること、文化的環境への変化などを期待しており、長く続けていくことでより文化芸術活動の集積にも繋がるなど KCV 構想を肯定的に考えていることが示唆される。

2.4. 結論

本章では産業遺産の利活用を契機とした文化芸術活動による自立的まちづくり事業として北加賀屋クリエイティブ構想を取り上げ、その事業主体の取組を把握するとともに、各活動拠点へのインタビューとそこで毎年開催される地域イベントでのアンケート調査などを実施し、以下の結果を得た。

- 1) 北加賀屋におけるまちづくり活動（KCV 構想）は、2009 年までは「NAMURA ART MEETING」から「CCO」の設立、「AIR 大阪」が開業するまでの「準備段階」、2009 年～2010 年は地域活性化委員会が発足し KCV 構想として始まった「開始段階」、2011 年～2013 年は C 財団が設立されるとともに、拠点間の入れ替わりが生じた「調整段階」、最後に 2014 年以降は C 社の財団が第 3 者を介さず新たな事業を始めた「展開段階」といった 4 つのフェーズに整理できる。
- 2) 活動拠点の形成経緯として、当初は C 社、R 社からの勧誘で入居者を募ったが、以降は入居者のネットワークによって他の入居者が増えていくことになっており、拠点の形成には個々の人的ネットワークが大きく関わっている。
- 3) 全ての活動拠点の入居者は C 社との賃貸契約が基本となっており、拠点の運営形態はその利用方法によって 6 つのタイプに分類できる。
- 4) 事業主体である C 社におけるまちづくり活動に関しては C 財団が所管し、C 財団の資金は主に C 社を含むグループ企業から年間の運営費として約 2,000 万円が寄付されており、その内約 6 割が KCV 構想のために使われている。
- 5) C 財団が実施している取り組みは、①低廉な家賃・原状回復免除などの条件による活動拠点の形成、②地域住民と活動拠点間のコミュニケーションのための地域交流、③地域内外への情報発信、④文化芸術活動を活発化するための助成事業の 4 つに大別できる。
- 6) 活動拠点入居者が入居を決めた要因として「安い家賃」が最も多く、次いで「自由な雰囲気」、「他アーティストとの交流」の順で回答が多い。
- 7) 活動する上での満足度については、「他アーティストとの交流」が最も高く、次いで「生活環境」、「交通環境」、「地域との連携・交流」の順で満足を示している。一方「作品活動」、「まちの雰囲気」についてはやや低く、「行政の支援」は最も低い評価である。
- 8) 他アーティストとの交流については満足している意見が多い一方、活動分野が異なる拠点間での交流はそれほど行われておらず、拠点間の交流の機会をさらに求める意見と現状に満足する意見が分かれた。行政に対する要望としては、計画的な支援を要望する意見から、準工業地域である当該地域で文化芸術活動をしやすくなるよう、用途変更や法律的規制の緩和などが求められている。

- 9) 今後この活動が持続するためには、「地域の広報」、「アーティスト間の交流」、「地元住民との交流」が必要とされており、「地元住民との交流」については住民の参加を求めるだけでなく、活動拠点側から地域に馴染むことで地域住民との交流の重要性を指摘する意見が見られた。
- 10) 活動拠点施設の改修状況では、外観の大幅な変更はあまり行われていない傾向がある一方、内部では比較的多様な改修が行われている。
- 11) 地域アートイベント来訪者層は、年齢は20代と30代を含む若者が多く、職業は会社員の割合が非常に多い。来訪者の地域イベントへの今後の参加意向が高く、訪問経験がある人が今後の再訪問意向がもっと高い。
- 12) 来訪者の旧名村造船所跡地の印象は、全年齢層において「審美性」は評価が低い、「魅力度」、「安定感」は高い評価が得られている。また30代以下と40代以上で各評価値に明らかな差が見られた。
- 13) 旧名村造船所跡の活用評価は、総合的に高く評価されており、そのうち特に「歴史感」と「地域性」を高く評価している。年齢層で見ると、40代以上と30代以下でやや差が見られており、特に「効果的」、「楽しさ」においてばらつきが見られる。
- 14) 北加賀屋でのアーティストの居住・活動については、否定的な回答はなく、7割が肯定的に考えており、地元の住之江区の居住者層が最も肯定的に捉えている。一方、KCV構想の持続への期待については、大阪市内外の居住者層が高い傾向にあり、知名度の課題や将来性を不安視する意見はあるが、若い人が居住することで北加賀屋の活性化や街の若返りにつながること、地域とアーティスト双方に有益であること、文化的環境への変化などの効果を期待しており、長く続けていくことでより文化芸術活動の集積にも繋がるなどKCV構想を肯定的に考えている意見が見られた。

以上 KCV 構想の発端は閉鎖した工場跡地の歴史を活かして近代化産業遺産に登録するとともに、さらに新しい価値を生み出す文化芸術のスペースへ転換できたことであり、そこには事業主体のリーダーシップと経営判断が重要であったこと、また KCV 構想の展開においては主体の不動産事業として、空き家・空き工場対策の一面を持つことで、公的財源に大きく依存せず自立的・持続的なビジネスとしての展開が可能であったと考えられる。また事業の面では各活動拠点はすべて事業主体との賃貸契約が基本となっていること、ただし廉価な家賃設定と入居者による改修を許可し、原状回復の義務を免除することで、自由なスペースを確保したい入居者とマッチングできたことなどは文化芸術活動による空き家や空き工場の利活用のための手がかりである。

さらに、KCV 構想の拠点入居者が、安い賃料、自由な雰囲気について満足していること、来訪者や住民の評価も若いアーティストが居住することで、まちの活性化や若返りにつながると肯定的に捉えていること、産業遺産である旧名村造船所跡について、審美性は低いものの魅力度は高く、歴史感や地域性の評価が高いことから、現存する施設そのものの歴史的価値を残すというよりはかつての造船業の歴史を背景としつつも、それに必要な手を加え、別用途に利活用することで KCV 構想の拠点として新しい価値を生み出していると考えられる。

以上のことは KCV 構想が産業遺産の活用を起点とした自立的なまちづくり事業としての可能性を示唆するものと思われる。

一方、自由な風土を重んじるアーティストをまとめるにくいことや、産業遺産を有するこのような地域では工業用途に係る規制が多く、様々な障害が存在することなどは、文化芸術活動によるまちづくりを進める上での課題でもある。また KCV 構想では活動拠点の大幅な改修・変更はあまり行われていない傾向があり、このことは地域住民へ与える影響は少ない反面、新しいまちづくり活動を実施しているということが外部から分かりにくくなっている可能性もあること、旧名村造船所跡の印象や活用に対して世代間で評価が異なることなどは、今後空き家・空き工場等を利活用する際の留意点でもある。

次章では産業遺産など特別な資源を持たない工業衰退地近傍の住宅地において地主である地元企業が積極的に関与し、文化芸術活動を用いたまちづくり活動を行っている「梅香・四貫島」について分析する。

脚注

- [注 1] 活動拠点には画家や音楽家のように芸術・創作活動に直接従事している作家以外に、KCV 構想に参加しアートイベントを企画・コーディネートする者やその活動を支援する者も含めて「アーティスト」と呼んでいる。
- [注 2] 「すみのえアート・ビート」は住之江区の主催で CCO を舞台に年 1 回行われる地域イベントである。2009 年から「すみのえミュージックフェスタ」を始め、2012 年からは「すみのえアート・ビート」に変更した。
- [注 3] 「NAMURA ART MEETING'04-'34」は 2004 年から 2034 年までの 30 年間を芸術のひと連なりの現場ととらえ、芸術活動と隣り合う社会や個人が、「出来事」を共有しつつ未来を創造するという実験的プロジェクト。
- [注 4] 1988 年に旧名村造船所大阪工場が閉鎖し、その所有者である地元不動産会社(C 社)に返還されたが、残された施設や設備は造船業以外そのまま転用することが難しく、一時的にリハーサルスタジオとして利用されたこともあったが、その後活用方法が課題になっていた。
- [注 5] C 財団担当者により確認
- [注 6] 入居者側は市価の半額程度の家賃で入居できる一方、事業主体側は更地や空き家(空家等対策特別措置法)にするのに比べて古家のままで使用する事で固定資産税の軽減(200m²までは 1/6)が受けられる点、また古家の改修を許可して現状復旧を求めないことで、主体側の新たな設備投資の負担が減少し、敷金礼金も不要となる点などによって低廉な家賃とすることができている。
- [注 7] 近代化産業遺産として認定された現 CCO(旧名村造船所)は工業専用地域に立地しているため、物品販売・飲食店などができない用途制限がある。またこれ以外の拠点は工業、準工業、近隣商業、第 1 種住居に位置している。また「風営法」により、年越しアートイベントや 24 時間イベントができないことや、「興行場法」により衛生設備の規定等、旧工場をそのまま利活用する際に障害となる規制が存在する。
- [注 8] SD 法による評価尺度対は「きれい／きたない」「明るい／暗い」「広い／狭い」「魅力ある／物足りない」「落ち着いた／慌ただしい」「心地のよい／心地のわるい」「親しみのある／親しみのない」「遊んでみたい／そうではない」「暖かい／冷たい」「洗練された感じ／野暮な感じ」「快適／不快」「開放的／閉鎖的」の 13 項目とし、「親しみのある／親しみのない」と「開放的／閉鎖的」の 2 項目は因子負荷量が 0.5 以下であるため分析から除いた。

[注 9] 評価尺度対は「歴史を感じる／歴史を感じない」「地域性がある／地域性がない」
「アートに適している／アートに適していない」「効果的／いまいち」「楽しい／つまらな
い」「期待感がある／期待感がない」の 6 項目にし、レーダーチャートには各項目を「歴
史感」「地域性」「アートに適合」「効果的」「楽しさ」「期待感」と示す。

第3章 工業衰退地近傍における文化芸術活動によるまちづくりの取り組み

3.1. 序

3.1.1. 梅香・四貫島地区の概要

3.2. 研究の方法

3.3. 結果と考察

3.3.1. 梅香・四貫島地区のまちづくり活動及び活動拠点の形成経緯

3.3.2. 梅香・四貫島地区における取り組みと運営主体の意識

3.3.3. 梅香・四貫島地区における活動拠点入居者の意識

3.3.4. 梅香・四貫島地区における活動拠点の施設整備状況

3.3.5. 梅香・四貫島地区における地域イベント来訪者の意識

3.4. 比較考察

3.5. 結論

脚注

第3章 工業衰退地近傍における文化芸術活動によるまちづくりの取り組み

3.1. 序

梅香・四貫島地区では北加賀屋とは異なり、産業遺産のような地域資源を持たない工業衰退地近傍の住宅地を背景として、一般の市場では扱えない老朽空き家を活用してアーティストやデザイナーなど創造的活動を志す若者が集まる仕掛けづくりを行っている。本章では梅香・四貫島におけるまちづくり活動のプロセスを通して、地主である地元企業との関わりと文化芸術活動を起点としたまちづくり活動の事業内容と継続性を探るとともに、入居促進策の枠組みを把握し、民間主導による地域再生のための手がかりを得ることを目的とする。

3.1.1. 梅香・四貫島地区の概要

梅香・四貫島地区は図 3-1 示すように大阪市の中西部に位置しており、三方を大阪湾、淀川、安治川に囲まれている。阪神なんば線「千鳥橋駅」が北に隣接し、六軒家川の渡りに JR 環状線「西九条駅」があり、梅田、なんば等の大阪市の都心部から約 10 分の交通に便利な地域である。梅香・四貫島地区の面積はおよそ 0.412 km² で此花区の面積の約 2.14% を占めており、地区の人口は 7,094 人・3,576 世帯で、此花区の約 10.7% を占めている。また此花区における事業所数のうち製造業事業所率は 9.8% と大阪市内の割合に比べて低い一方、製造業従業員の割合は 23.5% と高く、特に此花区は大阪市内で 1 事業所当たりの従業者数が 67.5 人と最も多い（表 3-1）。

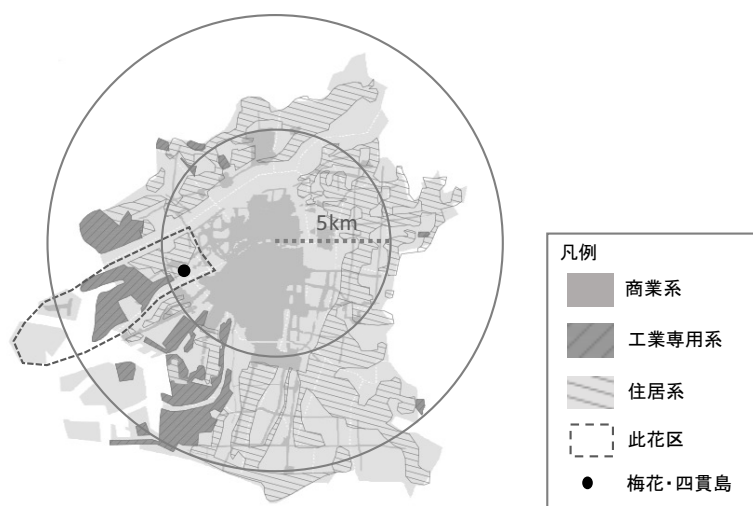


図 3-1 大阪市内の此花区・梅香・四貫島地区の位置

表 3-1 梅香・四貫島地区における地域基礎情報[58]

地名	面積(km ²)	人口(人)	世帯数(世帯)	事業所数(件)	製造業事業所数(件)	比率(%)	従業者数(人)	製造業従業者数(人)	比率(%)
大阪市	210.36	2,598,800	1,317,990	201,462	23,163	11	2,216,895	277,571	13
此花区	19.25	66,198	30,014	2,939	288	9.8	41,639	9,793	23.5
梅香・四貫島	0.412	7,094	3,576	742	34	4.6	3,448	137	4

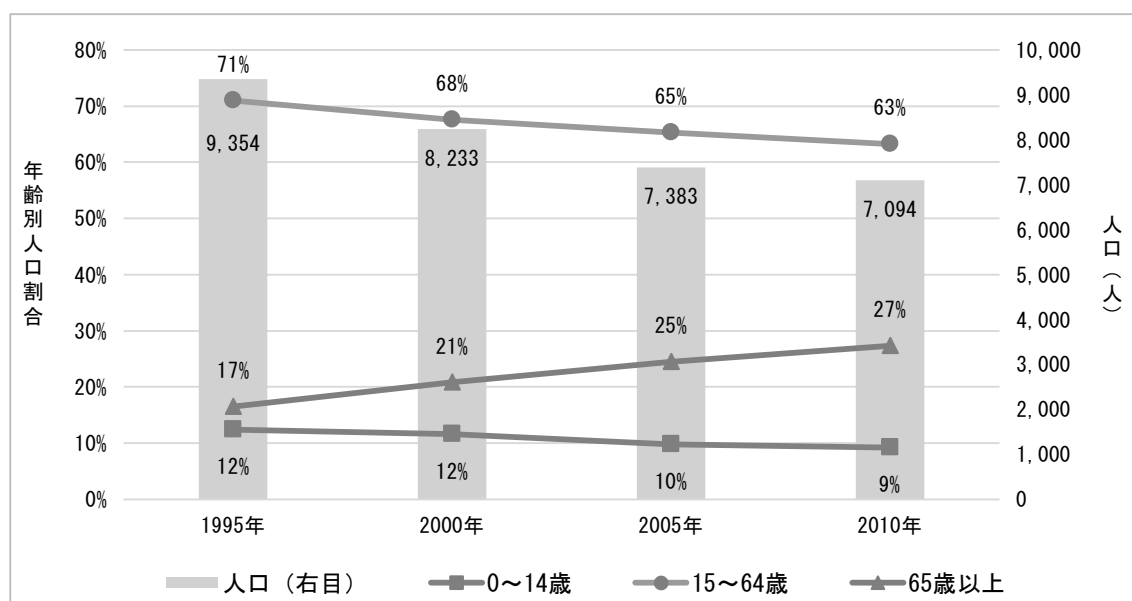


図 3-2 梅香・四貫島地区の人口変動推移[59]

梅香・四貫島地区の人口変動の推移（図 3-2）を見ると、全体人口は 1995 年 9,354 人であったのが 2010 年には 7,094 人と約 24%減少しており、年齢別割合でみると、年少人口「0～14 歳」、生産年齢人口「15～64 歳」は減少している一方、「65 歳以上」の老年人口は 1995 年 12%から 2010 年 27%と 15 年間 15%増え、高齢化が進んでいる。

大阪市此花区役所編『此花区史』[60]及びコルトナウスキ[45]の文献によれば、「梅香・四貫島」は 1871 年に正岡徳兵衛によって取得された新田で、農地として小作料を取り賃貸していたが、明治後期以降その周辺地域は、急速に大工場地帯として発展した。正蓮寺川沿いの大地主は 1919 年に大阪北港株式会社を組織し、北港の充実、運河の開設、住宅の開発などで都市化を推進した。大正時代に、いわゆる「西六社」-日立造船・汽車会社(1978 年に川崎重工工場)・大阪ガス・住友金属・住友化学・住友電線-と言われる大工場群がこの一帯に建ち並んだ。工場建設による労働者の住宅需要が増加したので、四貫島新田を住宅地として埋めたため、1907 年に政岡土地合資会社（1937 年、政岡土地株式会社に改組）が設立され、宅地などの開発を推進したとされている。

3.2. 研究の方法

本章では公開されている文献資料に加えて以下の調査を実施した。

3.2.1. 梅香・四貫島における運営主体へのインタビュー調査

梅香・四貫島における運営主体へのインタビュー調査を2016年1月から5月にかけて実施した。その概要を表3-2に示す。当該まちづくり活動の運営主体とは、まちづくり活動を主体的に運営し、地域の活動拠点を取りまとめる役割を担う組織あるいは個人とする〔注1〕。

表 3-2 運営主体へのインタビュー調査の概要

日時	対象	方法	所要時間	質問内容
2016年1月12日	O氏	対面	約2時間	I. 「此花アーツファム構想」について 1. 開始時期及びきっかけ 2. 仕組み・取組み（不動産会社との関係） 3. アトリエを増やすための努力（取組み） 4. アーティスト間の関係 5. 終わったきっかけ・理由など（問題点） 6. 挙げられる課題 II. 「見つけ！このはな」イベントについて 1. 始まったきっかけ 2. 主体・参加アーティスト 3. 此花区役所・行政との関わり 4. 資金について 5. イベントについての考え・意見
2016年1月12日	O氏	電話	約30分	1. 仕事と収入の状況 2. 行政との関わり
2016年2月26日	此花区	対面	約1時間	1. 此花区全体におけるアートを用いたまちづくり活動 2. 梅香・四貫島エリアにおける空き家の利活用について
2016年3月2日	Y商事	対面	約1時間	1. 空き家活用の仕組み及びY商事の役割 2. 空き家活用の現状と物件の数 3. 空き家活用のメリット及び課題 4. イベントの効果
2016年4月18日	O氏	対面	約30分	1. 「此花メディア」の運営の引き継ぎと関わり 2. 「此花アーツファム」の結束について 3. I社・P社との現状の関わり 4. 現在の担い手としての意見： このような活動をしている理由 持続するために必要なこと 当該活動における難点及び課題 今後の取り組み及び計画
2016年4月18日	M土地担当者	対面	約40分	1. まちづくりをI社に依頼したきっかけ・背景 2. 展開における取り組み及び資金 3. まちづくりを依頼した側での当初の取り組みの評価・満足度について 4. 現在契約されているM土地物件の数 5. 現在当該活動における貴社の関わり 6. 大地主としてのメリット及び意見 7. ビジネスとして成立してできること・社会貢献 8. 今後の予定
2016年5月19日	I社の代表	対面	約40分	1. IOPが梅香・四貫島に関わった契機 2. 当初の推進状況・プログラム（ex. 学生授業・ワークショップ） 3. 当時の方針・取り組み 4. 此花アーツファム事務局の体制・役割 5. 主体がO氏に変わったこととその契機 6. 現状及び現在の取り組みについて

3.2.2. 梅香・四貫島における活動拠点入居者へのインタビュー調査

2007年以降、現在までに当該まちづくり活動に関わった活動拠点28か所（図3-3参照）の内、現在も活動を続けている常設拠点11カ所の入居者10名を対象に〔注2〕、入居の経緯及び動機、入居後の満足度、改修の有無などについて、インタビュー調査を実施した。ここでの活動拠点とはWeb上で掲載されたアートイベントにおいて公開した施設や敷地のことを言い、その中でイベント時のみ使用されたものを「一時拠点」、入居者が常時使用しているものを「常設拠点」と呼ぶ。またその内、地元の店舗や事業所がイベントに参加して活動に加わった拠点を「協力拠点」とする。当該調査は2016年1月から3月に各拠点に直接訪問して、共通の質問表を提示し約1時間ずつ聞き取りを行った。その日時と対象等の概要を表3-3、質問内容を表3-4に示す。

表 3-3 活動拠点入居者へのインタビュー調査の概要

日時	対象	方法	所要時間
2016年2月22日	H	対面	約1時間
	G	対面	約1時間
	C	対面	約1時間
	D	対面	約1時間
2016年2月26日	F	対面	約1時間
	J	対面	約1時間
	I	対面	約1時間
	E	対面	約1時間
2016年3月2日	B	対面	約1時間
	A	対面	約1時間

表 3-4 活動拠点入居者へのインタビュー調査の質問内容

梅香・四貫島地区について
入居されている空間をどのような目的で使っていますか？
入居前、「北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想」についてご存知でしたか？
どの経路でこの企画を知りましたか？
入居された動機は何ですか？
当該地区内で他のアーティストとの交流活動を良くされますか？
梅香・四貫島地区における活動の満足度
当該地区での活動を続けていくために何が必要ですか？
今後、当該地区が発展するには何が必要ですか？
将来移転する可能性はありますか？ 移転したい理由は何ですか？
入居されている物件について
建物の所有状況―権利関係、物件の所有者及び管理者
建物の利用状況―階数・部室の数、キッチン・トイレ・浴室などの専用・共用の状況
賃貸契約上の改造制限がありますか？
改修工事をしましたか？
どのような改修をしましたか？
改修工事内容の決定とその負担は誰がしていますか？
文化芸術を用いた地域再生について
[文化芸術を用いた地域再生]についてどう思いますか？
そのように思う理由は何ですか？

3.2.3. アートイベント来訪者へのアンケート調査

当該地区で毎年行われるアートイベント [注 3] 「見つけ！このはな」の 2015 年度の来訪者を対象に当該活動への意識・評価を把握するため、アンケート調査を実施した。調査はイベント当日 2015 年 9 月 26 日～27 日（2 日間）、調査員 7 人が現場にて来訪者に直接配布・回収した。その質問内容の概要を表 3-5 に示す。

表 3-5 アンケート調査の概要

「見つけ！このはな2015」について
今まで梅香・四貫島エリア(本日のイベント対象地)に訪れたことがありますか？その目的は？
本日、「見つけ！このはな2015」に来訪したきっかけは何ですか？
本日、「見つけ！このはな2015」で興味をもっているイベントはどれですか？
本日、訪れた又は訪れるイベント会場はどこですか？
本日のイベントについての評価
空き家・倉庫などの活用についての評価
今後の北加賀屋のアートイベントにも参加する意向がありますか？
梅香・四貫島における文化芸術活動について
梅香・四貫島における文化芸術活動についてご存知ですか？
梅香・四貫島における文化芸術活動を知ったきっかけは何ですか？
梅香・四貫島にアーティストが居住・作品活動をしていることについてどう思いますか？
今後持続されることを期待しますか？
より発展するためにどんなことが必要だと思いますか？
文化芸術活動による地域再生について
[文化芸術活動による地域再生]についてどう思いますか？
そのように思う理由は何ですか

3.3. 結果と考察

3.3.1. 梅香・四貫島におけるまちづくり活動及び活動拠点の形成経緯

梅香・四貫島における拠点施設 28 箇所の配置を図 3-3 に示し、以下に当該活動と各活動拠点の形成経緯をまとめる。

2007 年に此花区梅香・四貫島に約 4 万坪を所有する地元企業 M 土地は増えつつ有る空き家と高齢化が進む当該地区における将来の事業性に危機感を抱き、街の再活性化を目的として地域コンサルタント(I 社)にまちづくりを相談したことが契機となった。2007 年 10 月に当初の運営主体となった I 社は M 土地が所有する「マンション第一白鳥(図 3-3・N1)」の一室で学生らによる空き家改修プロジェクトを実施した。2008 年 4 月からは改修した空き部屋を「お試し暮らし」として無料で開放し、8 月には家具職人を招き「インテリア講習」を開催した。同年末には M 土地と I 社は系列の NPO 法人 P 社とともに「夢を持った若者を応援する街、梅香・四貫島」をテーマにアートイベント「このはな咲かせましょう」を開催した。このイベントにおいて街の将来構想として梅香・四貫島地区のまちづくり活動に「此花アーツファーム」の名称が提案された。また M 土地はこのイベントのために自社が所有する空き家や空き地をアーティストらの作品展示場所として提供した(図 3-3・N1,2,3,5,12,16)。その後、このイベントに出展していた作家の A 氏が梅香 1 丁目の「宮本マンション(図 3-3・N3)」の空き室に移り住むとともに、出展者の B 氏も四貫島 1 丁目にある商店街の空き店舗をアトリエ「森巢ラボ(図 3-3・N4)」として開設した。また此花アーツファームの命名者でもあり、当該イベントでパネリストを務めたア



図 3-3 梅香・四貫島地区における活動拠点の配置

アーティスト C 氏も梅香 1 丁目にあった元メリヤス工場跡を借りて共同アトリエ「此花メヂア(図 3-3・N5)」を設立した。この時期 I 社と NPO 法人 P 社が「水都大阪」[注 4]、「大阪カンヴァス」[注 5] など大規模なアートイベントに関わっていたことから、これらのイベントに参加するアーティストやスタッフに一定期間の滞在場所として「此花メヂア」や「モトタバコヤ(図 3-3・N2)」などの施設を提供したことが契機となり、イベント後に一部のアーティストが入居することになる。

2009 年 10 月には M 土地の支援を得てアートイベントを「みっけ！このはな」と改称し、「モトタバコヤ」を中心拠点に、この地区に入居したアーティストの仕事を公開するオープンアトリエも拠点に加えて地域を巡るイベントを実施した。またそれに併設して地域に隠された魅力的な空き物件を紹介する「オモシロ物件ツアー」も実施した。2009 年 11 月には人づてに此花のことを知ったキュレーター D 氏が梅香 1 丁目の川沿いにあった元倉庫を改装しオルタナティブ・ギャラリー「梅香堂(図 3-3・N6)」の運営を始めた。

次いで 2010 年 1 月には「此花メヂア」にいた詩人の E 氏が独立し梅香 2 丁目の木造アパートを改装して住居兼アトリエ「黒目画廊(図 3-3・N7)」を始めた。また同年、「此花メヂア」の設立者である C 氏から勧誘を受けた建築家 O 氏が「此花メヂア」に入居し、その運営を引きいだ。また同年外国人のアーティストが四貫島 1 丁目の空き店舗を改装して住居兼ライブイベントスペース「MIIT House(図 3-3・N8)」を開始した。次いで 8 月には、「水都大阪 2009」の際、此花で「お試し暮らし」を経験した文化活動コーディネータ G 氏が四貫島 2 丁目の空き店舗を活用し、住居兼オープンスペース「此花 S-229(図 3-3・N9)」を開設した。

2011 年 1 月には「此花メヂア」の運営をしていた建築家の O 氏とその知人の N 氏が梅香 1 丁目の「宮本マンション(図 3-3・N3)」の 2 階で共同スタジオを開設し、これまで「此花アーツファーム」の事務局をしていた I 社と NPO 法人 P 社から事務局を引き継ぎ、同年 10 月「此花メヂア」を中心拠点としてアートイベント「見つけ！このはな 2011」を開催した。2012 年 1 月には「黒目画廊」の E 氏らが「梅香堂」が入居している同じ倉庫の隣室に「OTONARI(図 3-3・N11)」を開設し、誰もが入れるまちの寄合所の役割を担った。同時期に N 氏は事務所とは別に梅香 1 丁目の一軒家とそこに隣接する文化住宅を合わせて借り、自宅兼シェアアトリエ「SPACE 丁(図 3-3・N12)」を開設した。運営主体を引き継いでいた O 氏と N 氏は 9 月に「モトタバコヤ」に「此花アーツファーム」の事務局を開設し、その 2 階と隣接する長屋「千鳥荘(図 3-3・N10)」を使って有料の「お試し暮らし」事業をはじめた。2013 年 3 月には「此花メヂア」と「梅香堂」などの影響を受けた H 氏が梅香 1 丁目の空き家でコマーシャル・ギャラリー「the three konohana(図 3-3・N13)」を開設した。またその翌月、「宮本マンション」2 階に入居していた O 氏は「此花アーツファーム」の事務局のある「モトタバコヤ」の 2 階にその事務所を移転し、同時期、「此花メヂア」のメンバーだった I 氏がアートイベントに使われていた梅香 3 丁目の一軒家「モトイザカヤ」に移り、音楽・パフォーマンスを中心とするオルタナティブスペース「FIGYA(図 3-3・N14)」を開設した。次いで、現代美術作家 J 氏が梅香 1 丁目にあった質屋の蔵を使ってイベントスペース「クラブucken(仮)(図 3-3・N15)」を開設し、アートイベントで使われていた梅香 2 丁目の「マンション第二白鳥(図 3-3・N16)」の空室にもアーティストらが入居し始める。その後、前年アートイベントに出展していた画家 K 氏も梅香 2 丁目の空室にアトリエ「ニロタカ(図 3-3・N17)」として入居した。また同イベントで利用されていた四貫島 1 丁目の店舗「モトサカナヤ」を O 氏が借りて飲食店・シェアハウス「四貫島 PORT(図 3-3・N18)」の事業を始めた。一方で活動の中心であった「此花メヂア」は建物の老朽化などの問題から閉鎖することになり、代わり「OTONARI」や「モトタバコヤ」がその役割を担うこととなった。またこの頃になると活動拠点の数も増え、アーティストの活動も本格化してきたことで、当初 C 氏が付けた「此花アーツファーム」という活動名称を終らせることになり、事務局も解散した。また毎年開催されていたアートイベントの名称も「このはなの日」に変更し M 土地に頼らず入居者だけで自立的に運営・企画する体制に改めた。

2014 年 1 月に「梅香堂」の主催者 D 氏が亡くなり閉鎖するとともに、同じ倉庫に入居していた「OTONARI」が大阪府から指導を受け 4 月に閉鎖し〔注 6〕、その後この倉庫には共同アトリエ・ギャラリー「ASYL(図 3-3・N6)」、「新スペース(図 3-3・N11)」が入居することになった。また昨年名称変更したアートイベントは再び元の「見つけ！このはな」に戻して 10 月に実施された〔注 7〕。この頃からアーティストだけでなくこの地域の活動に興味を持つ一般の若者や会社員、OL などの入居の兆しが見られはじめた。

2015 年、O 氏は梅香 1 丁目の古いアパートの管理人室をリノベーションし、宿泊施設「テトラ(図 3-3・N21)」の運営を始めるとともに、梅香 3 丁目の空き店舗を M 土地から借りて地域情報を発信するインターネット放送局「此花放送局(図 3-3・N19)」を開設した。7 月には「FIGYA」の I 氏が梅香 1 丁目の空き家を自宅として購入し住居・イベントスペース「水玉邸(図 3-3・N22)」を始めた。また 2014 年に閉鎖した「OTONARI」と「黒目画廊」の運営者 E 氏らは、四貫島 1 丁目の商店街の空き店舗を改装してアーティスト・イン・レジデンスが併設されたアパートメント「THE BLEND(図 3-3・N23)」の事業を開始した。また 12 月には「四貫島 PORT」の入居者であるランドスケープデザイナーの Q 氏が M 土地の所有する空き地を利用して森の景色に変える取り組み「fan の庭(図 3-3・N24)」を始めている。現在もアートイベントは毎年 1 回 2 日間開催され、2015 年時点では、約 85 人〔注 8〕以上のアーティストや拠点入居者らが当該地区で活動している。

梅香・四貫島地区における活動施設 28 カ所・31 件の活動拠点の概要と形成プロセスを表 3-6 に示す。同表の縦軸には各活動拠点として使われている施設を示し、図 3-3 に対応する番号で示した。横軸は左から「前用途」、「活動時期・経緯」、「活動拠点名」、「活用内容（現用途）」、「職種」、「活動人数」、「活動内容」を示している。「活動時期・経緯」のグレーのハッチは各拠点のイベントへの参加状況を示し、矢印の内、右へのフローは各活動拠点の活動期間を示す。縦の矢印は入居経緯を示しており、実線は既存拠点の入居者から新たな拠点を開設したこと、破線は既存拠点の入居者が関与して新たな入居者が拠点を開設したことを示す。

2007 年から始まった梅香・四貫島におけるまちづくりは「此花アーツファーム」の名称で活動を行なった 2009 年から 2013 年までとその前後に分けられる。また運営主体として I 社と NPO 法人 P 社が主導していた 2007 年から 2010 年までとそれを引き継いだ建築家の O 氏、N 氏が主導した 2011 年以降に区分でき、整理すると「準備段階（2007～2008）」、「アーツファーム前期（2009～2010）」、「アーツファーム後期（2011～2013）」「継承段階（2014～2016）」の 4 つのフェーズに整理できる。このまちづくり活動は当初の「準備段階」では空き家改修プロジェクトであったが、「アーツファーム前期」にはアートイベントの開催を契機にそれに関わったアーティストらの入居がはじまり、入居したアーティストが活動拠点を開設した。「アーツファーム後期」では、当初の立ち上げメンバーが去り、活動を引き継いだ拠点の入居者らが次の拠点の入居契機を生み出すことで展開していった。その後「継承段階」ではアーティストだけでなくこの地域に興味を持つ一般の入居者などへも拡大しつつある。

活動拠点の形成経緯をみると、アートイベントへの出展を契機としているものが 7 件、「此花メディア」から派生した拠点が 5 件であり、既存の活動拠点の入居者が新たな拠点を開設したものが 5 件、また既存の活動拠点の関与で新設されたものが 5 件である。一方、活動を開始した 2007 年から約 9 年間に、活動を中止した拠点は（老朽化により閉鎖した「此花メディア」を

表 3-6 梅香・四貫島地区における活動拠点の概要と形成プロセス

No.	建物 種類	活動時期・経緯										活動拠点名	活用内容	職種	活動 人数	活動内容			
		07'	08'	09'	10'	11'	12'	13'	14'	15'									
1	アパート	イ	07'10月 学生改修・講座・「お試し暮らし」				マンション第一白鳥				マンション第一白鳥	A R	文筆家、音楽家、デザイナー、アーティスト	4	インテリア改修講座・お試し暮らしから始まり、現在はそれぞれの部屋のアーティストのアトリエ・居住スペースとして使われている。				
2	空き店舗	イ	「水都大阪」の 出展作家滞在		モトタバコヤ		11' 9月 リニューアル シェアショップ・KAF事務局				モトタバコヤ (P社)	S	(シェアショップ)	5	元タバコ店を改装したシェアショップ兼事務所。1Fは南インド料理(パアルカリリー)と「うたかた珈琲」、フランス菓子で営業するシェアショップ、2FはO氏の事務所として使われている。				
							13' 4月 O氏独立		O	建築家									
3	アパート	イ	08'末	アーティスト	NPO法人P社 11'11月 シェアオフィス		O氏(P社)・N氏(N社)		(移転)	宮本マンション NPO法人P社、 NO ARCHITECTS	A R	画家	5	3階建ての古いアパートで、廊下を住民が改修し、作品展示や屋上でのパーティなどをしている。それぞれの部屋はアトリエ・オフィスとして使われている。					
											A	NPO法人							
											O	建築家							
4	空き店舗	イ	08'末	森巣ラボ								森巣ラボ	A R	現代美術家	1	商店街(元カメラ屋・元八百屋)に位置するアーティストのアトリエ兼居住スペース			
5	工場	イ	08'末	此花メディア								此花メディア	A M	メディア系作家、DJ、映像作家	3	連なった5棟の建物が増改築を繰り返し、13人のアーティストが「共同アトリエ」「ギャラリー」として多目的に運営している空間。耐震性などの問題で解体された。			
6	空倉庫			09'11月	梅香堂						14' ASYL	梅香堂 → ASYL	G → A R G	映像作家	3	川沿いの古い長屋の倉庫を改装したオルタナティブ・コマーシャル・ギャラリー。現代アートを中心に、展覧会、イベントを開催している。			
7	アパート			10'1月	黒目画廊								黒目画廊	A R G	詩人、写真家、音楽家	3	詩を朗読する詩人が木造アパートの自宅を「黒目画廊」と名付けて公開し、作品を制作する現場をそのまま展示している。		
8	工場			10'	MIIT HOUSE								MIIT House	A R	音楽家、ダンサー	2~8	ロサンゼルス出身の詩人で即興音楽家の住居兼ダンスのライブイベントスペースで、定期的にライブイベントなどを開催している。		
9	空き店舗			10'8月	此花S-229								此花S-229	A	アートディレクター、デザイナー	2	トークイベントを中心に活動を展開していたが、現在はシェアアトリエとして使っている。		
10	空き家				11' 9月	千鳥荘								千鳥荘	R	(長期滞在スペース)	1	此花の住み心地を実際に体験できる「お試し暮らし」を行っていた。現在は外国人向けの長期滞在スペースとして使われている。	
11	空倉庫				12'1月	OTONARI						14'9月 新スペース	OTONARI → 新スペース	M → A	映像作家、デザイナー	2	街のインフォメーションと軽食やお酒も楽しめる寄り合いのスペースだったが、現在はアーティストらのアトリエとして使われている。		
12	文化住宅				12'1月	SPACE T								SPACE T	A R	建築家、アーティスト	3	N氏の住居の一軒家と、裏に2階建て4室+屋上を有する文化住宅(シェアアトリエ)がある。	
13	空き店舗					13'3月	The Three Konohana						the three konohana	G O	ギャラリスト、登録作家多数	3	次代の現代美術のあり方を考え、再構築していくために必要な諸要素を、新たなプラットフォームに置き換えて実践する、コマーシャル・ギャラリースペースである。		
14	空き店舗					13'4月	FIGYA								FIGYA	A M	音楽家、現代アーティスト	2~10	元居酒屋を改装したオルタナティブスペース。展覧会・音楽イベントも等しく開催。ここで見られないアーティストが集まりつつある。
15	空き店舗					13'	クラブッケン						15'9月	クラブッケン(仮) → アトリエ	A → A	現代美術家	2	質屋の蔵であつた物件をアトリエとして利用している。一ヶ月に一度ほど蔵明け日を設けている。	
16	アパート					イ	13'	マンション第二白鳥						マンション第二白鳥	A R	映画評論家、現代美術家	2	空室を使い、「見つけ！このはな」の会場として使われていたが、現在はアーティストのアトリエ・居住地として使われている。	
17	アパート					イ	13'	ニロタカ						ニロタカ	A R	画家	1	画家ニロタカによる居住兼アトリエで、中で制作しており、「みつけ！このはな」などイベントで作品を公開することもある。	
18	空き店舗						13'8月	四貫島PORT						四貫島PORT	A R S	音楽家、映像作家、パン職人、陶芸作家、舞踏家(※入れ替わり有り)	15	1階は日替わり飲食店、2階より上はシェアハウスの住居・アトリエなどの複合建物で、「みつけ！このはな」の時の受付場所・イベント会場としても使われている。	
19	空き店舗						13'	イベントの時						此花放送局	A M	—	*	此花区の皆に知ってもらいたい人・まち・イベントの地域情報を発信するインターネット放送局で、イベント会場として使われる。	
20	空倉庫						14'	ソレイユ						ソレイユ	A S	クツ職人	1	空き倉庫を改修した手作り靴屋のショップとオープンアトリエ	
21	アパート						15'	テトラ						テトラ	R	(民泊)	*	古いアパートの管理人室を現代的にリノベーションしたお部屋で、此花の宿泊施設である。	
22	空き家						15'7月	水玉邸						水玉邸	R M	音楽家、現代アーティスト	2	FIGYAの運営者が購入して住んでいる住宅。今後他のアーティストも住みやすいように購入し、改修した実験的な物件である。	
23	空き店舗						15'8月	THE BLEND						THE BLEND	A R	詩人、写真家、音楽家	*	旅行者のように、宿に滞在する感覚で1か月からの滞在が可能なアーティスト・イン・レジデンスが併設されたシェアハウスである。	
24	空地						15'10月	fanの庭						fanの庭	M	ランドスケープ・アーキテクト	1	都市の空洞化が増加し、まさに負のイメージをもたらす空き地を、「明るい」「元気な」「おしゃな」空き地に転換させるプロジェクト	
25	空き店舗						15'12月	マリオーネ						マリオーネ	S R	パン職人	1	周りにパン屋さんがいないことから、まちづくりの一環でO氏が誘致した居住兼パン屋である。「みつけ！このはな2015」に参加	
26	福祉施設							働楽						働楽	O	(地域活動支援センター)	*	主な仕事は企業の下請け仕事などで、障がい当事者の日中活動の支援を中心に、地域との交流を積極的に進めている。	
27	家具屋							宮下工房						宮下工房	A S	家具デザイナー	1	木工作家のもとで技術を学び、2002年生まれ育った此花区にアトリエを開設し、改修工事の時家具や木工に関わることもある。	
28	着物屋							椿庵						椿庵	S	着物デザイナー	1	皆で着物を楽しめるスペースとして着物屋を運営している。	
イベント開催 (イベント名)			このはな咲かせましょう	見つけ！このはな2009	見つけ！このはな2010	見つけ！このはな2011	見つけ！このはな2012	このはなの日2013	見つけ！このはな2014	見つけ！このはな2015	【凡例】 A アトリエ R 居住 O オフィス S 店舗 M マルチスペース G ギャラリー 活動期間 イベント参加 (開始前は空き家活用) 過去名称 現拠点名 イ イベント参加が入居経緯 増設 影響(新設) * 場合によって相違								
開始(件)/年		0	5	1	3	1	2	6	3	6									
イベント参加(件)		0	6	3	1	3	5	0	0	0									
増設拠点		0	0	5	8	9	10	14	12	17									

図 3-4 活動拠点の様子



N2 モトタパコヤ



N5 此花メディア(*)



N4 森巣ラボ(*)



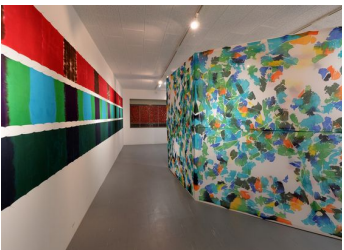
N8 MIIT HOUSE(*)



N7 黒目画廊



N9 此花S-229(*)



N13 The Three Konohana



N15 クラブッケン



N17 ニロタカ(*)



N20 ソレイユ



N18 PORT四貫島



N24 fanの庭(before&after)

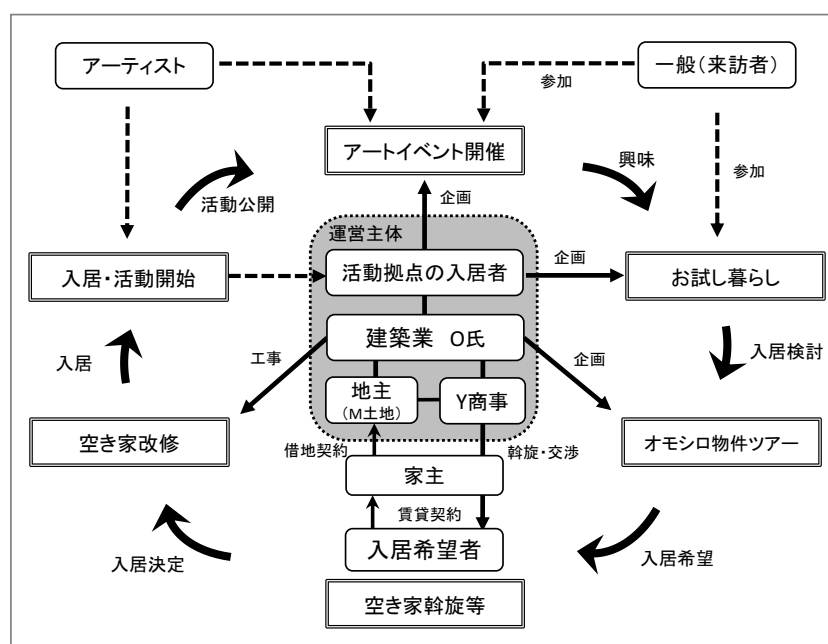
出展(*) <http://konohana-artsfarm.net/> * ないものは筆者が直接撮影

除いて) 3 件(「梅香堂」と「OTONARI」、「クラブッケン」) があるが、いずれも他の拠点に継承されており、現在も活動が継続している。

またアートイベントへの参加を見ると、最初のイベント「このはな咲かせましょう」においては常設拠点が 0 件で、一時拠点が 6 件であったのが、次第に常設拠点に移り 2015 年では常設拠点が 17 件、一時拠点が 0 件となり、アート作品を展示するイベントから活動拠点の増加とともにそのスペースを公開する内容に徐々に移り、活動拠点を巡るイベントに変わっている。

梅香・四貫島の拠点施設 25 件(協力拠点施設は除外)の前用途は、「店舗」9 件、「住居」9 件、「工場・倉庫」5 件、「テナントビル」と「空き地」がそれぞれ 1 件ずつである。また 28 か所(協力拠点施設は除外)の活動拠点の活用内容は、「アトリエ」が 18 件、「住宅」15 件、「ギャラリー・マルチスペース」が 5 件、「店舗」4 件、「オフィス」3 件であり、単独の利用は 10 件、複合的な利用は 18 件である。複合的利用の中には、「アトリエ兼住居」が 8 件と最も多い。このことから、当該地区ではアーティストが活動の場として活用するだけでなく、定住にも繋がっていることが示唆される。また 2015 年時点で映像作家や画家、デザイナー、音楽家など様々なジャンルのアーティストが 50 名以上が居住しており、当初のスローガンであった「夢を持った若者を応援する街、梅香・四貫島」として生まれ変わる可能性が期待される。

梅香・四貫島地区におけるまちづくり活動は地主の M 土地とその依頼を受けたコンサルタントの I 社、NPO 法人 P 社、拠点の入居者であり現在の運営主体でもある建築家の O 氏、N 氏及び入居促進に協力している不動産会社の Y 商事の連携で進められてきた。ここでは活動拠点と新規入居者が増えていった「アーツファーム後期」以降のまちづくり活動における入居促進の枠組みを整理し、図 3-5 に示す。以下ではこの活動の運営主体へのインタビューを交えてこの活動における入居促進策と運営主体の意識について考察する。



1) まちづくり活動の枠組み

当該地区におけるアートイベントは、まちなかの活動を地域内外に発信することを目的として 2008 年末の「このはな咲かせましょう」を前身として始まり、2009 年から「見つけ！このはな」として毎年 1 回開催されている[注 3]。当初は地主である M 土地が展示場所と活動資金(約 120 万円)を支援し、活動資金はアーティストの招聘と会場の運営に充てられていたが、活動拠点が増えるにつれて、入居したアーティストの拠点を公開するイベントへと次第に変化し、2012 年以降は活動拠点の入居者自らで資金を集め、自立的に企画・運営する体制に変化している。このことについて M 土地の担当者は「始めは当社で主導していたが、今では移住してきたアーティストに任せている」として「現在は受け身で、アーティストや O 氏からの提案があれば乗る」と述べており、現在は主導的役割から距離を置いている。

② お試し暮らし

当該地区に興味を持った来訪者などがこの地区で一定期間生活を体験できる「お試し暮らし」の制度が用意されている。当初（準備段階）学生が改修した空き家（マンション第一白鳥）を一定期間（2週間まで）滞在できるスペースとして無償で開放したことが契機となり、2011年まで実施された。その後「アーツファーム後期」の2013年までは「モトタバコヤ」の二階と、隣の長屋の「千鳥荘」を改修して、1,500円/日で最大2週間まで体験出来る有料の「お試し暮らし」が運営された。体験者からは体験レポートを作成してもらい、WEBで掲載することで、情報発信を行っていた（表3-7）。現在の「継承段階」では入居を決める前の登竜門的な物件として「マンション第二白鳥」の空き室が用意されており、比較的安い家賃（17,000円/月）で一定期間滞在しながら、地域での生活を試したり、入居する物件を探したりすることが出来る仕組みがある。

表3-7「お試し暮らし」の体験者のコメント

	期間	性別	年齢	職業	お試し暮らしのきっかけ	まちの印象・思い	此花に期待すること、感想
ア	2010. 2. 月前半	女	27	フリーター	大阪カンヴァス推進事業に携わっていた時に、此花に住んでいたスタッフからお試し暮らしの話聞いた。	すごく雰囲気のあるまちだなと、すごく独特で不思議な懐かしさの残っているまちなんだと思った。	私たちの仕事柄、作業スペースやアトリエみたいな所がまちなかにあればいいなと思う。そうすれば、もっと今以上にまちに関わる人々が増えてくるんじゃないかなと思う。
イ	2010. 10. 5 ～10. 31 (25日)	男	29	会社員	此花には「このはな咲かせましよう」の頃から遊びに行っていたので、スタッフの方からお試し暮らしのことを教えてもらった。	若い人がお店に来るのが珍しいらしく、みんな話しかけてきてくれた。喫茶店は、飲食する場所というよりはみんながおしゃべりする場所になっている。	まち全体がゆるやかにまとまっていって、いろんなレイヤーでアーティストさんや若い人が活躍できると思う。
ウ	2010. 4. 29 ～5. 5 (1週間)	女	19	学生	此花に住んでいる友人からお試し暮らしのことを聞いた。	近所の人達と挨拶はもちろん良く話したことが記憶に残っている。	お試し暮らしを終えて「楽しかったな～！」という感じだった。「見つけ！このはな」などのイベントにも参加したが、今後も時間があったら遊びに行きたいなと思う。
エ	2011. 7. 6 ～7. 12 7. 30～8. 7 (2週間)	女	25	現代美術家	初めて大阪で個展をやることになって。東京のイベントで大阪で活動しているアーティストにお試し暮らしについて聞いた。	歴史のあるまち・古いものが残っているまちなんだと感じた。おじいちゃんおばあちゃんが住んでいて、馴染みの商店街があって、いい雰囲気ですごく素敵なまちだなと感じた。	今回が初めての大阪での活動で、やってみるとこちに住みたいなって思うくらい楽しかった。此花にはまだまだ使える場所があると思うので、短期間滞在用のスペースやアトリエとか、いろんな場所ができればと思う。
オ	2011. 8. 23 ～8. 29 (1週間)	女	22	学生	まちづくりに興味があって、大学の授業でもまちあるきに参加して、講師の先生からお試し暮らしのことを教えてもらった。	面白い人達とたくさん出会えるまち。つながりのよい通連さんの多いまちでした。	静かで、都心ともいい距離感で、暮らしやすくて、人のつながりがあるまちで。そんな此花の魅力が、今後どんどん発信されていけばいいと思う。

③ オモシロ物件ツアー

建築家 O 氏が Y 商事や M 土地、個人オーナー（家主）と連携し、当該地区に隠された魅力的な空き物件を紹介する「オモシロ物件ツアー」を無料で開催している。ツアーの後には個別相談も行われ、紹介した物件だけでなく、ニーズに合わせた物件の仲介や建築専門家ならではの具体的な使い方や改修などに関するアドバイスなども行っている。また毎年開催されるアートイベントの一つのプログラムとしても併催されており、まちに興味がある人やイベント来訪者にここでの入居を考えさせる役割も果たしている。

④ 空き家の斡旋・改修

老朽化して住み手が見つからない空き家の所有者である家主あるいは M 土地と低廉な家賃(表 3-8)のアトリエを希望するアーティストの間で O 氏と Y 商事が家主に交渉して仲介を行っている。ここで扱っている物件は老朽化したものが多く、何らかの改修が必要になることもある。ただここでは O 氏と Y 商事が改修自由（原状回復義務免除）として交渉するため、アーティスト等入居者が自ら改修する場合や、建築専門家でもある O 氏がそれを請け負う場合もある[注 9]。このことについて O 氏は「汚い物件でも安く借りれるし手を入れてもいい。大家さん側はインシヤルを掛けられない、それだったらアーティストが直したり僕らが直して、使えるようになったらまた次の人もそこには入りやすくなる」と述べ、改修自由・原状回復義務免除は空き家所有者と入居者お互いにメリットにもなり、空き家活用の循環に繋がることが期待できる。表 3-7 に梅香・四貫島周辺物件と当該活動における対象物件の平均家賃の比較を示す。

表 3-8 梅香・四貫島周辺物件と当該活動における対象物件の平均家賃の比較

	物件数	家賃(円/㎡)	敷金(件数)	礼金(件数)
梅香・四貫島*	50件	1,826	28,222(9)	149,012(43)
当該活動**	10件	919	なし	なし

*梅香・四貫島内でランダムに物件を選択した。[62]

**ヒアリングを行った入居者の物件と「オモシロ物件紹介」ホームページに掲載している物件を対象にした。[63]



図 3-6 「四貫島 PORT」の改修事例

(出典 <http://pos-lab.com/work-category/work/shikanjima-port.html> より、著者編集)

以上の当該活動の枠組みについて、O 氏は「イベントがきっかけでこの地域を知る人やアーティストがいて、お試し暮らしや物件ツアーにも参加して、これだけ安く面白いところに住めるんだったらと感じて定着していく」と述べており、「アートイベント」・「お試し暮らし」・「オモシロ物件ツアー」・「空き家の仲介」・「空き家の改修」といった一連の活動が入居促進の枠組みを形成している。また同氏は「最近、自分がアート活動をするわけではないが、アートに興味・関心がある一般の入居希望者が普通に住む場所としてここで提供している空き家を選ぶ傾向がある」と述べており、これらの取り組みは若いアーティストだけでなく、街に興味を持った一般の会社員や若者の入居にも繋がっている可能性がある。

2) 空き家活用の事業形態

梅香・四貫島におけるまちづくりは、まちづくりコンサルタント、アート企画 NPO、建築設計事務所、不動産会社の連携と地主の協力の下で進められてきた。M 土地は古くからこの地域の大半の土地を所有する地主であり、その土地を事業者に貸すことで、家賃や借地料を得ている。一方その土地を借りた事業者(家主)はそこに建物(工場や倉庫、住宅など)を建て、工場などの場合は自ら操業し、住宅などの場合は入居者からの家賃収入を得て事業を行っていた。しかし、近年そのような建物が老朽化し少子高齢化が進み、継承する人や借り手もなく、所有者が改修費用を捻出することも難しいため古いまま放置されているものも多い(表 3-9①)。土地を借りていた事業者(家主)は本来ならばその土地を更地にして返還すること(表 3-9②)になるが、様々な理由から建物が撤去されずに返還される場合(表 3-9③)もいくつか見られるようになった。また、当該地区内には川沿いに大阪府の土地に建てられた物件も存在している(表 3-9④)。当該地区の空き家活用事業はこのような物件について、老朽化した建物を低廉な家賃で建物所有者(家主)や M 土地との賃貸借契約を結んでアーティスト等に貸し出すといった事業形態を取っている。またその契約においては建築コンサルタント O 氏、地元不動産 Y 社の連携によって、借り手が付かない老朽化した空き家の所有者とこの町に興味を持ったアーティスト等の入居希望者をマッチングさせることで成立している。

その事業形態は、地主、家主、拠点運営者(契約者)、入居者などの関係で表 3-9 に示す。

ア) 地主・家主分離型

宮本マンション、黒目画廊、OTONARI、the three konohana、ソレイユ等があり、非公開物件はこのケースが多く、この地域で一番多いケースである。M 土地の土地を借りて建物を建てた家主とアーティストや若者などの入居者が賃貸借契約を結んでいる。O 氏と Y 商事が個人オーナーと入居希望者の間で仲介・交渉する。

イ) 購入後賃貸

マリオネ、水玉邸があり、既に他拠点を運営している運営者が家主から借地権付きの物件を購入してリノベーション後、入居者と賃貸借契約を結び、賃貸料を取っている。

ウ) 協賛型

fan の庭があり、M 土地の空き地を活用する手法として、地域に入居したランドスケープデザイナーに使用契約の形で土地を協賛している。デザイナーには植栽するスペースができ、街においては奇麗な風景ができる。

エ) 地主・家主一体型

マンション第一白鳥、モトタバコヤ、此花メデア等があり、M 土地が所有する物件を O 氏や Y 商事の仲介で入居を希望するアーティストや若者と賃貸借契約をする。

表 3-9 空き家活用の事業形態

空き家発生の類型		事業形態					
過去	現在	類型	地主	家主	斡旋・交渉	契約者	入居者(アーティスト)
 A) M土地から土地を借りた個人オーナーが賃貸事業	 ① 従来そのまま維持	ア) 地主家主分離型	M土地	借地代 個人オーナー	O氏・Y商事	賃貸借契約	
		イ) 購入後賃貸型	M土地	個人オーナー	O氏・Y商事	購入 家賃	
	 ② 基本ボタン；更地に返還	ウ) 協賛型	M土地	使用賃貸契約	O氏	賃貸借契約	
	 ③ 特殊ボタン；撤去せずに返還	エ) 地主家主一体型	M土地	M土地	O氏	賃貸借契約	
			M土地	M土地	O氏	賃貸借契約	
		オ) シェアハウス型	M土地	M土地	O氏	賃貸借契約	
 B) 個人オーナーが大阪府から土地を借りて建物を建てる	 大阪府	サ) 府所有の土地	大阪府	個人オーナー	O氏・Y商事	賃貸借契約	

オ) シェアハウス型

四貫島 PORT、The Blend Apartment、SPACE 丁があり、若者を定着させるまちづくりの一環として拠点運営者の事業を M 土地が納得した場合、M 土地所有のビル全体をより低廉な家賃で賃貸し、シェアハウスやアーティストの滞在スペースとして家賃を取り立てることで運営されている。

サ) 府所有の土地型

ASYL、新スペースがあり、基本としては「A 地主・家主分離型」と同様であるが、土地所有者が大阪府であることから、現在では用途において制約がある場合(3.3.3 で詳細に記述)もある。

3) 運営主体の意識

地主である M 土地の担当者は「更地で返ってくるとそこは税金だけがかかる。誰にも貸してないと売り上げも上がってこないなので、活用して行かないといけない」と不動産事業の背景について述べているが「ただそれで大きく稼ごうとは思わない」として「それを貸すことによって商店街が(中略)賑わうと、その分まちの価値が上がる。土地の価値が上がるということは当社の資産の価値が上がるということ」と述べ、空き家をこの活動によって利活用することでまちの活

性化に繋がり、M 土地のビジネスに繋がることを期待している。またこれまでのまちづくり活動について、同担当者は「2006 年以降 35 人以上が当社の空き物件に入居しており、(中略)満足している」と述べており、「普通の仲介業者には出せないぐらいの古い物件なので一般の方法ではアーティストを呼ぶことは難しかったと思う」として、「ほとんどが O 氏や拠点アーティストの紹介であった」と述べており、彼らの活動を高く評価している。

一方、現在「継承段階」の中心的役割を担っている O 氏はその事業性について「まちづくりとかオモシロ物件ツアーはタダでやっているので直接収入にはならない」と述べているが、拠点の一部では「(老朽空き家の) 借地権を買ってリノベーションし (アーティストに) 安い家賃で貸すことで (多少は) 利益になる」とも述べている。また「ここでの活動が遠く回って (建築やアート関係の) 仕事が入っている。会社としての実績、個人としての実績にもなる」としており、結果として地域内外からの建築依頼やコンサルなどの仕事につながり、ビジネスとして成立していると述べている。

このような「空き家の斡旋」は M 土地や Y 商事にとっては本来の業務であり、建築家 O 氏にとっては直接収益になるわけではないが、関連する改修工事や他の仕事などに繋がる場合もあることから空き家活用事業として成立する可能性を持っている。

また当該地区の空き物件へのアーティストの入居に関して、O 氏は「此花区の住民は、もともと労働のために移住して来た人が多く、新しい住人に対しても排他的な雰囲気はない。干渉してくることもなく、良い意味で無関心」と述べている一方、仲介を手掛ける Y 商事は「オーナーさん (家主) が心配することは、(アーティストは) 夜が遅いとか、人がたくさん出入りするとか、音がするとかを心配している」としており、入居者の特殊性から来る問題が伺える。

アーティスト間の交流については、「月 1 回に寄り合いの日っていうのを決めて、みんなの近況報告とか、展覧会とか (中略) 何か緩い情報交換会というのはしている」として「基本的に、みんな顔が分かっていて仲がいい。何かそれなりのつながりはあるし、好き嫌いはたくさんあるが、イベントはみんなでやっている」と述べており、イベント開催や定期的な集まりにより、交流ができていることがわかる。一方、2013 年に「此花アーツファーム」という名称を解消したことについて O 氏は地域で活動するアーティストが増え、「名前だけが一人歩きしていくことで、一緒に見られるのを嫌う人も出てきた」として「それぞれのスペース単位で名前が売れていった方がいい」という考えから「此花メディアが 2013 年 9 月に閉鎖されたと同時に、此花アーツファームっていうのはもう使わないと僕らの中で決めた」と述べており、「まちがより良くなってほしいと思って動く人と、この現状のままで良いと思っている人がいて、(中略) 調整が難しい」として自由な活動を重んじるアーティストをまとめることの難しさも伺える。しかし、この問題について「(まとめることは) 50 人ぐらいを超えた時に、もう別に気にならなくなった。」と述べている。

3.3.3. 梅香・四貫島地区における活動拠点入居者の意識

活動拠点 11 カ所の入居者 10 名へのインタビュー結果を表 3-10 に示す。その内訳は、30 代 7 名、40 代 3 名であり、この地区での居住経歴(2016 年 2 月時点)は、「3～5 年」が 5 名で、「1 年未満」3 名、「5 年以上」、「1～3 年」がそれぞれ 1 名ずつである。

1) 入居までの経緯と理由

入居前の当該地区のまちづくり活動に対する認知度(図 3-7)については「知っていた」が半数以上であり、知ったきっかけ(図 3-8)としては、「入居していた知人を通して」(6 名)、次いで「まちのイベント」や「アートプロジェクト」(2 名)をきっかけとしている。なお、入居を決めた要因(図 3-9)としては「安い家賃(7)」が最も多く、「自由な雰囲気(6)」、「交通の便利性(5)」、「他アーティストとの交流(5)」の順である。これについてのコメントを見ると、「自由な雰囲気なので好きにできる(表 3-10・③-F)」、「ライブをするとか(言う)嫌がる不動産屋が多かったけど、ここは凄くやりやすそうだったので(表 3-10・③-D)」など当該地区がアーティストに寛容な土地柄であることを表している。さらに、「他のアーティストと交流する機会は凄くあるので(表 3-10・③-A)」、「下町の空気が残ってたっていうのが大きい(表 3-10・③-D)」などその理由を挙げている。このことはアーティストなど文化芸術活動をする若者を定住させるためには、安い家賃と交通の利便性ととともに、好きなことができる自由な環境を確保することは重要な要素であることを示している。

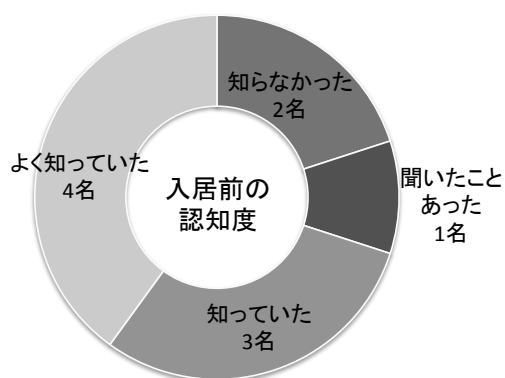


図 3-7 入居前の認知度(N=10)

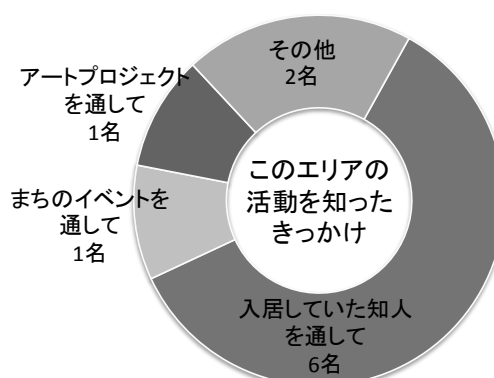


図 3-8 当該地区の活動を知ったきっかけ(N=10)

2) 当該地区における活動の評価

「拠点入居後の満足度」について 5 段階で評価させた結果の平均値をレーダーチャートで図 3-10 に示す。まず、「交通環境」が 4.5 点と最も高く次いで「生活環境」と「まちの雰囲気」が 4.0 点、「他アーティストとの交流」(3.9 点)、「展示・公演などの作品活動」(3.9 点)となっており、全体的に満足していることが分かる。ヒアリングによると、「家賃が安く交渉できて自分の仕事をするに関してベストな環境(表 3-10・④-C)」、「食品など物価が安い(表 3-10・④-B)」、「駅に近いし中心部からも近い(表 3-10・③-C)」、「下町感が良い(表 3-10・③-C)」などこのエリアでの生活に満足を示している。一方、「地域との連携が出来てないことが多いため気を使う(表 3-10・⑤-B)」、「外の人から入りにくく感じられていること(表 3-10・⑤-I)」など地域との連携や活動における不満も見られる。

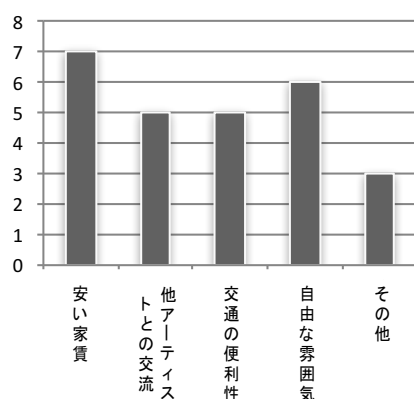


図 3-9 入居を決めた要因(複数回答 26)

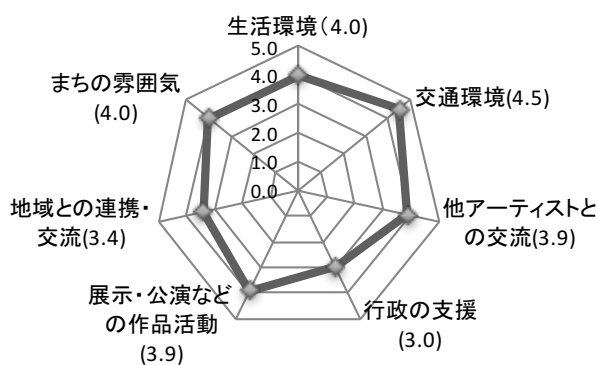


図 3-10 居住・活動の満足度(N=10)

3) 他のアーティストとの交流

「他のアーティストとの交流」(図 3-11)について見ると、その頻度については「良くしている」と「どちらかといえばよくしている」が合わせて 7 名、「普通」2 名、「どちらかというところとあまりしてない」1 名という結果となった。コメントを見ると、「毎月 1 回の寄り合いには情報共有のため、積極的に参加している(表 3-10・⑥-C)」、「アーティストがたくさん住んでいるので、他のアーティストとの交流が楽しい(表 3-10・④-B)」や「現在はコミュニティが密になっていて、みんな家族みたいな感じ(表 3-10・⑥-A)」と交流の質に満足している意見も見られる一方、「過去に比べると最近頻繁ではないと思う(表 3-10・⑥-I)」や「アーティストがもっと増えてくれて、交流も増えたらいい(表 3-10・⑤-C)」など活発な交流を求める意見も見られた。さらに、「何かのムーブメントとして見られること(表 3-10・⑤-D)」の不満や、「ひとまとめにして此花のコミュニティに関わったと見られるような見方をされることは嫌(表 3-10・⑤-I)」などの反感も見られる。これは運営主体の O 氏が指摘した自由な活動を重んじるアーティストをまとめる難しさ(3.3.2)とも相通じる。

4) 行政に対する要望

「行政に対するコメント」を見ると、「文句を言って来なければ良い（表 3-10・⑧-A）」「行政のお金が入ったら縛りが付くので、あまり望んでない」など行政に対する期待や要望はなかった一方で「(活動の) 揚げ足を取ることなく、優しくしてくれたら良いと思う(表 3-10・⑧-A、D)」として、まちの案内所「OTONARI」が府の指導により閉鎖することになったことなど、行政対応についての不満もみられた。

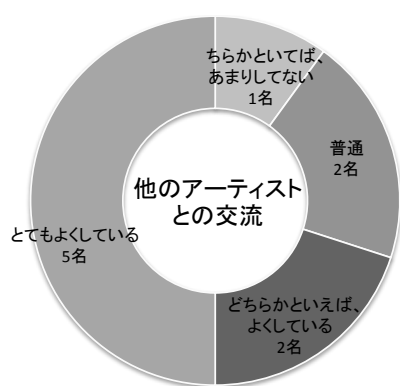


図 3-11 他アーティストとの交流(N=10)

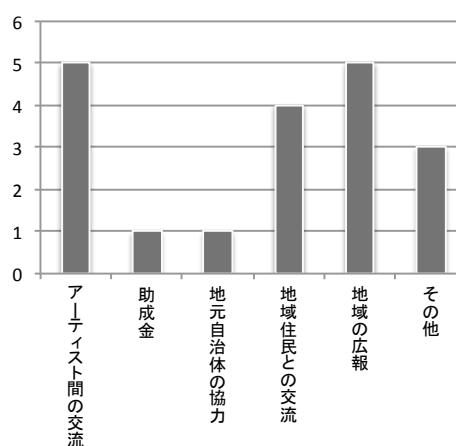


図 3-12 今後この地区が持続するために必要なこと(N=10)

5) 今後、当該地区が持続するために必要なこと

「今後、当該地区が持続するために必要なこと」(図 3-12)としては、「アーティスト間の交流(5)」、「地域の広報(5)」、「地域住民との交流(4)」が必要されており、コメントを見ると、「まだそんなに知られてないと思うので、色んな人に知ってもらうためには地域の広報は大事(表 3-10・⑨-C、F)」という地域の地名度の低さを理由として地域の広報を求めている意見が多数見られる。また「ここで活動する人たちが地元住民との関係とかにも意識を持つことが重要(表 3-10・⑨-B)」や「アーティストが生活をきっちりしていく事(表 3-10・⑨-B)」など生活習慣が特殊なアーティストと地域住民の交流については課題を抱えていることが伺える。このことは運営主体の Y 商事が指摘した家主の不安とも共通する。一方以前から地元で家具工房(表 1-27)を運営している L 氏[64]は「他の地域から移り住んで来られた方と交流する事で新しい地元の良さを発見する事ができる」と入居者との交流の利点を述べており、このことは地元地域との良好な交流の可能性を示唆するものである。また、「面白いことが起こり続けられることが一番(表 3-10・⑨-D)」や「アートだけではなく、自分の力で何かコツコツやってる人、個性を続いているような人が増えたらいいと思う(表 3-10・⑨-D)」など文化芸術活動の重要性を強調する意見も見られる。

表 3-10 活動拠点入居者へのヒアリング結果

質問 /対象	①		②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
	活用 内容	入居 歴	入居前認知度・知ったきっかけ 入居された経緯	入居を決めた要因	満足していること	満足していないこと	他のアーティストとの交流	自らの活動を続けていく ために必要なこと	地元自治体・行政 に対する意見	今後、このエリアが持続する に必要なこと
A	2カ所 ①オフィス ②住居	3年以上5年未満	・よく知っていた ・入居していた知人と此花メディアを通して ・I社の企画とかにも関わったりして此花によく遊びに来たりする中で、「此花メディア」のメディアの日などにも参加し、そこでO氏と仲良くなり、誘われた	・安い家賃 ・交通の便利性 ・自由な雰囲気 ・他のアーティストと交流する機会はあるので	・建築の仕事をしているので、空き家を改修することが認められていることは凄くメリット、此花で活動している人たちで、自分のスペースを作りたいという意気込みが強い人は一緒にやっている ・生活環境—基本的に安い ・交通環境 ・下町の空気感—時間の流れがゆっくりしている	・普段デメリットと思われることがメリットとして感じれる	・当初はそれぞれ作家活動して、集まる場所とかもなくイベントがあれば集まったが、現在はコミュニティが密になっていて、みんな家族みたいな感じ。 ・交流するので色んな人が見てくれるというか、知ってもらえる機会、交流する機会は凄くある	・アーティスト間の交流	・文句を言ってこないとよい ・OTONARIは大阪府の寡占の問題でなくなっているの、揚げ足を取ることなく、優しくしてくれたら良いと思う	・地域（住民）との交流
B	2カ所 ①アトリエ、マルチスベース ②住居	3年以上5年未満	・よく知っていた ・入居していた知人を通して ・四貫島portのYさんが近くでアトリエをしていて遊びに行き、その後引越すタイミングでYさんから此花のことを聞いた。 ・2件目はO氏とM土地に誘われて始めた	・安い家賃 ・自由な雰囲気 ・他のアーティストと交流の機会	・生活環境：食品など物価が安い ・交通環境 ・アーティストがたくさん住んでいるので、他のアーティストとの交流が楽しい	・地域との連帯・交流：もっと出来た方が良いと思うが、そのような事に関心がないアーティスト(新入居者)もいるので、少し不満 ・地域との連携が出来てないことが多いため気を使う ・柄の悪い人もいる	・凄くしている方だと思う ・サウンドパフォーマンスができる人たちとは普段からコミュニケーションを取った中で、イベントを企画することもある。 ・コミュニケーションがてらセッション的なことをやる事もある。そうした中で、音楽しかしていなかった人がビジュアルアートをしたりする事もある。	・活動資金があれば良い	—	・アーティストが生活をきっちりしていく事、ここで活動する人たちが地元住民との関係とかにも意識を持つことが重要
C	ギャラリー・オフィス	1年以上3年未満	・よく知っていた ・入居していた知人を通して ・「梅香堂」の展示会を見に来たことがきっかけで、面白いことをしてカルチャーショックを受け好きになった	・安い家賃 ・駅に遠いし中心部からも遠い交通の便利性 ・自由な雰囲気、街の不動産屋さんがクリエイティブな活動をしている作家に対して協力的 ・他のアーティストと交流する機会(多様な経験をしている若すぎない年齢層で安心)	・生活環境：家賃も安く交渉できて自分の仕事をするに関してベストな環境 ・交通環境 ・アーティスト間の交流 ・まちの雰囲気：若すぎない人たちが活動をしているので	・あまりにも居心地がよいので中にもりやすい ・もうちょっと何か、いろいろアーティストがもっと増えてくれてもいいと思う	・どちらかといえば、あまりしてない ・このギャラリーも基本的に此花のアーティストを取り上げるっていうスタンスではなく、外部の人が主なので ・月1回寄り合いには情報共有のため、積極的に参加している	—	—	・もうちょっとアーティスト増えてほしい ・地域の宣伝、まだあまり知らない人も多いので
D	住居・アトリエ・ギャラリー	5年以上	・当時はなかった ・まちのイベントを通して ・2009年「見つけ！このはな」にアーティストと呼ばれて空き物件で展示をした	・自由な雰囲気：ライブするとか(言うど)嫌がる不動産が多かったけど、ここはすごいやりやすいそうだったので ・下町の空気が残ってたっていうのが大きい	・生活環境：何か(建物の)形が面白かったり、もとの形が手作り感があるところはいい ・地域との連携・交流：まちの人には助けられているし、地元の人間として受け入れてくれる ・Y商事と相性がよい	・何かこうムーブメントとして見られること	・アート関係っていうのは顔を出してないから普通	・私の作品の価値を分かってももらえる人が増えること	・過去「OTONARI」が大阪府からやめさせられたことに不満	・アートだけではなく、自分の力で何かこつこつやってる人、個性を続いていけるような人が増えたらいいと思う
E	住居・店舗	1年未満	・聞いたことはあった ・入居していた知人を通して ・P社のまちの活性化プロジェクトのような感じで、パン屋を募集していたので	・お店をするために	・交通環境 ・他のアーティストの交流 ・地域との連携・交流 ・まちの雰囲気：下町感	・生活環境：すきま風が寒い、まだ直したいところがある	・どちらかといえば、よくしている	・アーティスト間の交流 ・地域住民との交流	—	・アーティスト間の交流 ・地域住民との交流 ・地域の広報
F	2カ所 ①日替わり飲食店 ②住居	3年以上5年未満	・知っていた ・他のアーティストを通して ・四貫島PORTのYさんからお店しながら住めるスペースがあるということを聞いて、元々このエリアには興味あったので	・安い家賃 ・周りに知合いが多いので安心 ・自由な雰囲気なので好きにできそうだったので	・生活環境：住み心地が良い、安い家賃で住みながらお店もできるので良い ・交通環境 ・他のアーティストとの交流の機会	—	・良くしている	・アーティスト間の交流 ・最近地域住民との交流は大事だと感じている	—	・アーティスト間の交流 ・地域住民との交流 ・まだそんなに知られてないと思うので、色んな人に知ってもらうためには地域の広報は大事 ・色んな人が来やすい環境になれば良いと思う
G	2カ所 ①日替わり飲食店 ②住居	3年以上5年未満	・知っていた ・大阪市のアートプロジェクト「大阪カンヴァス」を通して、当時スタッフとして関わった	・独立のため	・交通環境 ・まちの雰囲気 ・大体何でも揃っていて住み安い	・本屋さんなどが無い	・良くしている	—	—	・幅広い年齢の人が交流できればよい
H	2カ所 ①住居・オフィス(シェアハウス) ②空地	1年未満	・知っていた ・此花の住人の友人を通して ・「見つけ！このはな」に参加していた人から紹介された ・事務所する場所を探している時に、空地进行できる環境があったので	・安い家賃 ・交通の便利性 ・空地を利用できるため	・生活環境　・交通環境 ・他のアーティストとの交流の機会：様々な人と連携、自分だけで出来ないことがみんなで出来る ・展示・公演などの作品活動 ・まちの雰囲気 ・緑化活動をすることができる余白がある	・行儀が良くない人もいる(違法駐車、ゴミ捨て)	・良くしている ・シェアしているの、毎日会っているし、カフェとか食事しにいったりするなかでも会える。仕事にも繋がる。	・アーティスト間の交流 ・地元自治体の協力(広げたらまた新しいことが出来る可能性がある) ・地域住民の参加	—	・アーティスト間の交流 ・地元自治体の協力 ・地域住民との交流 ・地域の広報
I	住居(シェアハウス)・アトリエ	3年以上5年未満	・よく知っていた ・「此花メディア」の立ち上げメンバーとして ・たまたま近所でアトリエをやっていたので(2008年～2015年)	・安い家賃 ・他アーティストとの交流の機会 ・交流のためにこのスペースを運営している ・交通の便利性	・生活環境 ・交通環境 ・展示・公演などの作品活動 ・まちの雰囲気 ・「梅香堂」に出会えたこと	・ひとまとめでして此花のコミュニティに関わったとような見方をされること ・外の人から入りにくく感じられていること	・(最近)あまりしてない ・もちろんあるけど、あまり頻繁ではないと思う ・日常の生活で会えるし、イベントの企画や相談などはたまにある。(MIT HOUSEと一緒にライブをしたりした)	・現状でも続けていけると思う	—	・アーティスト間の交流 ・面白いことが起こり続けることが一番だと思う ・インフラよりもどのようなことが面白いかが中身が大事
J	オフィス(シェアハウス)	1年未満	・よく知っていた ・入居していた知人を通して ・北加賀屋でも活動拠点を持っているが、個人オフィスのため入居	・安い家賃 ・交通の便利性 ・自由な雰囲気 ・他アーティストとの交流	・生活環境 ・交通環境 ・他アーティストとの交流 ・まちの雰囲気	—	・どちらかといえば、あまりしてない(まだ入居したばかりであるため)	・アーティスト間の交流 ・助成金 ・地元自治体の協力 ・地域住民の参加	—	・地域の広報

6) 文化芸術を用いた地域活性化への意見

「文化芸術を用いた地域活性化について」は大半が「文化芸術を用いて地域を改善することは良い」と考えており、その理由として「関わっている人の価値観が変わって、日常の活動のやり方もすごく（良い方向で）変わった人もたくさん見てるので(表 3-10・⑩-C)」「自分の経験からの意見と「若い人たちが興味を持って入って来やすいと思う(表 3-10・⑩-F)」、「アートを用いることで街に面白みがでると思うので地域の特色として広がる(表 3-10・⑩-H)」などまちの若返りや個性を生み出すことを期待する意見もみられた。一方、「人との繋がりが上手くできてこそ可能なことだと思う」や「イベント・運営主体のビジョンによると思う(表 3-10・⑩-D)」、「(文化芸術を) 活性化に積極的に取り入れることはあまり好きではないけど、人々が楽しんで活性化に繋がればそれはそれで良いと思う(表 3-10・⑩-I)」など中立的な意見も見られた。

3.3.4. 梅香・四貫島地区における活動拠点の改修状況

当該地区では物件とその所有者によって条件は異なるが、基本的には長期間空き家・空き室だった古い建物を活用対象としているため、家主はイニシャルコストをかけずに、低廉な家賃で入居者に改修を許可し、原状回復の義務を課していないケースが多い。ここではインタビュー対象の内、入居前改修を行ったと回答した 8 カ所についてその具体的な内容とその決定者また負担費用について調査を行った結果を示す。

まず、改修内容の決定については「入居者が自由に」6 件、「家主と相談」2 件と自由に行うケースが多い。「家主と相談」のうち 1 件は入居前家主がその費用を負担していた。それ以外は自己負担となっており、その費用は 20 万円から最大 160 万円まで幅広い。その内容については外部と内部に分けてその具体的な改修内容を部位ごとに「除去」、「増設」、「位置変更」、「部材の変更」、「デザイン・形状の変更」、「材質・色彩の変更」の 6 項目の有無で集計し図 3-13、図 3-14 に示す。これをみると、外部では「ドア」、「玄関」の部位が多く、その内容は「材質・色彩の変更」、「デザイン・形状の変更」など比較的容易な部分の改修が多く、外壁や屋根といった外観の大幅な変更はあまり行われていない傾向がある。これについて I (表 3-9) は「インフラよりもとのようなことが面白いか中身が大事」と説明している。一方で、H (表 3-9) は「別に目立ちたくないのだから看板とかだしてないし、文句を言われぬように気をつけている。イベントに来る人はどこか分かりにくくはなっている」と述べ、このことは地域住民へ与える影響が少ない反面、その新しいまちづくり活動を実施しているという印象が外部から分かりにくくなっている可能性が伺える。また、内部の改修においては、「内壁」、「キッチン」、「床」、「天井」の部位が多く、その内容は「材質・色彩の変更」、「部材変更」、「除去」などが多く、外部に比べて積極的に手を加えていることがわかる。

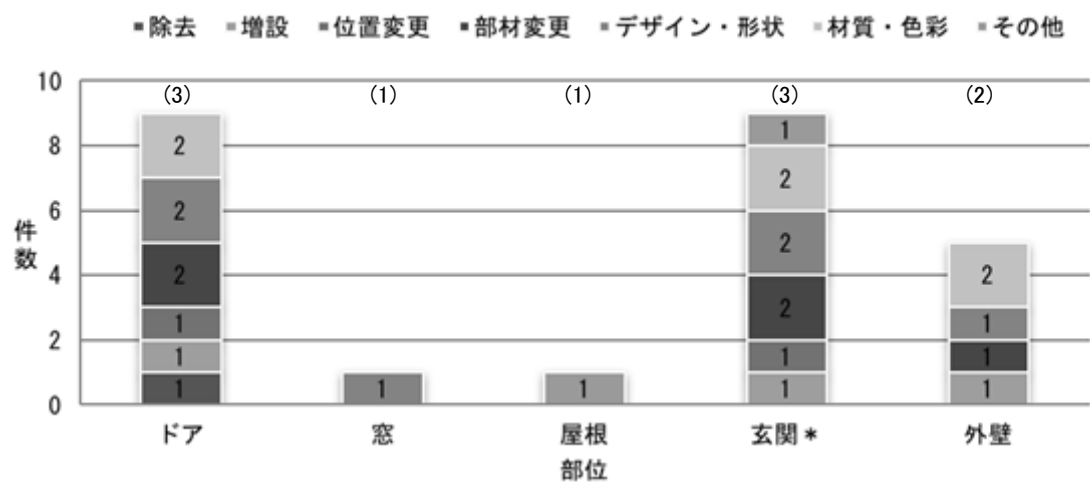


図 3-13 改修工事における内訳の集計(外部)(N=8,複数回答)

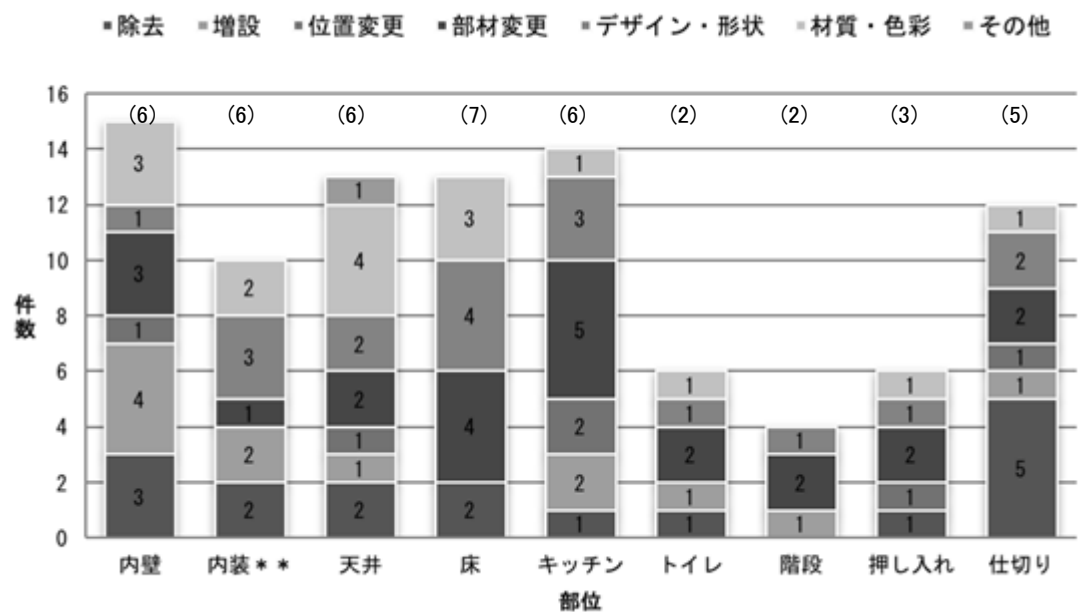


図 3-14 改修工事における内訳の集計(内部)(N=8,複数回答)

3.3.5. 梅香・四貫島地区におけるアートイベント来訪者の意識

梅香・四貫島地区において毎年 1 回定期的にアートイベントが行われており、ここでは 2015 年実施されたイベント「見つけ！このはな」の来訪者に対してアンケート調査を実施した。

1) 来訪者の属性

アンケートの回答者は全 76 名、有効回答者は 71 名である。その属性を図 3-15 に示す。これを見ると、男性が 29 名、女性が 42 名、年齢は 30 代が 27 名(38%)で最も多く、20 代は 21 名(30%)、40 代は 15 名(21%)、50 代以上は 8 名(11%)であり、各世帯からの参加が得られた。また回答者の居住地は大阪市外 36 名(51%)、大阪市内 25(35%)名、此花区 10 名(14%)であり、遠方からの来訪者が多い。職業は会社員が 37%で最も多く、公務員と自営業を合わせて働いている人は 59%で、学生の割合は少なく、このようなイベントにおいては、概して学生が多い傾向があるが、それとは異なる傾向が見られた。

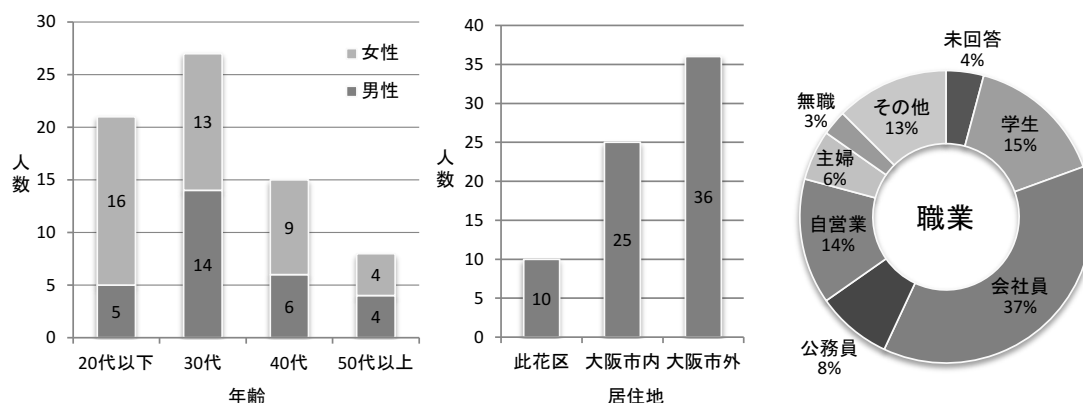


図 3-15 回答者の属性-年齢・居住地・職業(N=71)

2) イベントへの評価

来訪者に「見つけ！このはな 2015」のイベントについての印象を 10 項目の評価尺度対〔注 10〕に対して 5 段階で回答させた。図 3-16 に回答者の年齢層ごとの評価（平均）を示す。これを見ると、全体的に「楽しい」、「新鮮な」、「アートに適合」、「効果的」、「期待に答える」、「わかりやすい」など肯定的な印象側に評価している。一方、世代間の差がみられる「楽しい」、「新鮮な」、「アートに適合」、「効果的」、「期待に答える」などの項目で 20 代以下が最も高く評価しており、40 代の評価は比較的低い傾向を示している。なお、50 代以上はこのイベントを他の世代より「一般的」と捉えていることがわかる。またこの地区で空き家・空き工場・倉庫などを活用していることの評価について 13 項目〔注 11〕の評価尺度対に対して 5 段階で回答させた。図 3-17 に回答者の年齢層ごとの評価（平均）を示す。これを見ると、全体的に肯定的な評価に偏っているが、特に 20 代以下が「楽しい」「新鮮」「アートに適合」「効果的」に評価しており、40 代との差が見られる。「都会的/下町的」については「やや下町的」と捉えられているが、50 代以上は「どちらでもない」に近い。「洗練/野暮」においては「どちらでもない」である一方、「快適/不快」においては「やや快適」と評価されている。

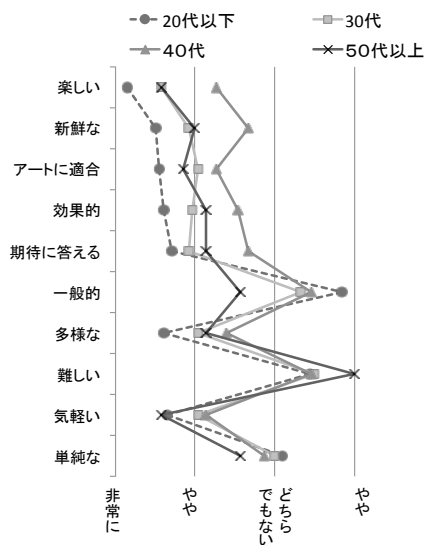


図 3-16 イベントについての評価 (N=68)

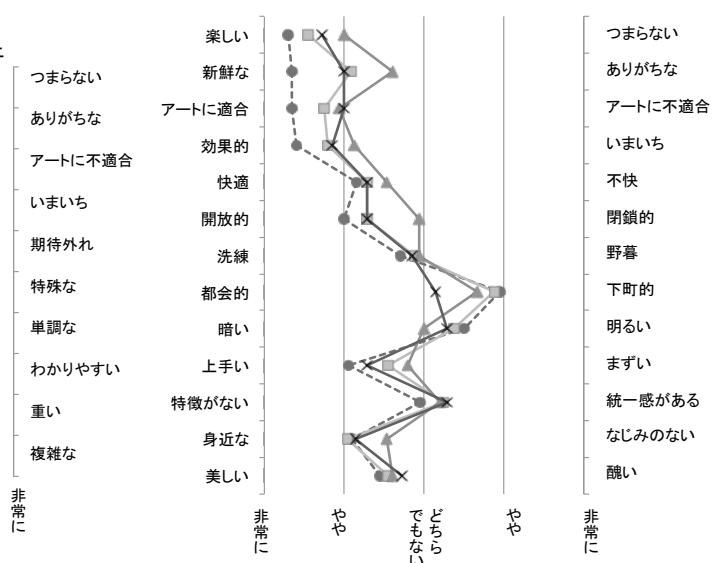


図 3-17 空き家・倉庫などの活用の評価(N=68)

ここで、回答者のコメントを見ると、「歩くとき新しい発見があり楽しい」や「すごくワクワクして色んなことやってみたいと思った」などイベントの多様性を楽しむ意見もみられた。また街の印象として「下町感がよい」という意見が多く見られており、「子供だった頃にタイムスリップしたような町並みだった」や「古い町並みが面白い」、「野暮な感じが良い、気軽にプラット馴染める」など下町的な風景を肯定的に評価する意見や、「画一的でないまちの使い方や人のありかたにとっても魅力を感じる」、「個性的で人がいきいきと暮らしている感じがした。」など特殊性を魅力的に評価する意見があり、アーティストだけでなく一般の人でも住んでみたいと思わせるまちづくりを行っていることが伺える。一方で「町全体にイベントをやっているという雰囲気あまり感じなかった」や「各イベント会場が少しわかりにくい、案内してくれる人がほしい」、「街の雰囲気は非常に心地良いがサイン計画がもう少しあってもよいかなと思う」などイベントや活動内容が来訪者から見えにくい点を指摘する意見などもみられた。

このイベントにおいて来訪者が興味のあるプログラムは（図 3-18）、「展示」、「まちあるき/ツアー」、「オープンアトリエ」が多い。また以前この地域を来訪した経験のある人は 50%以上で高く、今後の参加意向も 90%以上と非常に高い上に、以前来訪経験のある人の参加意向が比較的に高い(図 3-19)。ここで回答者のコメントを見ると「2009 年のイベントのときより拠点となる場所も増え、内容も濃く幅広くなった感じがある」、「スペースが増えて、コミュニティとして成長してきているのがこのイベントを通して実感する」など当該活動とイベントの継続を評価する意見が見られる。また「物件ツアー」に参加した来訪者は「私も出してみたい」や「すごくワクワクして色んなことやってみたいと思った」などイベントに自ら参加したいとする感想や「自分も機会があれば住んでみたいから」などこの地区での入居の意向をうかがわせるコメントも見られた。このことは文化芸術活動をしている若いアーティストだけでなく、街に興味を持った一般の会社員や若者の入居にも繋がっている可能性があることを示唆している。

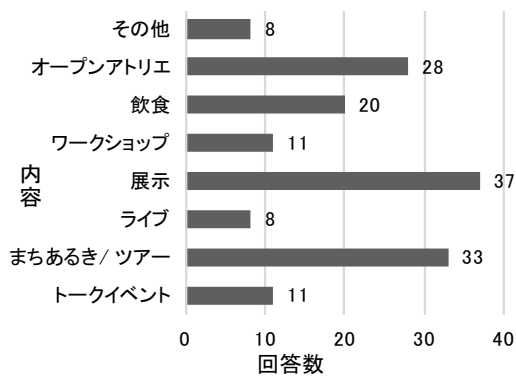


図 3-18 興味のあるプログラム(N=71)

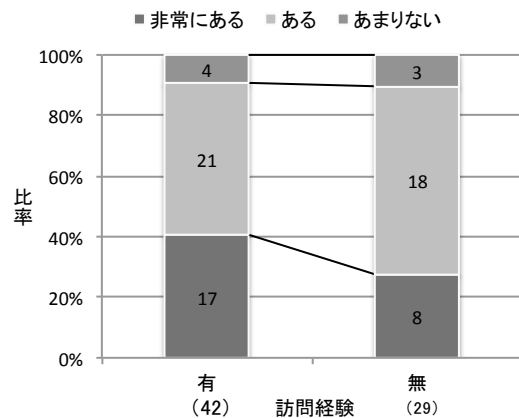


図 3-19 訪問経験・今後参加意向(N=71)

3) 梅香・四貫島における活動についての評価

梅香・四貫島地区におけるアーティストの居住・活動についての賛否を図 3-20、図 3-21 に示す。全体に肯定的であるが、「とても肯定的」と考える回答者の居住地が此花区、大阪市内、大阪市外になるにつれて低くなっている。また当該活動の持続への期待についての結果を図 3-22、図 3-23 に示す。

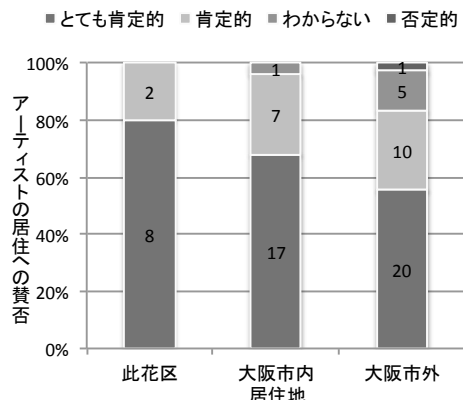


図 3-20 アーティスト居住への賛否(居住地ごと) (N=71)

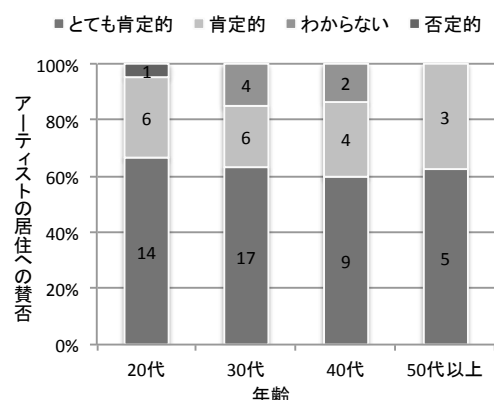


図 3-21 アーティスト居住への賛否(年齢ごと) (N=71)

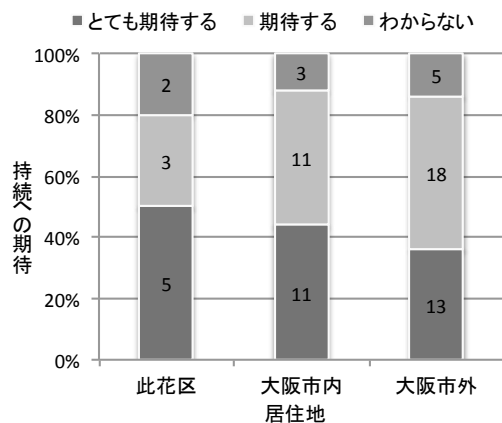


図 3-22 持続への期待(居住地ごと) (N=71)

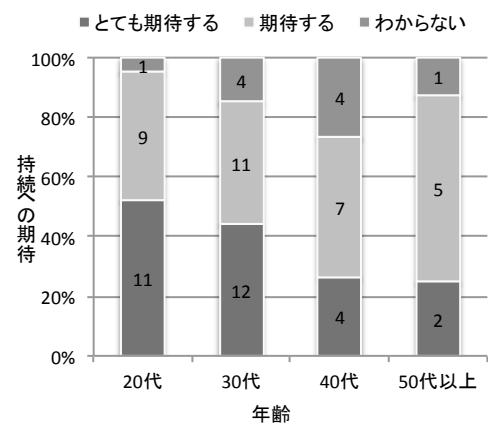


図 3-23 持続への期待(年齢ごと) (N=71)

これを見ると、約 80%以上が継続を期待しており、「とても期待する」とした回答は此花区、大阪市内、大阪市の順が多い。また年齢ごとでは、20 代以下の期待度が高く、40 代は低い結果となった。以上のことは、大阪市の外に比べて此花区の地元住民はアーティストの入居や活動の継続に肯定的であり、O 氏が「此地区はもともと労働のために移住してきた人が多く、新しい入居者に対しても排他的な雰囲気はない」と述べていることと符合する。ここで回答者のコメントをみると、「アーティストやクリエイターが活動することで高齢化や空き家が問題となっている町が活気づく」など地域とアーティスト双方に有益である点を評価する意見が見られた。また「空き家の活用方法として良いことだと思う」や「工場や倉庫、古い家など創作に適した場が多くある」など空き家をアトリエなどに利活用していることを評価する意見や、「地域に寄り沿った活動をしていると思う」や「古き良きハードを保存しながら活性化できる」など空き家を壊すことなく下町の良さを生かしながら活動していることを評価するコメントが見られた。

3.4. 結論

本章では工業衰退地近傍における文化芸術活動を起点とした自立的な地域再生の事例として梅香・四貫島地区におけるまちづくり活動を取り上げ、その活動プロセスと取り組みをまとめ、運営主体と活動拠点の入居者へのインタビュー及びアートイベントの来訪者へのアンケート調査などを実施し、以下の結果を得た。

- 1) 梅香・四貫島におけるまちづくりは「此花アーツファーム」の名称で活動を行なった 2009 年から 2013 年までとその前後に分けられる。また運営主体として I 社と P 社が主導していた 2007 年から 2010 までとそれを引き継いだ建築家の O 氏、N 氏が主導した 2011 年以降で区分でき、整理すると「準備段階(2007～2008)」、「アーツファーム前期(2009～2010)」、「アーツファーム後期(2011～2013)」、「継承段階(2014～2016)」の 4 つのフェーズに整理できる。
- 2) 活動拠点の形成経緯は、アートイベントへの出展を契機としているものが 7 件、「此花メディア」から派生した拠点が 5 件であり、既存の活動拠点の入居者が新たな拠点を開設したものが 5 件、また既存の活動拠点の関与で新設されたものが 5 件である。
- 3) 活動拠点のアートイベントへの参加は、最初のイベント「このはな咲かせましょう」においては常設拠点が 0 件、一時拠点が 6 件であったのが、次第に常設拠点に移り 2015 年では常設拠点が 17 件、一時拠点が 0 件となり、アート作品を展示するイベントから活動拠点の増加とともにそのスペースを公開する内容に徐々に代わっている。
- 4) 活動拠点の活用内容は、「アトリエ」が 18 件、「居住」15 件、「ギャラリー・マルチスペース」が 5 件、「店舗」4 件、「オフィス」3 件であり、単独の利用は 10 件、複合的な利用は 18 件である。複合的な利用の中には、「アトリエ兼住居」が 8 件と最も多く、当該地区ではアーティストが活動の場として活用するだけでなく、アーティストの入居・定住も見られる。
- 5) 当該活動は毎年定期的行われる「アートイベントの開催」・一定期間当該地区での生活を体験できる「お試し暮らし」・隠された魅力的な空き物件を紹介する「オモシロ物件ツアー」・家主と入居者に双方のメリットになるように低廉な家賃で「空き家の斡旋」・原状回復義務免除が付与された「空き家の改修」といった一連の入居促進の枠組みを形成している。
- 6) 空き家活用の事業形態は、地主、家主、拠点運営者(契約者)、入居者などの関係で「地主・家主分離型」、「購入後賃貸」、「協賛型」、「地主・家主一体型」、「シェアハウス型」、「府所有の土地型」といった 6 つのタイプで分類できる。
- 7) 空き家活用の事業は M 土地や Y 商事にとっては本来の業務であり、建築家の O 氏にとっては関連する改修工事や他の仕事などに繋る場合もあることから持続的な空き家再生事業として成立する可能性を持っている。
- 8) 文化芸術を用いた空き家活用においての課題としては、アーティストの生活リズムや活動による騒音など特殊性からくる家主の不安があること、入居者が増えるとともに自由な活

動を希望するアーティストをまとめることが難しいことなどが見られる。

- 9) 活動拠点入居者が入居を決めた要因については、「安い家賃」が最も多く、「自由な雰囲気」、「交通の便利性」、「他アーティストとの交流」の順で回答が多い。
- 10) 当該地区における活動の満足度は、「交通環境」が最も高く、次いで「生活環境」と「まちな雰囲気」、「他アーティストとの交流」、「展示・公演などの作品活動」の順となっており、全体的に満足を示している。
- 11) 今後当該地区が持続するためには、「アーティスト間の交流」、「地域の広報」、「地域住民との交流」が必要とされており、生活習慣が特殊なアーティストと地域住民の交流についての課題を抱えている。
- 12) 他のアーティストとの交流について、その頻度は「良くしている」が非常に多く、交流の質に満足している一方、さらに活発な交流を求める意見と同時に、ひとまとめにして見られることへの抵抗も見られた。
- 13) 活動拠点の改修状況では、改修内容の決定については入居者が自由に行うケースが多く、その費用は 20 万円から最大 160 万円まで幅広い。改修の内容は、外部では比較的容易な部分の改修が多い一方、内部においては多様な部位において積極的に手を加えている。
- 14) イベント来訪者の有効回答者 71 名の属性は、30 代が最も多く、居住地は大阪市外、大阪市内、此花区の順で多く、職業は公務員と自営業を合わせて働いている人は 6 割である。以前この地域を来訪した経験のある人は半分以上であり、今後の参加意向も 9 割以上と非常に高い。
- 15) 梅香・四貫島地区におけるアーティストの居住・活動と活動の持続への期待について、いずれも 8 割以上が肯定・期待を示しており、地域とアーティスト双方に有益であることや下町の良さを生かしながら空き家をアトリエなどに利活用していることを評価する意見が見られる。
- 16) 「見つけ！このはな 2015」のイベントの内容と空き家・空き工場・倉庫などを活用していることについての評価においては、全体的に「楽しい」、「新鮮な」、「アートに適合」、「効果的」など肯定的な評価尺度に偏っているが、20 代以下と 40 代との差が見られ、50 代以上はこのイベントを他の世代より「一般的」と捉えている。活用面の「洗練/野暮」においては「どちらでもない」である一方、「快適/不快」においては「やや快適」と評価されている。また馴染んでいる下町的な風景の中で個性的な使い方を通して、多様なイベントを楽しんでいる意見が多い一方、イベントや活動場所が来訪者から探しにくいという不満も見られる。

以上、当該活動は地域の大地主である地元企業 M 土地の関与によって開始されたが、その後地域に根付いた活動拠点の入居者らに運営が継承され、現在では M 土地の支援から離れて自立的な活動が継続されていること、またそこにはまちづくりへの有志の役割が重要であり、ビジネスとして成立可能な仕掛けづくりなどは民間による自立的まちづくりを進める上での手が必要

である。また「アートイベント」・「お試し暮らし」・「オモシロ物件ツアー」・「空き家の仲介」・「空き家の改修」といった入居促進のための一連の枠組みが形成されていることから、アーティストが単に活動をするだけでなく、入居にも繋がっていると考えられる。またここでは「アートイベント」に作品展示だけでなく、「物件ツアー」が併催されていること、「お試し暮らし」という制度を持っていることで来訪者にもここでの入居を考えさせる仕組みが用意されており、アーティストだけでなく、アートに興味を持った一般の会社員や若者の入居にもつながっている可能性がある。このことは、工業衰退地以外の空き家を抱えている他の地域においても適用可能性があると考えられる。

またこの活動を実現させるためには、安い家賃と交通の利便性ととともに、好きなことができる自由な環境を確保することは重要な要素であることが示唆された。またアーティストの居住・活動について此花区の居住者が肯定的に考えていることなど、文化芸術活動を伴うアーティストに寛容な土地柄であると考えられる。なお、古い下町的な風景を生かして居心地良い町として見直されるよう、既存空間にアートという新たな価値を付加する取り組みは来訪者からも高く評価されていることは、空き家等を利活用する上での手がかりである。

一方、自由な活動を重んじるアーティストをまとめる難しさや生活習慣が特殊なアーティストと地域住民の交流の問題を抱えていることが伺え、これらは文化芸術を用いたまちづくりを展開する上での課題であると考えられる。

以上を通してみると、工業衰退地周辺の住宅地のように街を支えてきた産業が失われてしまった地域では、新たな風を吹き込む必要があり、空き家の利活用をするにあたってニーズが合いやすいアーティストによる創造的な活動はその一つ的手段であると考えられる。ただ、当該まちづくり活動は「継承段階」にきており、今後も持続するためには、文化芸術活動を志す若者が集まってイベントとして活動を公開することだけでなく、彼らがさらに積極的に地元住民の中に溶け込み、日常的場面において相互交流を行い、信頼を得る必要があると考えられる。

脚注

[注 1] 当該まちづくりにおける運営主体は地主である地元企業 M 土地と不動産仲介会社の Y 商事及び 2007 年から 2010 までの前期においては地域コンサルタント I 社とその系列の NPO 法人 P 社が、2011 年以降はそれを引き継いだ建築家 O 氏、N 氏である。運営主体へのインタビュー調査は上記すべての運営主体を対象に実施した。(ただし I 社の代表は P 法人と同一)

[注 2] 活動拠点入居者へのインタビュー調査は、活動拠点 28 カ所の内、閉鎖した拠点 (N5) と協力拠点 (N26, N27, N28) 以外で、許可を得た 11 カ所 (N1, N3, N7, N12, N13, N14, N18, N19, N22, N23, N24) (4 章参照) の 10 名を対象にインタビュー調査を行った。この 11 か所に当該活動拠点の活用内容の種類がほぼ含まれていることから妥当であると判断した。ただし同一拠点に入居する複数の運営者や同一の入居者が複数の拠点を運営しているため拠点数と人数が異なる。

[注 3] 当該地区におけるアートイベントは、2008 年末「このはな咲かせましょう」を前身として始まり、2009 年からはイベント名を「見つけ！このはな」改名して、名称と体制の変遷をたてながら毎年 1 回開催されている。

開催時期	イベント名	開催時期	イベント名
2008年12月5日～7日	このはな咲かせましょう	2012年11月17日～18日	見つけ！このはな2012
2009年11月7日	見つけ！このはな2009	2013年10月12日～13日	このはなの日2013
2010年10月30日～31日	見つけ！このはな2010	2014年10月18日～19日	見つけ！このはな2014
2011年10月30日	見つけ！このはな2011	2015年09月26日～27日	見つけ！このはな2015

[注 4] 「水都大阪」は大阪再生に向けた取り組みが提案された水辺の拠点整備プロジェクトのことで 2009 年に「水都大阪 2009」が開催された。

[注 5] 「大阪カンヴァスプロジェクト」は、大阪府が主催してまち全体をアーティストの発表の場として「カンヴァス」に見立て、新たな都市魅力を創造・発信しようとする事業で 2010 から始まったアート活動。

[注 6] 六軒家川沿岸部は府所有の土地であり飲食営業や物販等の営業活動禁止の指導を受けた。

[注 7] M 土地の支援から資金的に自立して運営することを目指してイベント名を「見つけ！このはな」から「このはなの日」に改名したが、2014 年に活動拠点の変化に伴い、運営はそのままイベント名称のみ知名度のある「みつけ！このはな」に戻した。(O 氏のインタビューによる)

[注 8] O 氏のリストによれば、2015 年時点で活動拠点の活動人数は約 63～77 名で、非公開物件を含めたすべての活動人数は約 85～101 名である。

[注 9] O 氏(施工)、N 氏(設計)、宮下工房(家具)が改修工事に関わった物件は「モトタバコヤ」、「OTONARI」、「NO ARCHITECTS」、「SPACE 丁」、「The three konohana」、「四貫島 PORT」、「水玉邸」、「マリオオーネ」、「THE BLEND APARTMENT」などがある。

[注 10] SD 法による評価尺度対は「楽しいつまらない」、「新鮮な/ありがちな」、「アートに適

合/アートに不適合」、「効果的/いまいち」、「期待に答える / 期待外れ」「一般的/特殊な」「多様な/単調な」「難しい/わかりやすい」「気軽い/重い」「単純な/複雑な」の 10 項目とした。

[注 11] SD 法による評価尺度対は「楽しい/つまらない」、「新鮮な/ありがちな」、「アートに適合/アートに不適合」、「効果的/いまいち」、「快適/不快」、「開放的/閉鎖的」、「洗練な/野暮な」、「都会的/下町的」、「暗い/明るい」、「上手い/まずい」、「身近な/なじみのない」、「美しい/醜い」の 13 項目とした。

第 4 章 結論

第4章 結論

本研究は産業構造の変化に伴う大規模工場の撤退、移転などによって、地域の衰退が進む大阪湾岸部の重工業地帯とその近傍において地主である地元企業が積極的に関与し、文化芸術を用いたまちづくり活動を行っている北加賀屋と梅香・四貫島の2地区を取り上げ、そこでの取り組みと事業形態、関係者の意識などを分析し、以下の結果を得た。

第1章は序論であり、研究の目的とその背景を整理し、関連する既往研究について概要を示すとともに、本論文の位置づけを示した。

第2章では産業遺産の利活用を契機とした文化芸術活動による自立的まちづくり事業として「北加賀屋地区」を取り上げ、その事業主体の取組を把握するとともに、各活動拠点へのインタビューとそこで毎年開催される地域イベントでのアンケート調査などを実施し、以下の結果を得た。

- 1) 活動拠点の形成経緯として、当初はC社、R社からの勧誘で入居者を募ったが、以降は入居者のネットワークによって他の入居者が増えていくことになっており、拠点の形成には個々の人的ネットワークが大きく関わっている。
- 2) 全ての活動拠点の入居者はC社との賃貸契約が基本となっており、拠点の運営形態はその利用方法によって6つのタイプに分類できる。
- 3) 事業主体であるC社におけるまちづくり活動に関してはC財団が所管し、C財団の資金は主にC社を含むグループ企業から年間の運営費として約2,000万円が寄付されており、その内約6割がKCV構想のために使われている。
- 4) C財団が実施している取り組みは、①低廉な家賃・原状回復免除などの条件による活動拠点の形成、②地域住民と活動拠点間のコミュニケーションのための地域交流、③地域内外への情報発信、④文化芸術活動を活発化するための助成事業の4つに大別できる。
- 5) 活動拠点入居者が入居を決めた要因として「安い家賃」が最も多く、次いで「自由な雰囲気」、「他アーティストとの交流」の順で回答が多い。
- 6) 活動する上での満足度については、「他アーティストとの交流」が最も高く、次いで「生活環境」、「交通環境」、「地域との連携・交流」の順で満足を示している。一方「作品活動」、「まちの雰囲気」についてはやや低く、「行政の支援」は最も低い評価である。
- 7) 他アーティストとの交流については満足している意見が多い一方、活動分野が異なる拠点間での交流はそれほど行われておらず、拠点間の交流の機会をさらに求める意見と現状に満足する意見が分かれた。行政に対する要望としては、計画的な支援を要望する意見から、準工業地域である当該地域で文化芸術活動をしやすくなるよう、用途変更や法律的規制の緩和などが求められている。

- 8) 今後この活動が持続するためには、「地域の広報」、「アーティスト間の交流」、「地元住民との交流」が必要とされており、「地元住民との交流」については住民の参加を求めるだけでなく、活動拠点側から地域に馴染むことで地域住民との交流の重要性を指摘する意見が見られた。
- 9) 活動拠点施設の改修状況では、外観の大幅な変更はあまり行われていない傾向がある一方、内部では比較的多様な改修が行われている。
- 10) 地域アートイベント来訪者層は、年齢は20代と30代を含む若者が多く、職業は会社員の割合が非常に多い。来訪者の地域イベントへの今後の参加意向が高く、訪問経験がある人が今後の再訪問意向がもっと高い。
- 11) 来訪者の旧名村造船所跡地の印象は、全年齢層において「審美性」は評価が低い、「魅力度」、「安定感」は高い評価が得られている。また30代以下と40代以上で各評価値に明らかな差が見られた。
- 12) 旧名村造船所跡の活用評価は、総合的に高く評価されており、そのうち特に「歴史感」と「地域性」を高く評価している。年齢層で見ると、40代以上と30代以下でやや差が見られており、特に「効果的」、「楽しさ」においてばらつきが見られる。
- 13) 北加賀屋でのアーティストの居住・活動については、否定的な回答はなく、7割が肯定的に考えており、地元の住之江区の居住者層が最も肯定的に捉えている。一方、KCV構想の持続への期待については、大阪市内外の居住者層が高い傾向にあり、知名度の課題や将来性を不安視する意見はあるが、若い人が居住することで北加賀屋の活性化や街の若返りにつながることで、地域とアーティスト双方に有益であること、文化的環境への変化などの効果を期待しており、長く続けていくことでより文化芸術活動の集積にも繋がるなどKCV構想を肯定的に考えている意見が見られた。

以上より、北加賀屋におけるまちづくり活動「KCV 構想」の形成プロセスと枠組み、運営主体の取り組みと、KCV 構想における入居者の意識から入居要因、現在の活動また持続のための課題などを明らかにするとともに、来訪者の意識から産業遺産施設を文化芸術で利活用する上での留意点と自立的・持続的可能なビジネスとしての可能性を示した。

第3章では、工業衰退地近傍における文化芸術活動を起点とした自立的な地域再生の事例として梅香・四貫島地区におけるまちづくり活動を取り上げ、その活動プロセスと取り組みをまとめ、運営主体と活動拠点の入居者へのインタビュー及びアートイベントの来訪者へのアンケート調査などを実施し、以下の結果を得た。

- 1) 活動拠点の形成経緯は、アートイベントへの出展を契機としているものが7件、「此花メデア」から派生した拠点が5件であり、既存の活動拠点の入居者が新たな拠点を開設したものが5件、また既存の活動拠点の関与で新設されたものが5件である。

- 2) 活動拠点のアートイベントへの参加は、最初のイベント「このはな咲かせましょう」においては常設拠点が 0 件、一時拠点が 6 件であったのが、次第に常設拠点に移り 2015 年では常設拠点が 17 件、一時拠点が 0 件となり、アート作品を展示するイベントから活動拠点の増加とともにそのスペースを公開する内容に徐々に代わっている。
- 3) 活動拠点の活用内容は、「アトリエ」が 18 件、「居住」15 件、「ギャラリー・マルチスペース」が 5 件、「店舗」4 件、「オフィス」3 件であり、単独の利用は 10 件、複合的な利用は 18 件である。複合的な利用の中には、「アトリエ兼住居」が 8 件と最も多く、当該地区ではアーティストが活動の場として活用するだけでなく、アーティストの入居・定住も見られる。
- 4) 当該活動は毎年定期的に行われる「アートイベントの開催」・一定期間当該地区での生活を体験できる「お試し暮らし」・隠された魅力的な空き物件を紹介する「オモシロ物件ツアー」・家主と入居者に双方のメリットになるように低廉な家賃で「空き家の斡旋」・原状回復義務免除が付与された「空き家の改修」といった一連の入居促進の枠組みを形成している。
- 5) 空き家活用の事業形態は、地主・家主、拠点運営者(契約者)、入居者などの関係で「地主・家主分離型」、「購入後賃貸」、「協賛型」、「地主・家主一体型」、「シェアハウス型」、「府所有の土地型」といった 6 つのタイプで分類できる。
- 6) 空き家活用の事業は M 土地や Y 商事にとっては本来の業務であり、建築家の O 氏にとっては関連する改修工事や他の仕事などに繋がる場合もあることから持続的な空き家再生事業として成立する可能性を持っている。
- 7) 文化芸術を用いた空き家活用における課題としては、アーティストの生活リズムや活動による騒音など特殊性からくる家主の不安があること、入居者が増えるとともに自由な活動を希望するアーティストをまとめることが難しいことなどが見られる。
- 8) 活動拠点入居者が入居を決めた要因については、「安い家賃」が最も多く、「自由な雰囲気」、「交通の便利性」、「他アーティストとの交流」の順で回答が多い。
- 9) 当該地区における活動の満足度は、「交通環境」が最も高く、次いで「生活環境」と「まちな雰囲気」、「他アーティストとの交流」、「展示・公演などの作品活動」の順となっており、全体的に満足を示している。
- 10) 今後当該地区が持続するためには、「アーティスト間の交流」、「地域の広報」、「地域住民との交流」が必要とされており、生活習慣が特殊なアーティストと地域住民の交流についての課題を抱えている。
- 11) 他のアーティストとの交流について、その頻度は「良くしている」が非常に多く、交流の質に満足している一方、さらに活発な交流を求める意見と同時に、ひとまとめにして見られることへの抵抗も見られた。
- 12) 活動拠点の改修状況では、改修内容の決定については入居者が自由に行うケースが多く、その費用は 20 万円から最大 160 万円まで幅広い。改修の内容は、外部では比較的容易な部分の改修が多い一方、内部においては多様な部位において積極的に手を加えている。

- 13) イベント来訪者の有効回答者 71 名の属性は、30 代が最も多く、居住地は大阪市外、大阪市内、此花区の順で多く、職業は公務員と自営業を合わせて働いている人は 6 割である。以前この地域を来訪した経験のある人は半分以上であり、今後の参加意向も 9 割以上と非常に高い。
- 14) 梅香・四貫島地区におけるアーティストの居住・活動と活動の持続への期待について、いずれも 8 割以上が肯定・期待を示しており、地域とアーティスト双方に有益であることや下町の良さを生かしながら空き家をアトリエなどに利活用していることを評価する意見が見られる。
- 15) 「見つけ！このはな 2015」のイベントの内容と空き家・空き工場・倉庫などを活用していることについての評価においては、全体的に「楽しい」、「新鮮な」、「アートに適合」、「効果的」など肯定的な評価尺度に偏っているが、20 代以下と 40 代との差が見られ、50 代以上はこのイベントを他の世代より「一般的」と捉えている。活用面の「洗練/野暮」においては「どちらでもない」である一方、「快適/不快」においては「やや快適」と評価されている。また馴染んでいる下町的な風景の中で個性的な使い方を通して、多様なイベントを楽しんでいる意見が多い一方、イベントや活動場所が来訪者から探しにくいという不満も見られる。

以上より、梅香・四貫島地区におけるまちづくり活動において、入居に繋がる枠組みの循環、空き家再生事業として成立可能性など、民間主導による自立的なまちづくり活動の可能性と持続のための課題を示した。

第 4 章は既述のとおり、第 1 章から第 3 章までの結果を総括し、明らかになった主要な事項を取りまとめている。

北加賀屋における KCV 構想の発端は閉鎖した工場跡地の歴史を活かして近代化産業遺産に登録するとともに、さらに新しい価値を生み出す文化芸術のスペースへ転換できたことであり、そこには事業主体のリーダーシップと経営判断が重要であった。また活動の展開においては主体の不動産事業として、空き家・空き工場対策の一面を持つことで、公的財源に大きく依存せず自立的・持続的なビジネスとしての展開が可能であったと考えられる。

一方梅香・四貫島の事例では地域の大地主である地元企業の関与によって開始されたことは、北加賀屋の事例と同様であるが、その後地域に根付いた活動拠点の入居者らに運営が継承され、現在では地元企業の支援から離れて自立的な活動が継続されている点で異なっている。また当初の活動拠点はアートイベントに参加していたアーティストが入居することで形成され、そこから独立したアーティストがさらに新たな拠点を展開していったこと、「アートイベント」・「お試し暮らし」・「オモシロ物件ツアー」・「空き家の仲介」・「空き家の改修」といった入居促進のための一連の枠組みが形成されていることなども北加賀屋の事例と異なる梅香・四貫島における活動の特徴である。なお、梅香・四貫島ではアートイベントに作品展示だけでなく、「物件ツアー」

が併催されていること、「お試し暮らし」という制度を持っていることでイベント来訪者にここでの入居を考えさせる仕組みが用意されており、このことはアーティストだけでなく、アートに興味を持った一般の会社員や若者の入居にもつながっている可能性がある。

またこの活動を実現させるためには、入居できる空き物件の確保が重要であり、安い家賃と交通の利便性ととも、好きなことができる自由な環境はアーティストにとって重要な要素である。

北加賀屋では各活動拠点はずべて事業主体との賃貸契約が基本となっていること、ただし廉価な家賃設定と入居者による改修を許可し、原状回復の義務を免除することで、自由なスペースを確保したい入居者とマッチングできたことなどは文化芸術活動による空き家や空き工場の利活用のための手がかりである。一方梅香・四貫島では地主の支援があったことに加えて、活動拠点の入居者であり現在の活動の運営を担う建築家と不動産会社が連携し、地主以外の物件も含めて老朽化して住み手がつかない空き家を改修自由なアトリエ（原状回復義務免除）として、廉価な家賃設定で仲介・交渉できたことであり、このような空き家の活用は家主と入居者相互のメリットにもなっている。これは地主や不動産会社、家主にとっては本来の業務である一方、建築家にとっては、関連する改修工事などにつながる場合もあることから空き家再生事業として成立する可能性を持っている。

また拠点入居者が、安い賃料、自由な雰囲気について満足していること、来訪者や住民の評価も若いアーティストが居住することで、まちの活性化や若返りにつながると肯定的に捉えていることなどは2つの活動に共通している。

また北加賀屋の旧名村造船所跡について、審美性は低いものの魅力度は高く、歴史感や地域性の評価が高いことから、現存する施設そのものの歴史的価値を残すというよりはかつての造船業の歴史を背景としつつも、それに必要な手を加え、別用途に利活用することで KCV 構想の拠点として新しい価値を生み出していると考えられる。

以上のことは KCV 構想が産業遺産活用を起点とした自立的なまちづくり事業としての可能性を示唆するものと思われる。

一方、2つの活動で共通する課題としては、新規入居者が増えるとともに、自由な活動を重んじるアーティストをまとめることが難しくなりつつあること、梅香・四貫島では新規入居者に対して排他的な雰囲気が少ないが、家主にとってはアーティストの生活や活動に不安を感じていること、一方アーティスト自身も地元の地域に根ざす必要を感じていることなどは文化芸術活動によるまちづくりを進める上での課題でもある。

またこのような地域では工業用途に係る規制が多く、様々な障害が存在すること、KCV 構想では活動拠点の大幅な改修・変更はあまり行われていない傾向があり、このことは地域住民へ与える影響は少ない反面、新しいまちづくり活動を実施しているということが外部から分かりにくくなっている可能性もあること、旧名村造船所跡の印象や活用に対して世代間で評価が異なることなどは、今後空き家・空き工場等を利活用する際の留意点でもある。

以上を通してみると、工業衰退地とその周辺の住宅地のように街を支えてきた産業が失われてしまった地域では、新たな風を吹き込む必要があり、空き家の利活用をするにあたってニーズが合いやすいアーティストによる創造的な活動はその一つの手段であると考えられる。

これらの活動が今後も持続するためには、創造的活動を志す若者が集まってイベントとして活動を公開することだけでなく、彼らがさらに積極的に地元住民の中に溶け込み、日常的場面において相互交流を行い、信頼を得る必要があると考えられる。また、梅香・四貫島地区における「入居促進の枠組み」は、工業衰退地以外の空き家を抱えている他の地域においても適用可能性があると考えられる。

ただ、これらのまちづくり活動は将来の地域再生に繋がる初期段階の取り組みであり、現時点ではアーティスト等の入居が増えつつあり、アーティスト以外の一般人が入居する兆しも見えているものの、まだ彼らの「定住」を評価するには早い段階であると考えられる。今後はこれらの活動の展開を見守り、その中で一般入居者も含め、地域での定住への評価・分析を次の課題としたい。

謝辞

本研究を行うあたり、多くの方々のご協力と支援の下で、論文としてまとめることができましたので、深く感謝申し上げます。

研究の遂行及び本論文の作成、関連研究の執筆に当たっては、日頃より優しい指導ならびにご鞭撻を賜りました指導教員の大阪大学教授・阿部浩和先生に深く感謝いたします。また、博士ゼミにおいて研究の取り組み方、研究の方向性を的確にご指導いただいた大阪大学名誉教授 吉田勝行先生、大阪大学講師 安福健祐先生に感謝の意を表します。

本研究の副査である大阪大学工学研究科地球総合工学専攻の教授・横田隆司先生、並びに、木多道宏先生には副査として様々な助言を戴きました。ここに深謝の意を表します。

本研究の調査にご協力下さり、貴重な資料を提供していただきました北加賀屋と梅香・四貫島地域の各事業主体の方々、アンケートやインタビュー調査に応じてくださった周辺地域にお住まいの住民の皆様、来訪者の皆様に心より感謝いたします。そして、本論文の作成に当たって、様々な面で協力をいただきました建築・都市形態工学領域の方々に深く感謝いたします。

長い間、暖かく見守り、そして支えてくれた韓国にいる家族のおかげで、未熟ながらもここまで成長することができまして、心より感謝しています。また博士後期課程の3年間研究に専念できるようにご支援を頂いたロッテ財団にも心から感謝申し上げます。博士課程の卒業とともに長い学生生活も終わり、これからは社会人として新しい始まりでもあります。今後もこの3年数ヶ月の良い経験を活かして活躍できるように頑張ります。

末尾ながら、先駆的な研究成果を引用させていただいた多くの文献著者の方々に深く感謝申し上げます。

2017年4月記

参考文献

- [1] 財) 日本立地センター「平成 27 年度地域経済産業活性化対策調査報告書」2016.3
- [2] 国土交通省「空き地・空き家等外部不経済対策について」
内閣府,地域再生基本方針(平成 28 年 4 月 20 日一部変更)(2017.1.16 閲覧)
- [3] <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiki/tiikisaisei/kekka/160420/housin.pdf>
経済産業省地域経済産業政策課：特集 近代化産業遺産を活かしたまちづくり, 地域
活性化のための「近代化産業遺産群 33」, 月刊地域づくり, 財) 地域活性化センター,
[4] 2008.04 (2015.6.19.閲覧)
<http://www.chiiki-dukurihyakka.or.jp/book/monthly/0804/html/f12.htm>
石田直裕：平成 24 年度地域活性化事例集-アートを活用したまちづくり, 財) 地域活
[5] 性化センター, 2013.01 (2015.6.19.閲覧)
http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/1_all/jirei/2013_art/index.html
- [6] 総務省地域力創造グループ地域自立応援課,「創造的人材の定住・交流の促進に向けた
事例, ~定住自立圏の形成を目指して-」, 平成 24 年 3 月
平野暁子, 阿部浩和：地方都市におけるブラウンフィールドサイトに関する考察-泉州
[7] 地区における繊維工業跡地を事例として-, 日本建築学会技術報告集, Vol.16, No.32,
pp.309-313, 2010.02
宮川智子, 中山徹：日本オランダ・ドイツ・イギリスの土壤汚染対策に関する法制度の
[8] 比較-工場跡地等の土壤汚染対策と再開発に関する研究(その 1), 日本建築学計画系
論文集, 第 547 号, p.177-183, 2001.9
宮川智子, 中山徹：跡地利用・再開発と連携した土壤汚染対策の計画の検討-工場跡地
[9] 等の土壤汚染対策と再開発に関する研究(その 2), 日本建築学計画系論文集, 第 565 号,
p.209-216, 2003.3
高橋彰, 阿部浩和：大阪圏におけるマージナルブラウンフィールドサイト再生に関する
[10] 考察-大阪市東部地区を事例として, 日本建築学会記述報告集, 第 16 巻, 第 32 号,
pp.303-308, 2010.2
- [11] 中出文平：大田区住工混在地域における生産環境の変容と新たなる混在の進行に関する
考察, 日本都市計画学会学術研究発表会論文集第 17, p283-288, 1982.11
- [12] 中出文平：東京都区部の住工混在地域における居住・生産環境の変容の考察, 日本都市
計画学会学術研究発表会論文集第 18, p373-378, 1983.11
- [13] 中出文平：住工混在地域に最近立地したマンションの地域における役割に関する考察,
日本都市計画学会, 都市計画別冊 20, p181-186, 1985
和田真理子, 中井検裕：街区レベルでみた住工混在地区の土地利用変化に関する研究-
[14] 大田区大森地区の事例, 日本都市計画学会学術研究発表会論文集第 27 号, p505-510,
1992.11
和田真理子, 中井検裕：住工混在地区における土地利用変化のプロセスと最低敷地面積
[15] 制限に関する研究, 日本都市計画学会学術研究発表会論文集第 29 号, p493-498,
1994.11
- [16] 神吉紀世子, 小原宏香勝, 三宅雅美, 東樋口護：都市型公害地域における住工混在空間

- の変化と環境改善課題に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第 517 号, pp.207-213, 1999.3
- 安藤元夫, 広瀬智士, 幸田稔, 橋本未知: 住工混在地域の環境改善に関する研究 (その
- [17] 1) -住工混在地域における工場実態分析, 日本建築学会近畿支部研究報告集, pp.553-556, 2005
- 上林博幸, 安藤元夫, 宮沢登: 住工混在地域の環境改に関する研究 (その 2) -居住者の環境評価について, 日本建築学会近畿支部研究報告集, pp.581-584, 2005
- [18] 清水陽子, 中山徹: 住工混在地の事業者と工場跡地に建てられた住宅に住む住民の意識
- [19] と住工共存のまちづくりに関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第 612 号, pp.71-78, 2007.2
- 岡村祐, 豊田純子, 川原晋, 野原卓: 我が国における工場一斉公開プログラム「オープンファクトリー」の開催動向と可能性, 日本都市計画学会都市計画論文集, 第 51 巻, 第 3 号, pp.619-626, 2016
- [20] 市原猛志, 趙世晨, 九州地方の近代産業遺産の現存状況及びその特徴に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第 634 号, pp.2697-2702, 2008.12
- [21] 福井美弥, 阿部浩和, 橋寺知子: 産業遺産施設の保存活用 of の現状と事業主体の役割, 日本建築学会計画系論文集, 第 687 号, pp.1067-1076, 2013.5
- [22] 更科勝規, 横内憲久, 岡田智秀: 歴史的港湾施設の保存に係わる法制度に関する研究-
- [23] 横浜港と函館港を対象として, 日本建築学会計画系論文集, 第 618 号, pp.165-172, 2007.8
- 白木里恵子, 久保勝裕, 大垣直明: 転用主体の活動実績から見た歴史的建造物の転用プロセスに関する研究-小樽無尽ビルと油津赤レンガ館の事例分析を通じて, 日本建築学会計画系論文集, 第 71 巻, 第 610 号, pp.125-132, 2006.12
- [24] 白木里恵子, 久保勝裕, 大垣直明: 歴史的建造物の転用とまちづくりへの波及に関する
- [25] 研究-北海道における 10 事例を対象として, 日本建築学会計画系論文集, 第 73 巻, 第 625 号, pp.601-609, 2008.3
- 原田陽子, 山脇啓輔, 野嶋慎二: 大阪市空堀地区における新規流入者の創造的な暮らし方に関する研究-セルフビルドと創造的機能に着目して-, 日本建築学会計画系論文集, 第 76 巻, 第 667 号, pp.1641-1650, 2011.9
- [26] 脇田祥尚: コンバージョンによる長屋と路地の空間更新-中崎町界限(大阪市北区)を事例として, 日本建築学会計画系論文集, 第 76 巻, 第 660 号, pp.287-294, 2011.2
- [27] 高橋健太, 川島和彦: ドイツ・ライプツィヒにおける空き家の暫定利用方策に関する
- [28] 研究-HausHalten e.V.の取り組みに着目して-, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.655-656, 2015.9
- 荒木友里, 門内輝行: 京都市修徳学区における地域連携による空き家の悉皆調査-空き家問題を媒介としたまちづくりの実践に関する研究(その 1), 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.649-650, 2015.9
- [29] 豊島未来, 荒木友里, 門内輝行: 地域住民からみた空き家問題の認識の深化-空き家問題を媒介としたまちづくりの実践に関する研究(その 2), 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.651-652, 2015.9
- [30]

- 門内輝行, 荒木友里, 豊島未来: 集合的活動による空き家の利活用のデザイン-空き家問題
[31] 題を媒介としたまちづくりの実践に関する研究(その 3), 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.653—654, 2015.9
- 矢吹剣一, 西村幸夫, 窪田亜矢: 歴史的市街地における空き家再生活動に関する研究-
[32] 長野市善光寺門前町地区を対象として, 都市計画論文集, 第 49 巻, 第 1 号, pp.47-52, 2014.4
- 上段貴浩, 脇田祥尚: アートイベントによって顕在化する歴史的市街地の地域資源-「か
[33] らほりまちアート」を事例として-, 日本建築学会計画系論文集, 第 75 巻, 第 658, pp.2873-2880, 2010.12
- 春日和俊, 伊藤孝紀, 堀越哲美: アートイベントにおける都市部の地区演出の可能性-あ
[34] いちトリエンナーレ 2010 長者町会場を事例として-日本建築学会計画系論文集, Vol.77, No.681, pp.2577-2584, 2012.11
- 荒川佳大, 真野洋介: 地域での文化活動の派生からみた地域多主体型アートプロジェク
[35] トの役割に関する研究-墨田区向島地区での一連のアートプロジェクトを事例として-, 都市計画.別冊, 都市計画論文集, Vol.45, No.3, pp.289-294, 2010.10
- 田中遵: 芸術の導入による空き家再生の有効性の今後のあり方, デザイン学研究,
[36] No.56(4), pp.1-10, 2009
- 小林令明: アートを活用した過疎地活性化に関する研究-越後妻有アートネックレス
[37] 整備事業の文化面からの評価, 研究発表大会概要集, No.47, pp.56-57, 2000.10
- 鈴木都司, 山崎俊裕: アーティスト・イン・レジデンスの施設機能と運営に関する実態
[38] 調査, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-1, pp.465-466 2006.09
- 中嶋裕, 渡辺俊: アーティスト・イン・レジデンス事業の継続性の評価, 日本建築学会大
[39] 会学術講演梗概集, F-1, pp.893-894, 2009.08
- 中嶋裕, 渡辺俊: アーティスト・イン・レジデンスの効果と継続に向けた課題-地域と
[40] の関係構築の視点から, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-1, pp.295-296, 2010.07.20
- 佐脇三乃, 佐藤慎也: 創造活動を行う施設の運営と利用に関する研究, 日本建築学会大
[41] 会学術講演梗概集, F-1, pp.295-296, 2011.08
- 梶恵利香, 吉武哲信, 出口近士: 芸術家の居住地選択および居住環境評価に関する基礎
[42] 調査, 都市計画論文集, No.38-3, pp.79-84, 2003.10
- 渡辺尚見, 脇田祥尚: 地域資源を活かしたアートプロジェクトによるまちづくりコミ
[43] ュニティの形成 — からほりまちアートを事例として, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 第 53 巻, pp.497-500, 2013.05
- 小谷歩, 西英子, 小峯裕: シャッターアートプロジェクトによる持続的まちづくりに関
[44] する研究-熊本市新町を事例として, 日本建築学会九州支部研究報告, No.48, pp.429-432.2009.03
- 水内俊雄, コルナトウスキヒェラルド, キーナーヨハネス: 都市大阪の磁場-変貌する
[45] まちの今を読み解く-, OMUP ブックレット No.54, 大阪市立大学都市研究プラザ, 2015
- 高林洋臣他, 『いま、都市をつくる仕事』, 日本都市計画学会関西支部 次世代の都市
[46] をつくる仕事研究会編, 学芸出版, pp.81-89, 2011

- [47] 大阪市, 平成 22 年国勢調査 町丁目別の集計結果
<http://www.city.osaka.lg.jp/toshikeikaku/page/0000214425.html> (2016.8.10.閲覧)
- [48] 大阪市, 国勢調査 (町丁目別の集計結果) (1995 年~2010 年) (2016.10.10.閲覧)
http://www.city.osaka.lg.jp/shisei_top/category/1756-7-1-0-0.html
- [49] 千島土地, 『千島土地株式会社設立 100 周年記念誌』, 2012.08
- [50] 近代化産業を未来に活かす地域活性化実行委員会, 北加賀屋レポート(北加賀屋のいまむかし), 2010.03
- [51] KCV 拠点マップ
<http://www.chishimatochi.info/found/index.php/programs> (2015.6.26.閲覧)
- [52] 大阪市住之江区役所 政策推進室 (2015.6.18.閲覧)
<http://www.city.osaka.lg.jp/suminoe/page/0000175490.html>
- [53] 北加賀屋駅周辺の家賃 (2015.10.26.閲覧)
<http://www.athome.co.jp/chintai/osaka/kitakagaya-st/list/>
- [54] 北加賀屋つくる不動産 http://www.chishimatochi.info/found/?post_type=estate
 (2015.6.26.閲覧)
- 芝川能一, 北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想ー空き家、空き工場を創造活動の場
- [55] にー, 2012 年度第 5 回都市環境デザインセミナー記録
<http://www.gakugei-pub.jp/judi/semina/s1207/> (2015.6.18.閲覧)
- [56] おおさか創造千島財団 HP: <http://www.chishimatochi.info/found/index.php/programs>
 (2016 年 11 月 6 日閲覧)
- [57] 小原啓渡 : 関西は創造的開発の創生先進地ー縮小社会を盛り上げるまちづくりの知恵ー
 大阪/北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想, 地域開発, Vol.576, 2012.09
- [58] 大阪市, 平成 22 年国勢調査 町丁目別の集計結果
<http://www.city.osaka.lg.jp/toshikeikaku/page/0000214425.html> (2016.8.10.閲覧)
- [59] 大阪市, 国勢調査 (町丁目別の集計結果) (1995 年~2010 年)
http://www.city.osaka.lg.jp/shisei_top/category/1756-7-1-0-0.html (2016.10.10.閲覧)
- [60] 大阪市此花区役所編, 『此花区史』, 大阪市此花区三十周年記念事業委員会, 1955
- [61] 「此花アーツファーム」 HP <http://konohana-artsfarm.net/> (2016.4.10.閲覧)
- [62] 梅香・四貫島地区周辺の家賃 (2016.4.10.閲覧)
http://suumo.jp/chintai/osaka/sc_osakashikonohana/oz_27104007/
- [63] オモシロ物件紹介ホームページ参照 <http://pos-lab.com/tour.html> (2016.8.10.閲覧)
- [64] 大阪日日新聞、「ニュー下町へいらっしやい」、2014.3.28

図表リスト

1) 図リスト

図 1	論文の構成	p.13
図 2-1	大阪市内の住之江区・北加賀屋地区の位置	p.18
図 2-2	北加賀屋地区の人口変動推移	p.18
図 2-3	KCV 構想における各活動拠点の配置	p.22
図 2-4	活動拠点の様子	p.23
図 2-5	KCV 構想における事業形態・資金の流れ	p.25
図 2-6	地域交流	p.29
図 2-7	「KCV 構想」の拠点マップ	p.29
図 2-8	当該地区の活動を知ったきっかけ	p.32
図 2-9	入居を決めた要因	p.32
図 2-10	居住・活動の満足度	p.32
図 2-11	他アーティストとの交流	p.33
図 2-12	今後この地区が持続するために必要なこと	p.33
図 2-13	改修工事における内訳の集計(外部)(N=12,複数回答)	p.36
図 2-14	改修工事における内訳の集計(内部)(N=12,複数回答)	p.36
図 2-15	自己改修による間取りの変化と写真（ヒアリングにより作成）	p.37
図 2-16	回答者の属性-年齢・居住地・職業(N=155)	p.38
図 2-17	旧名村造船所跡の訪問有無（N=155）	p.39
図 2-18	今後の参加意向（N=155）	p.39
図 2-19	旧名村造船所の印象評価（年齢層ごとと平均値）	p.40
図 2-20	KCV 構想の認知	p.42
図 2-21	KCV 構想を知ったきっかけ	p.42
図 2-22	アーティストの居住に対する賛否	p.42
図 2-23	KCV 構想の継続への期待度	p.42
図 3-1	大阪市内の此花区・梅香・四貫島地区の位置	p.51
図 3-2	梅香・四貫島地区の人口変動推移	p.52
図 3-3	梅香・四貫島地区における活動拠点の配置	p.56
図 3-4	活動拠点の様子	p.59
図 3-5	まちづくり活動における入居促進の枠組みと事業形態	p.61
図 3-6	「四貫島 PORT」の改修事例	p.63
図 3-7	入居前の認知度(N=10)	p.67
図 3-8	当該地区の活動を知ったきっかけ(N=10)	p.67
図 3-9	入居を決めた要因（複数回答 N=26）	p.68
図 3-10	居住・活動の満足度(N=10)	p.68
図 3-11	他アーティストとの交流(N=10)	p.69
図 3-12	今後この地区が持続するために必要なこと（N=10）	p.69
図 3-13	改修工事における内訳の集計(外部)(N=8,複数回答)	p.72

図 3-14	改修工事における内訳の集計(内部)(N=8,複数回答)	p.72
図 3-15	回答者の属性-年齢・居住地・職業(N=71)	p.73
図 3-16	イベントについての評価 (N=68)	p.74
図 3-17	空き家・倉庫などの活用の評価(N=68)	p.74
図 3-18	興味のあるプログラム(N=71)	p.75
図 3-19	訪問経験・今後参加意向(N=71)	p.75
図 3-20	アーティスト居住への賛否(居住地ごと) (N=71)	p.75
図 3-21	アーティスト居住への賛否(年齢ごと) (N=71)	p.75
図 3-22	持続への期待(居住地ごと) (N=71)	p.75
図 3-23	持続への期待(年齢ごと) (N=71)	p.75

2) 表リスト

表 2-1	北加賀屋地区における地域基礎情報	p.18
表 2-2	運営主体へのインタビュー調査の概要	p.19
表 2-3	インタビュー調査の質問内容	p.20
表 2-4	アンケート調査の質問内容	p.21
表 2-5	KCV 構想における活動拠点の形成プロセス	p.23
表 2-6	「近代化産業遺産を未来に活かす地域活性化委員会」の概要	p.26
表 2-7	北加賀屋駅周辺物件と KCV 構想対象物件の平均家賃の比較	p.26
表 2-8	KCV 構想における活動拠点の運営形態	p.27
表 2-9	KCV 構想における活動拠点へのインタビュー結果	p.34
表 2-10	4つの因子と各因子負荷量	p.40
表 2-11	旧名村造船所の印象評価(年齢層ごと平均値)	p.40
表 2-12	旧名村造船所の印象評価(居住地ごと平均値)	p.40
表 2-13	旧名村造船所の活用評価(年齢層ごと平均値)	p.40
表 2-14	旧名村造船所の活用評価(居住地ごと平均値)	p.40
表 3-1	梅香・四貫島地区における地域基礎情報	p.52
表 3-2	運営主体へのインタビュー調査の概要	p.53
表 3-3	活動拠点入居者へのインタビュー調査の概要	p.54
表 3-4	インタビュー調査の質問内容	p.54
表 3-5	アンケート調査の概要	p.55
表 3-6	梅香・四貫島地区における活動拠点の概要と形成プロセス	p.59
表 3-7	「お試し暮らし」の体験者のコメント。	p.62
表 3-8	梅香・四貫島周辺物件と当該活動における対象物件の平均家賃の比較	p.63
表 3-9	空き家活用の事業形態	p.65
表 3-10	活動拠点入居者へのヒアリング結果	p.70

資料

- 資料 1__北加賀屋の来訪者へのアンケート用紙
- 資料 2__北加賀屋の入居者へのアンケート用紙
- 資料 3__梅香・四貫島の来訪者へのアンケート用紙
- 資料 4__梅香・四貫島の入居者へのアンケート用紙

資料 1__北加賀屋の来訪者へのアンケート用紙

クリエイティビティを用いた地域再生に関する調査 アンケートのお願い

私ども大阪大学大学院の建築・都市形態工学領域では、クリエイティビティによる地域再生に関する研究をしています。今回、その一環として、北加賀屋における北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ（KCV）を事例として、北加賀屋内のイベントへ参加した方を対象にアンケート調査を行っています。

今回の調査は、クリエイティビティによる地域再生を考えるための手がかりを得ることが目的です。アンケートは統計的に処理しますので、回答して頂きました皆様にご迷惑をおかけすることは一切ございません。また、この調査結果は学術研究にのみに使用し、他の目的で利用することは一切ございません。

お忙しいところ誠に恐縮ですが、アンケートにご協力くださいますようお願い申し上げます。

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2 番 1 号
大阪大学大学院工学研究科
地球総合工学専攻
建築・都市形態工学領域
担当：李 ロウン（イ ロウン）

1. 今までクリエイティブセンター大阪(CCO)を訪問したことがありますか？

- ① ある(回) ② 本日が初めて

1-1. 過去、該当施設を訪問した目的(複数選択可)

- ①会場内のアートイベント観覧 ②該当施設の見学ツアー ③シンポジウム・教育関連
④イベント企画・参加 ⑤その他()

1-2. 本日、該当施設・イベントに来訪したきっかけ

- ① 広告物やポスタ ② 公演やイベント情報 ③ ネット ④ 知人の勧誘
⑤ その他()

2. 該当施設にしている質問

旧名村造船所だったこと	① 知っていた	② 知らなかった
経済省の「近代化産業遺産」としての登録されたこと	① 知っていた	② 知らなかった
アートのスペースとして活用されていること	① 知っていた	② 知らなかった

3. 旧名村造船所跡をアートイベントの会場としての活用についての評価

項目	とても悪い (ない)	普通	とても良い (ある)		
旧工場を残していること	①	②	③	④	⑤
アート係会場で活用していること	①	②	③	④	⑤
該当施設の地域とのつながり	①	②	③	④	⑤
該当施設の歴史的価値	①	②	③	④	⑤

3-1. その他、該当施設への印象や意見をご自由にご記入してください。

--

4. 今後該当施設がどのようなになってほしいですか？

- ① 現在のようにアートイベントのための施設 ② 新しい使い方で改修
③ 近代化産業遺産として保存すべき ④ 取り壊して新築
⑤ その他()

5. 「北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想」についてご存知ですか？

- ① 知っている(1-1 の質問に) ② 聞いたことはある(1-1 の質問に)
③ 知らない(1-2 の質問に)

① 広告物やポスタ ② 公演やイベント情報 ③ ネット ④ 知人
⑤ その他()

① ある (5-2-1 に) ② ない (p.3 問 6 に)

スペース名	知っている	訪問したことがある わるい _____ いい	訪問 回数
クリエイティブセンター大阪 (旧名村造船所跡)		① ② ③ ④ ⑤	
コーポ北加賀屋		① ② ③ ④ ⑤	
鞆鞆館		① ② ③ ④ ⑤	
ギャラリー創造		① ② ③ ④ ⑤	
あしま絵画教室		① ② ③ ④ ⑤	
Co.to.hana		① ② ③ ④ ⑤	
ク・ビレ邸		① ② ③ ④ ⑤	
藝術中心●カナリヤ条約		① ② ③ ④ ⑤	
♪ gallery		① ② ③ ④ ⑤	
隠れ屋 1632 秘密基地		① ② ③ ④ ⑤	
AIR 大阪		① ② ③ ④ ⑤	
CAFÉ DJANGO		① ② ③ ④ ⑤	
ギニ乗ジテ		① ② ③ ④ ⑤	
北加賀屋みんなのうえん		① ② ③ ④ ⑤	

① 展示 ② 演劇・パフォーマンス ③ 音楽公演 ④ 地域イベント
⑤ その他（イベント名など： ）

① 肯定的 ② どうでもいい ③ 否定的

① 町中に若者が増えるので ② 空家が少なくなるので

③ 街のイメージが良くなるため ④ アートに接する機会が増加するため

⑤ その他（ ）

6-2. 否定的に思う場合、その理由は何ですか？

- ① 音楽公演やパフォーマンスが行われる騒音の発生
② 訪問客(外人)の増加 ③ 治安の問題 ④ 交通渋滞の問題
⑤ その他 ()

7. あなたは北加賀屋で以下のようなことについて感じたことがありますか？(複数選択可)

- ① イベントや展示を見に来た外部の訪問者にふれることで、刺激や自信を得る
- ② アート作品やイベントを通して、地域での自然や生活の素晴らしさを感じる
- ③
- ④

8. これからの北加賀屋内のアートイベントに参加する意向がありますか？

- ① とてもそうだ ② そうだ ③ ふつう ④ そうではない ⑤ とてもそうではない

8-1. どのようなプログラムがあれば、参加したいと思いますか？

--

9. 「北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想」の今後持続されることを期待しますか？

- ① 期待する ② わからない ③ 期待しない

9-1. その理由をご記入ください。

--

10. 「北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想」がうまく持続するために必要なことは何だと思いますか？（複数選択可）

- [illegible]

11. [アート活動による地域活性化] についてどう考えていますか？

- ① いいと思う ② よくないと思う

11-1. 良いと思う場合、その理由は何ですか？（複数選択可）

- ① 経済的な活性化につながるため
 ② 一般住民が芸術・文化に接する機会が増えるため
 ③ 観光客や訪問客の増加で町が賑やかになるため
 ④ アーティストの活動や作品が町を肯定的に変化させると思うため
 ⑤ その他()

11-2. 良くないと思う場合、その理由は何ですか？（複数選択可）

- ① あまり経済的効果はなさそうなので
 ② 来訪者が増えることでまちの治安が悪くなりそうなので
 ③ お金や時間がかかりかかると思うので
 ④ その他()

12. あなたは通常芸術・文化などに興味があるほうですか？

- ① とてもある ② どちらかといえばある ③ どちらかといえはない ④ ない

◎ 基礎調査

■ ご回答いただく方についてお尋ねします。該当する項目番号にチェックしてください。

性別	①男性 ②女性
年齢	① 19歳以下 ② 20代 ③ 30代 ④ 40代 ⑤ 50代 ⑥ 60代 ⑦ 70代 ⑧ 80代以上
職業	① 学生 ② 会社員 ③ 公務員 ④ 自営業 ⑤ 主婦 ⑥ 無職 ⑦ その他()
居住地	① 北加賀屋1丁目 ② 北加賀屋2丁目 ③ 北加賀屋3丁目 ④ 北加賀屋4丁目 ⑤ 北加賀屋5丁目 ⑥ その他(具体的な市町名:)
居住経歴	北加賀屋内に居住している方のみ回答 ① 1年未満 ② 1年～3年未満 ③ 3年～5年未満 ④ 5年～10年未満 ⑤ 10年～15年未満 ⑥ 15年～20年未満 ⑦ 20年以上
居住種別	① マンション ② 戸建て ③ アパート ④ 下宿 ⑤ その他()
勤務先	① 北加賀屋1丁目 ② 北加賀屋2丁目 ③ 北加賀屋3丁目 ④ 北加賀屋4丁目 ⑤ 北加賀屋5丁目 ⑥ その他(具体的な市町名:)
勤務経歴	北加賀屋内で勤務している方のみ回答 ① 1年未満 ② 1年～3年未満 ③ 3年～5年未満 ④ 5年～10年未満 ⑤ 10年～15年未満 ⑥ 15年～20年未満 ⑦ 20年以上

資料 2__北加賀屋の入居者へのアンケート用紙

クリエイティビティを用いた地域再生に関する調査 アンケートのお願い

私ども大阪大学大学院の建築・都市形態工学領域では、クリエイティビティによる地域再生に関する研究をしています。今回、その一環として、北加賀屋における北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ（KCV）を事例として、北加賀屋内のイベントへ参加した方を対象にアンケート調査を行っています。

今回の調査は、クリエイティビティによる地域再生を考えるための手がかりを得ることが目的です。アンケートは統計的に処理しますので、回答して頂きました皆様にご迷惑をおかけすることは一切ございません。また、この調査結果は学術研究にのみに使用し、他の目的で利用することは一切ございません。

お忙しいところ誠に恐縮ですが、アンケートにご協力くださいますようお願い申し上げます。

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2 番 1 号
大阪大学大学院工学研究科
地球総合工学専攻
建築・都市形態工学領域
担当：李 ロウン（イ ロウン）

北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想(KCV)についての質問

1. 北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想での活動内容を教えてください。

1-1 あなたの活動はどのような分野ですか？

①視覚アート ②パフォーマンス ③文学 ④企画及び展示 ⑤その他 _____

1-2 あなたは北加賀屋クリエイティブ・ビレッジの空間をどのような目的で使っていますか？

①居住 ②アトリエ ③仕事場 ④公共空間 ⑤展示・公演空間

⑥その他 _____

1-3 あなたは入居前、北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想についてご存知でしたか？

① 全然知らなかった ② 聞いたことあった ③ 知っていた ④ よく知っていた

1-3-1 どの経路でこの企画を知りましたか？

①入居していた知人を通して ②クリエイティブ・ビレッジ構想(千島土地)を通して

③メディアを通して ④アートプロジェクトを通して ⑤その他 _____

1-4 参加(入居)された動機は何ですか？

① 安い家賃 ② 他アーティストとの交流の機会 ③ 交通の便利性 ④ 自由な雰囲気

⑤ 作品販売などの消費市場と近い(作品活動のメリット) ⑥ その他 _____

1-5 北加賀屋への入居前はどこで活動しておられましたか？

_____都・道・府・県 _____市・町

1-6 あなたは北加賀屋クリエイティブ・ビレッジで他のアーティストとの交流活動を良くされますか？

① 全然そうではない ② どちらかといえば、そうではない ③ 普通

④ どちらかといえば、そうだ ⑤ とてもそうだ

(週 _____ 回 / _____ 月 _____ 回)

2. 居住している建物について教えてください。

2-1 建物の所有状況

住所	北加賀屋 _____ 丁目 _____ 番
建物の権利関係	①所有 ②賃貸 ③その他 _____
賃貸の場合の所有者	①千島土地(株) ②旧住民 ③その他 _____
物件の管理者	①賃貸者 ②千島土地(株) ③自治体 ④その他 _____

2-2 建物の利用状況

- ① 建物の階数：_____階 ②部室の数：_____室
- ③ キッチン ☐なし ☐ありー【専用・共用】_____（個）団体（組織）で共用している。
- ④ トイレ ☐なし ☐ありー【専用・共用】_____（個）団体（組織）で共用している。
- ⑤ 浴室 ☐なし ☐ありー【専用・共用】_____（個）団体（組織）で共用している。
- ⑥ その他、共用している空間がありましたら、自由記入してください。

2-3 賃貸契約上の改造制限がありますか？

- ①ある → その内容：_____ ②ない

2-4 改修工作进行了か？

- ①はい（以下の表にチェックしてください） ②いいえ ③わからない

【改修内容】

	箇所	ある	なし	何の改修をしましたか？						
				除去	増設	位置変更	部材の変更	デザイン・形状	材質・色彩	その他
外観	ドア									
	窓									
	屋根									
	玄関									
	外壁									
内部	内壁									
	内装									
	天井									
	床									
	キッチン									
	トイレ									
	階段									
	押し入れ									
	ロフト									
	仕切り									

2-4 改修工事内容の決定とその負担は誰がしていますか？（複数回答可）

【改修内容の決定】①自由に ②家主 ③家主と相談 ④その他 _____

【改修費用の負担】①自己負担 約 _____ 円 ②家主 ③助成金 ④その他 _____

3. 北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想(KCV)についてのご意見を教えてください。

3-1 現在北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想での活動の満足度

項目	とても不満		普通		とても満足
生活環境	①	②	③	④	⑤
交通環境	①	②	③	④	⑤
他のアーティストとの交流	①	②	③	④	⑤
行政の支援	①	②	③	④	⑤
展示・公演などの作品活動	①	②	③	④	⑤
地域との連携・交流	①	②	③	④	⑤
KCV の雰囲気	①	②	③	④	⑤

3-2 【自由記入】北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想での活動のメリットは何ですか？

(3-1 でとても満足、満足を選んだ方はその理由についても書いてください)

3-3 【自由記入】北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想での活動のデメリットは何ですか？

(3-1 で不満、とても不満、不満を選んだ方はその理由についても書いてください)

3-4 現在の活動(展示、イベントなど)のための資金はどうしていますか？（複数回答可）

①作品の販売 ②バイト ③助成金(財団/組織名: _____)

④その他 _____

3-5 北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想での活動を続けていくために何が必要ですか？（複数回答可）

①アーティスト間の交流 ②助成金 ③地元自治会の協力 ④地域住民の参加

⑤その他 _____

3-6 【自由記入】千島土地さん(KCV)に対する要望事項はありますか？

3-7 【自由記入】地元自治体・行政に対する要望はありますか？

3-8 今後、北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想が発展するには何が必要ですか？

- ①アーティスト間の交流 ②造成金 ③地元自治会の協力 ④地域住民の参加
⑤地域(北加賀屋エリア)の広報 ⑥その他 _____

3-9 将来移転する可能性はありますか、その場合はどこを希望しますか？

- ①ある 地域名: _____ ②ない ③わからない

3-9-1 移転したい理由(複数回答)

- ①生活環境の不快適 ②建物の老朽化 ③家賃が高い ④公共施設の不足 ⑤交通の不便
⑥作業しにくい ⑦近隣との関係 ⑧その他 _____

4. アート活動や文化芸術を用いた地域活性化についてどう思いますか？

- ① 芸術と地域活性化は関係ない
② 芸術が手段になることが嫌だ
③ 芸術を用いて地域を改善することは良い
④ どうでもいい
⑤ その他 _____

4-1. 【自由記入】そのように思う理由は何ですか？

北加賀屋の街についての質問

5. 北加賀屋まちの魅力度を評価してください。

(評価の程度)

5 そう思う / 4 ややそう思う / 3 ふつう / 2 ややそう思わない / 1 そう思わない

視点	項目	評価
美観	街並みのきれいなまち	
	公害が少なく空気や水がきれいなまち	
	生活環境がよく清潔できれいなまち	
	まちの顔となる通りがあるまち	
	優れた景観のあるまち	
	景観を損なう看板や貼り紙がないまち	
活気 ・ 賑わい	行き交う人が活気あふれているまち	
	商店街が賑わっているまち	
	地元を支える産業があるまち	
	賑わいのある祭りがあるまち	
	学生などの若者が集まり賑やかなイメージのあるまち	
	市民のエネルギーが感じられるまち	
	庶民的なまち	
	地元の特産品があるまち	
利便性	道路や交通の便がよいまち	
	買い物に便利なまち	
	観光地へのアクセスが容易なまち	
	主要地点への案内(サイン)が分かり易いまち	
	主要地点に駐車場が整備されているまち	
	駅周辺に駐輪場が整備されているまち	
環境	山・川など自然が豊かなまち	
	公園、スポーツ・レジャー施設が整備されているまち	
	生活文化、芸術文化の高いまち	
	古い街並みなどが保存されているまち	
	観光資源に恵まれたまち	
	緑や花が多くやすらぎのあるまち	

	閑静な住宅地のあるまち	
	楽しく回遊することができるまち	
	人のよさや優しさが感じられるまち	
	おいしい食事のできる場所があるまち	
治安・福祉	主要施設などがバリアフリー化されているまち	
	歩きやすいまち	
	交通事故が少ない	
	犯罪が少ない	
	急に病気になっても安心	
	保健・福祉施設が充実	
	災害や渇水などが少ない	

◎ 基礎調査

■ ご回答いただく方についてお尋ねします。該当する項目番号にチェックしてください。

問 1. あなたの性別はどれですか？

- ① 男性 ② 女性

問 2. あなたの年齢は以下のどれに該当しますか？

- ① 19 歳以下 ② 20 代 ③ 30 代 ④ 40 代 ⑤ 50 代 ⑥ 60 代
⑦ 70 代 ⑧ 80 代以上

問 3. あなたは北加賀屋の中、どこで賃貸していますか？

- ① 北加賀屋 1 丁目 ② 北加賀屋 2 丁目 ③ 北加賀屋 3 丁目
④ 北加賀屋 4 丁目 ⑤ 北加賀屋 5 丁目
⑥ その他(具体的な市町名：)

問 4. あなたの主な通勤手段は何ですか？

- ① 徒歩 ② 自動車 ③ バス ④ 電車 ⑤ 自転車 ⑥ タクシー
⑦ 原付 ⑧ その他()

問 5. あなたはどこに住んでいますか？

- ① 北加賀屋 1 丁目 ② 北加賀屋 2 丁目 ③ 北加賀屋 3 丁目
④ 北加賀屋 4 丁目 ⑤ 北加賀屋 5 丁目
⑥ その他(具体的な市町名：)

5-1. 現住所に住んでどのくらい経ちましたか？

- ① 1 年未満 ② 1 年～3 年未満 ③ 3 年～5 年未満
④ 5 年～10 年未満 ⑤ 10 年～15 年未満
⑥ 15 年～20 年未満 ⑦ 20 年～25 年未満
⑧ 25 年～30 年未満 ⑨ 30 年以上

問 6. あなたが居住している建物の種別を以下から選んでください。

- ① マンション ② 戸建て ③ アパート ④ 下宿 ⑤ その他()

資料 3__梅香・四貫島の来訪者へのアンケート用紙

クリエイティビティを用いた地域再生に関する調査 アンケートのお願い

私ども大阪大学大学院の建築・都市形態工学領域では、クリエイティビティによる地域再生に関する研究をしております。今回、その一環として、此花区における「此花アーツファーム」を事例として、此花内のイベントへ参加した方を対象にアンケート調査を行っています。

今回の調査は、クリエイティビティによる地域再生を考えるための手がかりを得ることが目的です。

アンケートは統計的に処理しますので、回答して頂きました皆様にご迷惑をおかけすることは一切ございません。また、この調査結果は学術研究にのみに使用し、他の目的で利用することは一切ございません。

お忙しいところ誠に恐縮ですが、アンケートにご協力くださいますようお願い申し上げます。

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2番1号

大阪大学大学院工学研究科

地球総合工学専攻

建築・都市形態工学領域

担当：李 ロウン（イ ロウン）

◎ Email：lee_lowoon@arch.eng.osaka-u.ac.jp

◎ Tel：080-4249-6014

問 5-2. 空き家・倉庫などの活用についての評価

	非常に	やや	どちらでもない	やや	非常に	
楽しい						つまらない
新鮮な						ありがちな
アートに適している						アートに適していない
効果的						いまいち
快適						不快
開放的						閉鎖的
洗練された感じ						野暮な感じ
都会的						下町的
暗い						明るい
上手い						まずい
特徴がない						統一感がある
身近な						なじみのない
美しい						醜い

問 5-3. その他、このイベント又はまちについての印象や意見をご自由にご記入してください。

問 6. 今後の此花エリアのイベントにも参加する

① 非常にある ② ある ③ あ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

6-1. 今後どのようなプログラムがあれば、参加したいと思いますか?

▼次のページに続きます

「此花アーツファーム」についての質問

産業構造の変化と高齢化が進み、空き家の目立つ大阪市此花区の梅香・四貫島エリアを舞台に、地元の不動産会社と協働して、「夢を持った若者を応援する街 梅香・四貫島」というテーマを掲げて、アーティストやデザイナーなど創造的な活動を志している若者が集まる仕掛けづくりと、それらの活動が地域で連鎖し、街の魅力へと繋がり広がっていくように「此花アーツファーム」を展開しています。

問7. 上記の「此花アーツファーム」についてご存知でしたか?

- ① 知っていた 【7-1 の質問に】 ② 聞いたことはある 【7-1 の質問に】
③ 知らなかった 【問8に】

7-1.「此花アーツファーム」を知ったきっかけは何ですか？

- ① 広告やポスターを見て ② SNS などネットを通して ③ 知人を通して
④ 元々アートに興味深いので ⑤ その他()

問 8. 此花にアーティスト又はクリエイターが居住・活動をしていることについてどう思いますか？

- ① とても肯定的 ② 肯定的 ③ わからない ④ 否定的 ⑤とても否定的

8-1. そのように思う理由をご記入ください。

--

問 9. 「此花アーツファーム」が今後持続されることを期待しますか?

- ①とても期待する ②期待する ③わからない ④期待しない ⑤全く期待しない

9-1. そのように思う理由をご記入ください。

--

問 10. 「此花アーツファーム」がより発展するためにどんなことが必要だと思いますか？

- ① アーティスト、住民、行政らの協力・交流 ② 地域(此花)の活発な広報活動
③ 空き家・空き工場など既存ストックのよりうまい活用
④ イベントを増やす努力 ⑤ 行政の支援 ⑥ 地域住民の支援
⑦ その他()

▼次のページに続きます

【アート活動による地域活性化】について質問

問 11. [アート活動による地域活性化] についてどう思いますか？

① とてもいいと思う ② いいと思う ③ わからない ④ よくないと思う ⑤ とてもよくないと思う

11-1. 良いと思う場合、その理由は何ですか？（複数選択可）

- ① 経済的な活性化につながると思うため
 ② 一般住民がアートに接する機会が増えると思うので
 ③ 観光客や訪問客の増加で町が賑やかになるため
 ④ アーティストの活動や作品が町を肯定的に変化させると思うため
 ⑤ その他()

11-2. 良くないと思う場合、その理由は何ですか？（複数選択可）

- ① あまり経済的効果はなさそうなので ② アートに興味がないので
 ③ 来訪者が増えることでまちの治安が悪くなりそうなので
 ④ お金や時間がかかりかかると思うので
 ⑤ その他()

問 12. あなたは通常芸術・文化などに興味があるほうですか？

① とてもある ② どちらかといえばある ③ どちらかといえばない ④ ない

12-1. 芸術・文化に興味がある場合、特にどのようなジャンルに興味がありますか？

①音楽 ②美術 ③工芸 ④ファッション ⑤演劇 ⑥建築 ⑦その他()

◎ 基礎調査

■ ご回答いただく方についてお尋ねします。該当する項目番号にチェックしてください。

性別	① 男性 ② 女性
同伴者	① 一人で ② 家族と(人/□子供つれ) ③ お友達と(人) ④ その他()
年齢	① 19 歳以下 ② 20 代 ③ 30 代 ④ 40 代 ⑤ 50 代 ⑥ 60 代 ⑦ 70 代 ⑧ 80 代以上
職業	① 学生 ② 会社員 ③ 公務員 ④ 自営業 ⑤ 主婦 ⑥ 無職 ⑦ その他()
居住地	① 此花区内 ② 大阪市内 ③ 大阪府内 ④ その他(具体的な市町名:)
居住経歴	此花区内に居住している方のみ回答 ① 1 年未満 ② 1 年～3 年未満 ③ 3 年～5 年未満 ④ 5 年～10 年未満 ⑤ 10 年～15 年未満 ⑥ 15 年～20 年未満 ⑦ 20 年以上
居住種別	① マンション ② 戸建て ③ アパート ④ シェアハウス ⑤ その他()

ご協力ありがとうございます。

資料 4_梅香・四貫島の入居者へのアンケート用紙

学術論文作成のための調査

創造的活動による地域再生に関する研究

アンケート・ヒアリングご協力をお願い

大阪大学大学院 工学研究科 地球総合工学専攻
建築・都市形態工学領域

私ども大阪大学大学院の建築・都市形態工学研究室では、創造的活動による地域再生に関する研究に取り組んでおります。今回、その一環として、梅香・四貫島エリアを事例として取り上げ、研究調査を行っております。つきましては、梅香・四貫島エリアに関わっている方々にヒアリング調査のご協力を頂きたいお願い申し上げます。

今回の調査は、創造的活動による地域再生を考えるための手がかりを得ることが目的です。

アンケート及びヒアリングは統計的に処理しますので、回答して頂きました皆様にご迷惑をおかけすることは一切ございません。また、この調査結果は学術研究にのみ使用し、他の目的で利用することも一切ございません。

お忙しいところ誠に恐縮ですが、アンケート及びヒアリングにご協力下さいますようお願い申し上げます。

■調査責任者・連絡先

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2 番 1 号

大阪大学大学院工学研究科 地球総合工学専攻 建築・都市形態工学領域

指導教員 阿部 浩和

担当：イ ロウン （博士後期課程 2 年）

Email：sunroun@gmail.com

Mobile：080-4249-6014

梅香・四貫島エリアについての質問

1. 梅香・四貫島エリアでの活動内容を教えてください。

1-1 あなたの活動はどのような分野ですか？

①視覚アート ②パフォーマンス ③文学 ④企画及び展示 ⑤その他 _____

1-2 あなたはこの空間をどのような目的で使っていますか？（複数回答可）

①居住 ②アトリエ ③仕事場 ④公共空間 ⑤展示・公演空間
⑥その他 _____

1-3 あなたは入居前、此花アーツファーム構想についてご存知でしたか？

① 全然知らなかった ② 聞いたことあった ③ 知っていた ④ よく知っていた

1-3-1 どの経路でこのまちを知りましたか？

①入居していた知人を通して ②まちのイベント(みつけ！このはななど)を通して
③メディアを通して ④アートプロジェクトを通して ⑤その他 _____

1-4 入居された動機は何ですか？

① 安い家賃 ② 他アーティストとの交流の機会 ③ 交通の便利性 ④ 自由な雰囲気
⑤ 作品販売などの消費市場と近い(作品活動のメリット) ⑥ その他 _____

1-5 此花への入居前はどこで活動しておられましたか？

_____都・道・府・県 _____市・町

1-6 あなたはこのまちで他のアーティストとの交流活動を良くされますか？

① 全然そうではない ② どちらかといえば、そうではない ③ 普通
④ どちらかといえば、そうだ ⑤ とてもそうだ
(週 _____回 / _____月 _____回)

2. 居住している建物について教えてください。

2-1 建物の所有状況

住所	此花区 梅香/四貫島 _____丁目 _____番
建物の権利関係	①所有 ②賃貸(_____円/月) ③その他 _____
賃貸の場合の所有者	①政岡土地 ②個人オーナー ③その他 _____
物件の管理者	①賃貸者 ②政岡土地 ③その他 _____

2-2 建物の利用状況

- ① 建物の階数：_____階 ②部室の数：_____室
- ③ キッチン ☐ なし ☐ ありー【専用・共用】_____ (個)団体(組織)で共用している。
- ④ トイレ ☐ なし ☐ ありー【専用・共用】_____ (個)団体(組織)で共用している。
- ⑤ 浴室 ☐ なし ☐ ありー【専用・共用】_____ (個)団体(組織)で共用している。
- ⑥ その他、共用している空間がありましたら、自由記入してください。

2-3 賃貸契約上の改造制限がありますか？

- ①ある → その内容：_____ ②ない

2-4 改修工作进行了か？

- ①はい (以下の表にチェックしてください) ②いいえ ③わからない

【改修内容】

	箇所	ある	なし	何の改修をしましたか？						
				除去	増設	位置変更	部材の変更	デザイン・形状	材質・色彩	その他
外観	ドア									
	窓									
	屋根									
	玄関									
	外壁									
内部	内壁									
	内装									
	天井									
	床									
	キッチン									
	トイレ									
	階段									
	押し入れ									
	ロフト									
	仕切り									

2-4 改修工事内容の決定とその負担は誰がしていますか？（複数回答可）

【改修内容の決定】①自由に ②家主 ③家主と相談 ④その他 _____

【改修費用の負担】①自己負担 約 _____ 円 ②家主 ③助成金 ④その他 _____

3. 梅香・四貫島エリアについてのご意見を教えてください。

3-1 現在梅香・四貫島エリアでの活動の満足度

項目	とても不満	普通	とても満足
生活環境	①	②	③
交通環境	①	②	③
他のアーティストとの交流	①	②	③
行政の支援	①	②	③
展示・公演などの作品活動	①	②	③
地域との連携・交流	①	②	③
まちの雰囲気	①	②	③

3-2 【自由記入】梅香・四貫島エリアでの活動のメリットは何ですか？

(3-1 でとても満足、満足を選んだ方はその理由についても書いてください)

3-3 【自由記入】梅香・四貫島エリアでの活動のデメリットは何ですか？

(3-1 で不満、とても不満、不満を選んだ方はその理由についても書いてください)

3-4 現在の活動(展示、イベントなど)のための資金はどうしていますか？（複数回答可）

①作品の販売 ②バイト ③助成金(財団/組織名： _____)

④その他 _____

3-5 梅香・四貫島エリアでの活動(又は居住)を続けていくために何が必要ですか？（複数回答可）

①アーティスト間の交流 ②助成金 ③地元自治会の協力 ④地域住民の参加

⑤その他 _____

3-6 【自由記入】地元自治体・行政に対する要望はありますか？

3-8 今後、この地域が活性化もしくは持続するためには何が必要だと思いますか？（複数回答可）

- ①アーティスト間の交流 ②助成金 ③地元自治会の協力 ④地域住民との交流
⑤地域(梅香・四貫島エリア)の広報 ⑥その他 _____

3-9 将来移転する可能性はありますか、その場合はどこを希望しますか？

- ①ある 地域名： _____ ②ない ③わからない

3-9-1 移転したい理由（複数回答可）

- ①生活環境の不快適 ②建物の老朽化 ③家賃が高い ④公共施設の不足 ④交通の不便
⑤作業しにくい ⑥近隣との関係 ⑦その他 _____

4. アート活動や文化芸術を用いた地域活性化についてどう思いますか？

- ① 芸術と地域活性化は関係ない
② 芸術が手段になることが嫌だ
③ 芸術を用いて地域を改善することは良い
④ その他 _____

4-1. 【自由記入】そのように思う理由は何ですか？

お住まい・活動している街についての質問

5. 梅香・四貫島エリアの魅力度を評価してください。

(評価の程度)

5 そう思う / 4 ややそう思う / 3 ふつう / 2 ややそう思わない / 1 そう思わない

視点	項目	評価
美観	街並みのきれいなまち	
	公害が少なく空気や水がきれいなまち	
	生活環境がよく清潔できれいなまち	
	まちの顔となる通りがあるまち	
	優れた景観のあるまち	
	景観を損なう看板や貼り紙がないまち	
活気 ・ 賑わい	行き交う人が活気あふれているまち	
	商店街が賑わっているまち	
	地元を支える産業があるまち	
	賑わいのある祭りがあるまち	
	学生などの若者が集まり賑やかなイメージのあるまち	
	市民のエネルギーが感じられるまち	
	庶民的なまち	
	地元の特産品があるまち	
利便性	道路や交通の便がよいまち	
	買い物に便利なまち	
	観光地へのアクセスが容易なまち	
	主要地点への案内(サイン)が分かり易いまち	
	主要地点に駐車場が整備されているまち	
	駅周辺に駐輪場が整備されているまち	
環境	山・川など自然が豊かなまち	
	公園、スポーツ・レジャー施設が整備されているまち	
	生活文化、芸術文化の高いまち	
	古い街並みなどが保存されているまち	
	観光資源に恵まれたまち	
	緑や花が多くやすらぎのあるまち	

研究業績

1. 学術論文（査読あり）

- 李ロウン, 阿部浩和, 橋寺知子, 「工業衰退地周辺における創造的活動を起点とした地域再生の取り組み -梅香・四貫島地区を対象として-」, 日本建築学会計画系論文集, 第 82 巻, 第 736 号, p. 1499-1509, 2017 年 06 月
- 李ロウン, 阿部浩和, 福井美弥, 橋寺知子「産業遺産の利活用を契機とした芸術活動による自立的まちづくり事業の可能性 -北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想を事例として-」, 日本建築学会計画系論文集, 第 81 巻, 第 722 号, p. 909-919, 2016 年 4 月
- 李ロウン, 阿部浩和, 「工場跡の利活用に伴う文化芸術教育活動の現状と可能性」, 日本建築学会、建築教育研究論文報告集, No. 15 p. 21-26, 2016 年 1 月

2. 国際会議会議録掲載論文

- Hirokazu Abe, Lee Lowoon and Shan Xiaotong, "Brownfield regeneration through image branding - Case of Former Namura Dockyard -", German-Japan Workshop on Brownfield Regeneration 2015 (Osaka), 2015.3

3. 国内会議会議録

- 李ロウン、阿部浩和, 「創造的活動によるまちづくりと取り組み -大阪市梅香・四貫島の空き家活用を事例として-」, 日本建築学会大会学術講演会梗概集, No. 5440, pp891-892, 2016 年 08 月
- 阿部浩和、李ロウン、安福健佑, 「街路空間評価におけるディープラーニングの適用可能性」, 日本図学会秋季大会学術講演論文集, pp85-90, 2016 年 11 月
- 李ロウン、阿部浩和, 「アート活動による工場地区再生の現状と活用実態」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, No. 7448, pp963-964, 2013 年 8 月